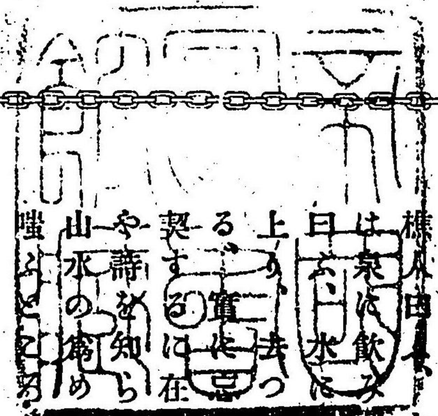


樵人曰く、泉に飲み山に居ること娯しい哉、雲悠々、鳥諧々、渴して
は泉に飲み饑ては果を食ふ、殊に爛柯の娯みありと、漁翁
曰く、水に棲むこと樂しい哉、波迢々、舟搖々、魚あり綸に
上り、一去つて酒に易ふべし、倦んでは閑鷗に伴ふて磯邊に睡
る、宜に意機の樂みありと、山水の娯樂は唯だ自から會心默
契するに在るのみ、他の人言を歷れば則ち其の眞を破る、樵
や詩を知らず、漁や歌を作らず、獨り何者の迂愚ぞ、徒らに
山水の奄めに其の註脚を作り灑々數百千言を成す、樵の漁の
嗤らひとなるだらずんば幸ひなること甚し。

明治三十二年七月念一、古道照顏處の西窓碧梧桐の下にて

麗水生　遲塚金太郎識

増補訂正日本名勝記の首に題す

目錄

湘南一帶の風光……一
江の島……二
鎌倉……七
金澤……一五
逗子、浦賀、三浦三崎……一八
大山石尊……二二
大磯……二三
箱根山……二五
伊豆の浦曲……三五
富士の高根……八三
田子の浦の風光……九九
多摩川の西岸……一一〇
碓氷の東……一一四
赤城山……一一四

榛名山伊香保……一一八
妙義山……一二二
峽中の山水……一二九
碓氷の西……一四五
善光寺……一五七
戸隱山……一六〇
日光山……一六五
鹽原山……一七七
那須七湯……一八三
白河關北……一八五
千賀の浦……一九四
平泉の中尊寺……二一三
八龍が湖、雄鹿の島……二三〇
房總一帶の海岸……二四一
筑波の東濱街道……二五九

日本名勝記

湘南一帶の風光

遲塚麗水著

雲も燃え波も沸き立つ夕榮の海の眞中に白帆行く見ゆとは曾て余が繪の島の龍窟を探り歸つて夕陽を負ふて塔より長き影法師を曳き七里の濱の軟沙を踏みて落暉相洋七十二灘の中に滿つる壯觀を看つゝ疎鴉殘鐘蕭々として鎌倉に入る時行吟したるものなりき、愛すべき湘南一帶の風光は繪の島あるが爲めに佳麗に鎌倉あるが爲めに壯嚴に大磯國府津逗子あるが爲めに明媚に金澤あるが爲めに優雅に三浦三崎あるが爲めに雄偉に誠に諸家の丹青を一帔の中に併せ看るの想あらしむ、其の繪の島の龍窟を探つて造化の巧を弄するに驚き更に七里の濱に沿ふて行程里餘新田義興奮戰して韁を絶ちしところを過り源九郎義經が俘を阿

兄に致し泣いて白旗山の暮雲を望み落托の征途に上りし腰越の村を過り新田義貞金装刀を投じて海龍王に禱りしの稲村が崎を望み終に源氏の古覇府を訪ひて風雨六百年の山河に俯仰し鶴が岡廟前の公孫樹さては二階堂が谷なる大塔の宮の幽されたまひし土窟の邊に低徊顧望し更に滝車に搭じて逗子の海水館に快浴して明媚の風光に對し横須賀軍港に艨艟碧瀾を壓して百尺高きの壯觀を看て浦賀に至り水には舟陸には車三浦三崎の尉が島を訪ふては古將軍が畫舫を浮べ美姫を載せ一世の豪興を擅まにしたるの跡を尋ね還て金澤に詣りて晴好雨奇の景を看る、其の娯しみや誠に悠々たるものあらん

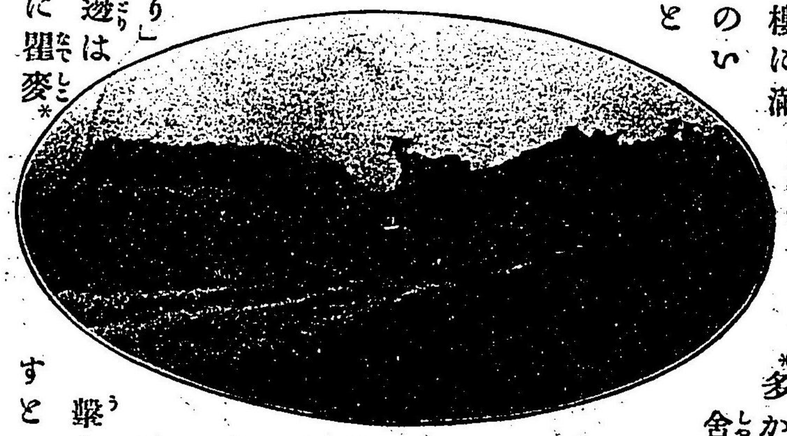
江の島

鵠沼○片瀬○龍口寺○江の島の風光○兒ヶ淵○龍窟○十二窟○東海道藤澤停車場より南一里半、鎌倉停車場よりすれば七里が濱を歷て西凡二里、旅館の重なるもの惠比壽屋、さぬきや、金龜樓等、鵠沼の海水旅館に鵠沼館、待潮館、東屋等あり藤澤停車場より人力車あり

藤澤の停車場より一里半にして幾し、途に鵠沼あり白砂青松其景また佳なり、夕陽繪の島の樓觀を射るの時は、喊に一幅金泥の圖畫なり、西には

富士、後は雨降山、水淺く汀遠ければ夏時は海水浴をなすべし、旅亭二三あり皆清潔松聲波語樓に滿つ、片瀨村に貫通するのいさゝ小川、川は村の名と同じく、宗尊親王の

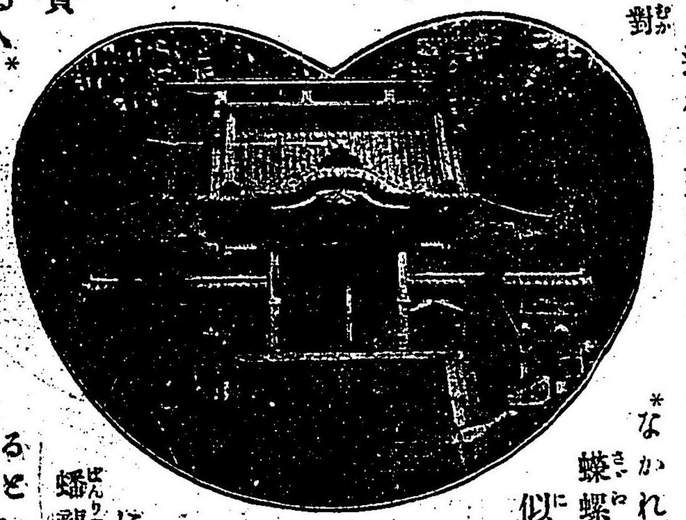
「歸り來てまた見んこともかた瀨川濁れる水のすまぬ世なれば」と歌ひしところ、風露繁きところ鹿の啼を聞いて西行法師の「柴松のくずのしげみに妻こめて砥上が原に小鹿なくなり」と歌ひしところ、川の邊は昔の砥上の原、昔は原に瞿麥*あるのみ



*多かりしと、今は則ち蟹莊蜑舍のみ、村の中なる龍の口の龍口寺は、僧日蓮が其の將に首斬れんとしたるとき、法華經の功德によつて風雨晦冥劍手が持つ所の刀三斷し終に難を免かれたりと云ひ傳ふる舊蹟なり、古松伽藍を護り中に日蓮の像あり、毎年九月十一二兩日信徒雲集し、鼓を擊ち題目を唱へ喧囂曉に徹すといふ、平時は唯松聲

七里濱

一路の軟沙車輪に聲なく一の華表を過ぐれば則はち海、沙路邐迤と繪の如き江の島に通ず、遙かに碧瓦粉壁を見る、全島皆な巖なり、老鬱葱たり、其の片瀬に對ふのところ稍々平夷、足指漸く仰ぎて邊津の宮に至る、此の間左右皆な旅館と割烹店、店婦等賽詣の人を見るや鳩のごとく迎へ視、燕のごとく滑かに語り甚だ喧噪なり、名物の貝細工、賣るもの價を二にす買ふ人其の曉舌に惑さる、*に一古碑あり僧良眞宋より齎らし來るところ、高さ五尺許り、雨淋風打蝸牛の亂篆の中僅かに大日本江島靈跡建寺之記の三行十一文字を讀むべ



龍口寺

*なかれ、廉にして美なるは蠑螺の壺燒、色は雲母に似て味ひ甘脆、邊津の宮は多紀津姫命市杵島姫の命多紀理姫の命を祀る、所謂江島の辨財天とは是、石磴苔冷かに廟宇華麗、廟の天井に繪く所の八方睨みの蟠龍は、古名家の筆に成るといふ、邊津の宮の後背

し、雲龍を匝らし刻す、碑腹の文字亦た剝落、其の僅かに存するところを看るに小楷掬すべし、行くこと數町兒が淵なるものあり、蒼巖削成すること數丈、下に亂礁あり急潮盤渦し激して飛雨を作る、傳へ曰ふ往昔鎌倉建長寺の廣德庵に沙門自休藏主といふものあり、陸奥信夫の里の人なり、一日江島に參詣して途に美少年に逢ふ、自休心動く、與に伴なひ行き其の名を問へば曰ふ鎌倉相承院の兒白菊と、自休慇懃を通せんことを求む、白菊肯せず、自休情禁ずる能はず、雨夜風晨往來す、白菊夜走りて江島に赴むき、扇を渡守の翁に與へて曰ふ、若我を趁ひ來りし人あらばこれを與へよと、終に石を抱いて深淵の中に沈む、少時して自休追ひ到り、渡守に問ふて其の扇を見れば、扇上和歌二首を寫す、其の一に曰ふ『白菊と信夫の里の人問はゞ思ひ入江の島と答へよ』と、自休長嗟し詩及び歌を作る、歌に曰ふ『白菊の花の情のふかき海に與に入江の島ぞうれしき』と、亦た淵に投じ

島幡子岩

採鮑

て死すと、路は漸く下りて海に入る、大石水に布き席を展るが如し、波の色縹碧なり、漁夫あり賽者を要して錢を乞ひ水に投じて鮑を採る、更に大岩の上を蝸附猿攀して板棧を渡れば則はち龍窟の洞口、

採鮑

窃然として海を呑んとす、板棧の下は亂石潮を吐呑し雹狼雨狂す、洞の口濶さ一丈有許、入ること數十歩、海氣の石膚に凝るもの紛々として人の衣袂を吹き巖華寂寞甚はだ幽遠なり、錢を投じて燈を買ひ路を照して進む、凡そ窟に入ること四十間にして洞は兩岐となる、一を胎藏界といひ一を金剛界といふ、洞の奥に大日如來を祀る、兩

壁の石自から佛魔禽獸の態をなす、日蓮の趺坐石あり、曰ふ日蓮此の石の上に坐して冥感し親から法華經を寫すと、別に無熱地あり清泉を湛ふ、洞の奥更に奥あり、人蒲伏して其の中に入るも終に其の奥を極めしものあらず、入ること久うして地底に海潮の聲を聞くと云。

鎌倉

腰越の滿福寺○七里ヶ濱○稻村ヶ崎○星月夜井○長谷觀音○大佛○鎌倉五山○由比ヶ濱○鶴岡八幡宮○白旗神社○頼朝の邸跡○北條九代邸○鎌倉宮○葛原神社○東海道

江之島洞窟

大船より横須賀線に移り第一次の停車場あるところ、江島よりすれば二里、旅館の重なるもの三橋、角屋、丸屋等、別に海濱院あり、洋風旅館なり外國人多く來り宿す

江島を出でゝ七里が濱の此方腰越の村あり、伽藍あり龍護山滿福寺といふ、落莫たる一寒寺なり、元暦の二年源九郎義經既に平族を西海に沈め凱旋して此處に至る、會ま讒者ありて鎌倉に入るべからず、義經惆悵し

臣辨慶に命じ疏を作りて寃を訴へしむ、世に腰越狀といふもの是なり、

滿福寺は當時義經の館せし所といふ、池あり浮萍淺水漣漪愁ふるがごとし、硯の池といふ、辨慶この水を硯に濺ぎて疏を書きしものと、池畔に辨慶腰掛の石なるものあり、寺を過れば則ち七里が濱、淨沙一路波瀾を帶びて遙かに覆荷の鏃樣をなせる稻村が崎の丘阜に連なり、曾て右府が千鶴を放ちたりしといひ傳る由比が濱に接す、稻村が崎、濱に亂礁あり、義貞の金裝刀を投せしところ、此の邊皆な北條足利の際の古戰場、斷鏃缺刀化して蝦蟹となりて橫行す、縉紳の別莊多し、之を過れば、則ち極樂寺の切通

鎌倉大佛

しなり、切通しを過れば星月夜の古井あり、老媼行客に錢を乞ふて水を賣る、水清冽なり、曰ふ昔し白晝井底に星影の依稀するを見る、土人一日過まつて庖刀を墜す、是れより星影なしと、所謂鎌倉十井の一、これを過ぎて長谷の觀音あり、海光山長谷寺と號す、本尊は長二丈六尺の十一面觀世音にして佛工春日の作るところと傳ふ、法幔深く垂れて晝尙昏く、香猊烟を吐いて搖曳して低迷す、長谷寺の北に大威山淨泉寺あり、高さに據つて靑銅の露佛を安置す、高さ三丈五尺、趺坐の周圍三丈五尺、此地聖武帝の時國分寺の在りしところ、像は建長四年の鑄造に係る、佛の胎內に六軀の觀世音及び彌陀三尊を置き、賽者は孔道より板棧を傳ふて佛の腹を探るを得べし、曾て問注所のありしところなりしといふ裁許橋の邊を歷て、扇谷の英勝寺を訪へば、山門崇高、後水尾帝宸筆英勝寺の三大字の額あり、元太田道灌の宅地、太田氏英勝院禪尼此處に念佛道場を開き、中ごろ絕えて水戸中納言頼房の女尼となつて再興す、寺に古佛多く西北に源氏山を負ひ境幽靜なり、其南鎌倉五山の第三寺龜谷山壽福寺あり、千光國師の開基、源頼義義家の大旆を停めしところと、佛殿に唐の陳和卿作るところの釋迦佛を安置す、寺傍古松風靜かなるところ

崖を穿つて畫窟を作り、窟中の四壁牡丹花を描く、彩色多くは剝落し更に岩華の幽香を吹くあり、中に頼朝及び室政子の塔あり、寺門の東南觀音山に登れば、老媼あり茶を賣る、危欄に凭りて眺望すれば五山、七谷、十井、十橋、七切通し、古覇府の形勝歴々として雙眸の中に入る、望夫の石あり曰ふ畠山重保將に由比が濱の陣に赴むかんとするや、其の妻別愁に禁えず、痛哭して終に此の石上に死す、故にて*幽憤水を絶ちて死せしところといふ、昔し窟邊に向陽庵なるものあり、世音を安ず、曰ふ景清の女薙髪して尼となり草庵を結びて父の冥福を禱りし所と、今はあらず、化粧坂の上南朝の忠臣藤原俊基を祀れる葛原神の廣さ方一丈數許、景清の土牢なるものあり、

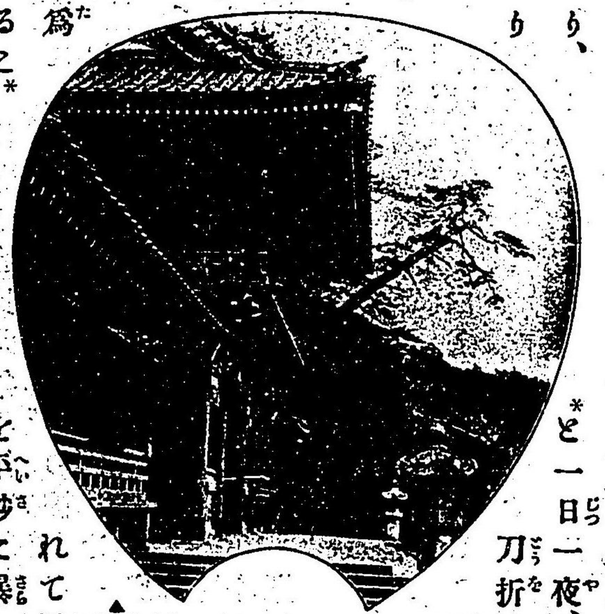
圓覺寺

*の名ありと、葛原岡に至る、此處に化粧坂あり、曾て西海より函致した る平氏諸將の首級を以て右府の實檢に備へたるより此名ありとぞ、路傍に惡七兵衛景清の

社あり、有名なる巨福山建長寺と瑞鹿山圓覺寺とは、碧瓦相望んで停車場を距る數町の西、小袋坂の邊に在り、建長寺は建長元年北條時頼の創建にして、宋の僧大覺禪師の開祖なり、樓門の扁額巨福山の三大字は寧一山の書するところ、巨字に一點を加ふるを以て呼で百貫點といふ、山門は宋の制を採り規摸崇高、樓の上昔し十六羅漢を置きしも多くは散逸して殘るもの七八軀のみ、長松數十章あり佛殿を護る、曰ふ應行作るところ一寸五分の地藏菩薩を安置すと、堂の東に觀音堂あり、嵩山門を入りて左すれば開山堂、堂後に佛光塔あり、山隈には開山坐禪窟一遍上人坐禪窟あり、宋の僧佛光禪師を

由比ヶ濱

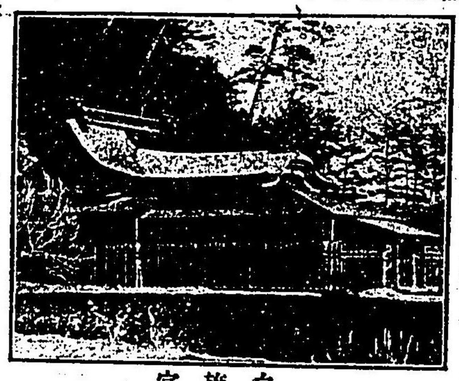
開山とす、寺門亦た宋制、後光嚴帝の宸額を掲ぐ、佛殿安ずるところ寶冠の釋迦佛、後光嚴帝の宸筆大光明寶殿五字の額あり、松間を行けば開山塔あり、佛光禪師の像を安ず、宿龍池水綠沈、龍の棲みしところか、妙香池今尚紅蓮白蓮の妙香を放つあり、佛日庵、坐禪窟、虎頭石、皆な詩あり題あり名あるもの、凡そこの兩寺、萬松晝靜かに青雨ふらんとす、石を撫して盤桓すれば、悠然として身の人間を去ること遠きを覺ゆ、長松由比が濱の白砂より延いて鶴が岡の八幡宮に至る、由比が濱は古覇府の時の演武場、曾て賴朝が千鶴を放ちしところ、和田義盛が白首驍勇、源家の爲めに忠憤を發し兒孫を率ゐて奮鬪するとき、新田義貞稻村が崎の巖頭より刀を投じ潮を却ぞけ干潟を涉りて殺到せしところ、今は松に傍ひ波に枕みて縉紳の別墅及び旅館あり、



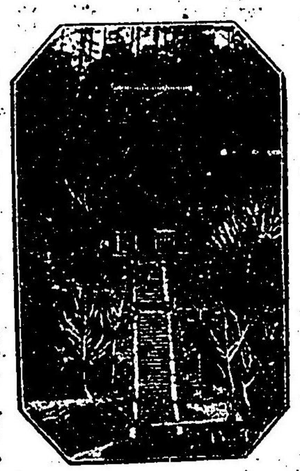
▲鼉　鎌倉八幡宮　▲馬

*と一日一夜、刀折れ屍を平砂に暴し

夏日は恰好の海水浴場にして都の士女を簇がらす、一の華居二の華居を過れば則ち八幡宮なり、池あり石鼓橋を架す、舞樂殿あり、舞樂殿を過ぐれば石磴面を壓して起る數十級、登り盡せば則ち廟門、良恕法親王の親筆八幡宮の額を掲ぐ、廊を廻る、丹碧晃燿甚はだ莊嚴なり、應仁天皇、神功皇后、大仲媛命を祀る、源賴義康平六年始めて由比が濱字鶴が岡に勸請し、建久四年源賴朝此の地に移す、石磴の左傍銀杏樹あり高さ數丈太さ數抱、幹より數乳を垂る、承久の元正月二十七日鶴が岡の別當公曉が將軍實朝の首を馘せし所なり、磴前の地は曾て靜が吉野山峯の白雲踏み分けて入りにし人を哀想して、威權烈霜の如き將軍の前に泣いて幾の苧環を歌舞せし舞殿の在り源右府を祀る、廟は黑漆を塗り光澤鑑すべし、曾て豊公が笑つて其の背を拊ちし右府の木主を安置せるところ、字小町なる北條九代邸の跡、今は唯だ伽藍の落寞たるのみ、實戒寺といふ、東南葛西が谷は古の東勝寺の在りしところにして實

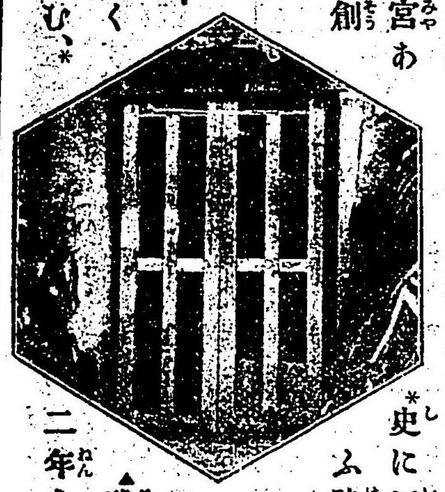


白旗宮



頼朝の墓

に元弘三年五月二十二日北條高時一族郎黨六百餘人の屠腹したるところ也、足利尊氏頼朝寺を此の地に移し寶戒寺と號し高時等の骨を瘞むと、青砥藤綱が墜錢を撈したる滑川を渡りて市塵蕭々、行き盡せば一望田疇これ頼朝の館趾、而して今東御門西御門の稱長磴を登りて山腹の坪地に頼朝の墓あり、墓は五輪塔、圍むに石欄を以てす、葛蘿之を掩ひ、蝸篆亂塗し屍蟬落葉多し、一代の豪傑も亦黄土、傍ら島津忠久の墓あり別に大江廣元の墓あり、荏柄の天神を看て二階堂に詣れば鎌倉宮あり、大塔宮護良親王の靈を祀る、明治三年創立、神殿崇嚴些の丹碧を施さず、人をして覺ず襟を正さしむ、社背の蜓下の深窟は則ち親王が足利直義に幽閉せられたるところ、窟は地を穿つと一丈有餘、其底壘八枚を布くべし、凄陰幽寂人をして覺えず涕を隕さしむ、*史に曰ふ建



大塔宮土牢

▲武二年七

月二十三日、親王短檠に對して經を繙くの時、逆臣淵邊義博刀を横たへて窟に入る、親王顧みて曰ふ爾我を殺さんとて來りしかと、讀殘の經を擲つて起ち相搏つ、義博刀を親王の喉に推す、首を縮めて嚙で刀を折る、義博副刀を拔いて終に親王を弑し馘して去る、途にして瞑目及を含むを見て恐悸し、首を林叢の中に捨てゝ去ると、其の地は祠傍數十歩の林間に在り、窟の前今は木柵を圍らし石磴を設く、石磴の邊、苔華爛斑、幾多賽客の墮涙痕を留む、是よりして東し朝夷奈の切通を踰ゆれば金澤道

金澤

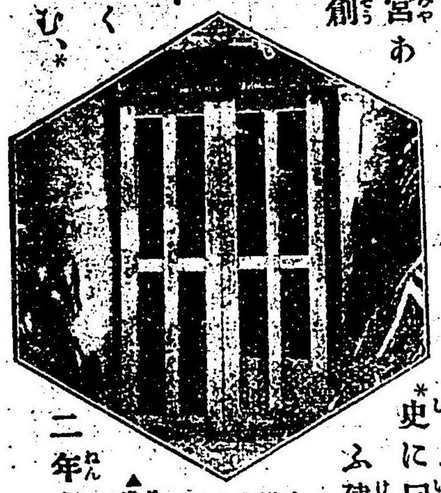
九驛亭○稱名寺○金澤文庫趾○能見堂○杉田梅林○鎌倉より朝夷奈の切通を踰て二里十町、横濱停車場よりすれば杉田村を歴て山を踰ゆ凡そ五里、旅亭に千代本、東屋あり、野島より横須賀に渡舟あり

蒼巖峭立仰ひて天を見れば一道の紺碧曲々として流るゝ如きを朝夷奈の切通となす、一水傍に流る、梶原が洗刀の水といふ、金澤に至る、山平遠にして水を遶り漁村を帶び、東の一方を缺く、海は宛ら平湖の看をなす、近く野島夏島を望み遠く房總の諸山を見る、瀬戸明神社の前老松

を存す、其の北の法華堂山、長

頼朝の墓

に元弘三年五月二十二日北條高時一族郎黨六百餘人の屠腹したるところ也、足利尊氏寺を此の地に移し寶戒寺と號し高時等の骨を瘞むと、青砥藤綱が墜錢を撈したる滑川を渡りて市廛蕭々、行き盡せば一望田畸これ頼朝の舘趾、而して今東御門西御門の稱長磴を登りて山腹の坪地に頼朝の墓あり、蝸篆亂塗し屍蟬落葉傍ら島津忠久の墓あり別に大江廣元の墓あり、荏柄の天神を看て二階堂に詣れば鎌倉宮あり、大塔宮護良親王の靈を祀る、明治三年創立、神殿崇嚴些の丹碧を施さず、人をして覺ず襟を正さしむ、社背の崖下の深窟は則ち親王が足利直義に幽閉せられたるところ、窟は地を穿つと一丈有餘、其底疊八枚を布くべし、凄陰幽寂人をして覺えず涕を隕さしむ、*



大塔宮土牢

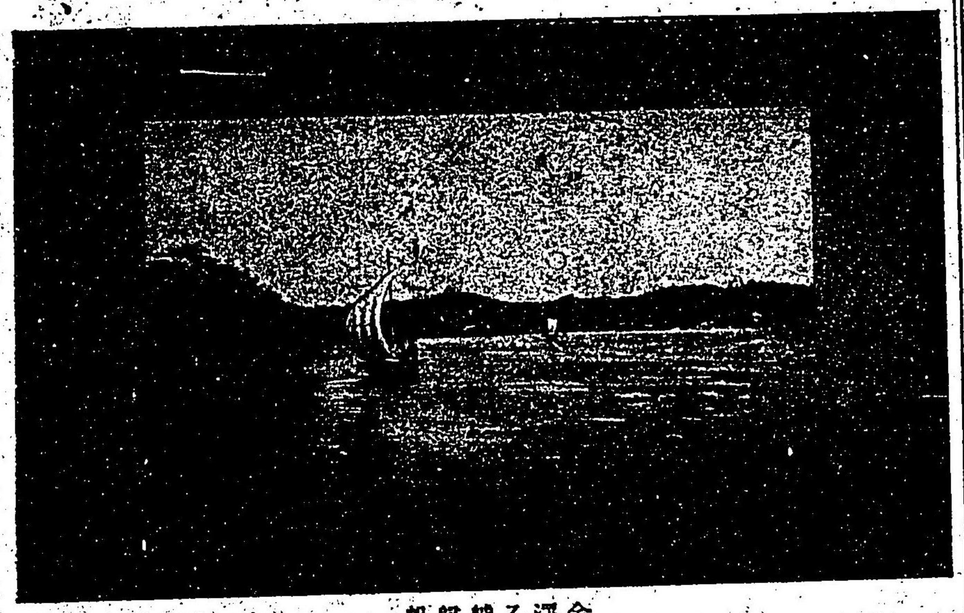
*史に曰ふ建武二年七月二十三日、親王短檠に對して經を繙くの時、逆臣淵邊義博刀を横たへて窟に入る、親王顧みて曰ふ爾我を殺さんとて來りしかと、讀殘の經を擲つて起ち相搏つ、義博刀を親王の喉に推す、首を縮めて嚙で刀を折る、義博副刀を拔いて終に親王を弑し馘して去る、途にして瞋目及を含むを見て恐悸し、首を林叢の中に捨てゝ去ると、其の地は祠傍數十歩の林間に在り、窟の前今は木柵を圍らし石磴を設く、石磴の邊、苔華爛斑、幾多賽客の墮涙痕を留む、是よりして東し朝夷奈の切通を踰ゆれば金澤道

金澤

九覽亭○稱名寺○金澤文庫趾○能見堂○杉田梅林○鎌倉より朝夷奈の切通を踰て二里十町、横濱停車場よりすれば杉田村を歴て山を踰ゆ凡そ五里、旗亭に千代本、東屋あり、野島より横須賀に渡舟あり

蒼巖峭立仰ひて天を見れば一道の紺碧曲々として流るゝ如きを朝夷奈の切通となす、一水傍に流る、梶原が洗刀の水といふ、金澤に至る、山平遠にして水を遶り漁村を帶び、東の一方を缺く、海は宛から平湖の看をなす、近く野島夏島を望み遠く房總の諸山を見る、瀬戸明神社の前老松

偃蹇蹇路を挾み直ちに海に入りて一板橋を通じ琵琶島辨天祠あり、江州竹生島辨財天を勸請したるものといふ、飛石山金龍院なる古刹に九覽亭あり、山舒び水平かに天然の布置畫圖も若かず、所謂八景とは洲崎の晴嵐、瀬戸の秋月、小泉の夜雨、乙艫の歸帆、稱名寺の晩鐘、平潟の落雁、



金澤乙艫歸帆

野島の夕照、内川の暮雪是なり、大字屋町の丘上に能見堂あり、堂前の古松を筆捨松といふ、傳へ曰ふ巨勢金岡八勝を描かんとして畫の眞に及ばざること遠きを嘆じ、筆を擲うつて去りたるところと、嵐光水色映帶して、中にノヘの歸帆あり、參差の樓觀あり、回汀曲灣錯綜して悉く眸

中に入る、稱名寺は筆捨山の邊に在り、開山を審海和尚といふ、佛殿安置するところの阿彌陀佛は唐の古佛にして長五尺有半許の希物となす、鐘聲黃昏に詩趣を傳ふるは此の寺なり、澤庵和尚の順禮鎌倉記に曰ふ『先づ寺(稱名寺)に詣りけるに本堂一宇あり諸堂あと計りなる五重塔の一重殘りぬ此金澤稱名寺は何の年か龜山院の御願所と號さゝ此所は在家を交えず今の在家は皆當時の界内なり殺生禁斷の浦なれば漁人など申すもの一人もなし時うつり國一度みだれ寺廢亡して再び古にかへらず庄園悉く落ちて武家押領の地となり房跡は漁人の住家となり院には跡なく海士の小屋數そひ當時界外下部どもは武家の手につき門外に在りながら却つて彼が顏色を窺ふ有樣思ひやるべし佛前の燈火も細く朝夕の煙も絶がちなりと老僧逵三人かたられけるに袖も濕しつ昔船遣はして一切經をも異國より取り渡し其外俗書外典ども世に類ひなき本ども金澤文庫と書附あるは當寺より紛失したるなりと語る經藏も毀たれぬれば本堂に一切經を籠めて置くとや寺の致境を見めぐらしぬれば山かゞみ古木そびえ立ち松杉の隈ごとに秋よりきなる紅葉のはのめきて青地なる錦を張りたらんは斯るべきかなと云へり堂前の池には蓮の古葉みだれ合ひ水冷かに

伽藍の跡どもは野菜の圃となり一の室といへるは萱が軒端かたむき周の房も冷え渡りて人のおとなひもせず思へば還つて寂寞無人聲の扉を閉ぢ坐禪觀法の床をしめたるに似たり』など當時の樣見るが如し、所謂金澤文庫の跡は、村の北端大字寺崎の田壠の中に在り、石を建て金澤文庫趾の五字を勒す、文庫は建治年間北條實時の建設するところ、和漢の書籍數萬卷を收め儒書には墨印、佛書には朱印を捺す、當時の古書今は散逸して往々書舗の店頭に蠹魚蝕殘のものを見る、金澤在、泥龜新田に泥龜の牡丹あり、凡そ數百株花太だ穠麗なり、行くこと三里山を踰ゆれば則はち杉田村、家毎に梅を植ゑ、海を屏風が浦といひ山を峩沙羅の峯といふ、妙法寺背の養老梅尤も大木、堂前の照水梅最も奇古、仲春に至れば一村皆な花、寒雲滿地香肌膚に泌す、横濱よりすれば屏風が浦の隧道を過りて路二里にして近し、

逗子、浦賀、三浦三崎

逗子○鎌倉の次驛、海水浴館餐神亭あり○横須賀、逗子の次驛、旅館三宮屋あり又た大津に大津館あり○浦賀、横須賀より一里三十町、海には東京霊岸島よりする漁船あり、旅館吉川あり○走水神社○三崎○城ヶ島○游崎○桃島○東京より毎日漁船あり浦賀よりすれば五里餘

鎌倉停車場の次驛、驛を距ること僅かに八九丁逗子海水浴場あり、地は青松を負ひて海に枕み浴館あり、海水澄透にして誠に好浴場なり、晴灣曲々遙かに鎌倉江島大磯小磯の海濱を望み更に中霄に岳蓮の立あり、風光明媚なり、夏日浴客を簇らす、滊車は更に幾個の隧道を度りて横須賀軍港の盡頭に達す、海深く波靜かにして碧膏を湛えたる如し、常に數隻の軍艦を泊す、造船所は規模宏大煤煙天を掩ひ椎聲地を動かす、風光明媚市廛繁華、憶ふに昔は唯だ僅かに三十餘戸の一小漁村なりしが、慶應の元年幕府此の地を相して造船所を作りしより、終に今日の殷盛を見る、字若松に龍本寺あり、山を負ひ海に面し晴灣の中に猿島を看る、祖師堂には日蓮の木像を安ず、此邊の海濱多く榮螺を產す、殼に稜角を生ぜず人拳の如し、是れより大津を經て浦賀に至る凡そ二里の間、前に猿島を瞰、遙かに房總の山を望み、富津の砲臺の粉壁斷霞の如きを見る、蕭々たる海村の風物亦た心目を喜ばすに足る、横須賀町の南一里餘にして衣笠村に衣笠城趾あり、治承の四年城主三浦大介義明が鬚霜眉雪起て重

甲を擐して玄孫の肩に凭り畠山重忠と戰かつて孤忠を蛭が島の源氏公子に表したるところ、木古く苔肥ゆ六百年の風雨、松杉昏きところ今尚は斷礎を見る、山を下りて東南に行くこと數町、大矢部村の滿昌寺にこの老雄の墳墓あり、墓前の一宇に束帶せる大介の木像を安す、賴朝の自から義明の靈を祀りしところ、佛殿の達摩大師像、唐製にして古色愛すべし、浦賀町は曾て幕府の監船所を設けしところ、誠に西洋文明輸入の關門、豆州の下田港と共に日本文明史中に特書すべきの地なり、町の走水村に鄕社走水神社あり、傳へ曰ふ、日本武尊東征の時少く大姉を此の地に駐む、將に上總に渡らんとして土人痛哀し地に伏して別を惜む、尊手づから戴きたまへる冠と穿きたまへる沓とを脫して之を賜ふ、神社は其の寶冠を祀りしものぞ、後炎上す、北に走水の砲臺あり、巨礮口を開いて海風を呑み、富津の砲臺と相望む山の高きを極めて眺望すれば房相二州の山兩ながら斗出して海を包み東南の一方を缺く、缺くるところ雲濤萬里なり、久里濱、長澤、岩名、南下浦、松輪の海村を歷て所謂三浦三崎に至る、凡そ五里、山欹だち波荒れ、村寒く、人稀に、潮來て天地靑く海風蓬々然、所謂走水の洋なるも

の、日本武尊上總に航したまふ時、會ま風雨晦冥、大濤御船を掀飜す、妃橘姫曰ふ是れ海龍王祟をなす、妾身を以て是に當らんと、泣て尊に別を告げ歌ふて曰ふ『さねさしさがむの小野に燃ゆる火のほなかに立ちてとひし君はも』と、終に波を踏んで薨せさせたまひしところは是か、三崎は前に城島(或は尉が島)あり、多くは漁家、輕舸遠く伊豆の洋に打漁し高潮を趁ふて歸る、初日雲濤を蹴つて升るの時、晩陣晒網を射て春くの際、魚鼓の聲擊缶の歌、風趣喜ぶべし、城が島は小嶼相依りて小樹扶疎なり、中に一村を含む、島に遊びが崎あり、曾て右大將尼將軍と共に此處に游び、畫舫を浮べ管弦を載せ、一世の豪華を盡せしところといふ、當時緋桃と白櫻とあり景甚だ美なりし將山莊のありしところ、又た城が島の中歌舞島といふあり、亦た將軍豪華の跡と、緋桃多し、桃寺といふ今は在らず、海南神社あり、三崎の中央にあり、大元の五年創立、藤原資盈及び其の夫人盈渡姫寃を蒙むり封地九州博多より舟にて薩摩に追る、途に颶風に會ひ洋中に漂泊すること數十日、終に三崎の海岸に至る、居を卜して村民を愛撫す、死後村民其の德を懷ふて之を祀ると、老銀杏樹あり千年以上のもの、登臨すれば山

海の勝甚だ佳なり

大山石尊

平塚停車場より降り、中原、豐田、柏屋の村を經て同村子安明神社前より山に入り登ること二十餘町にして大山町に至る、平塚より三里二十町、柏屋村までは人力車を通ずべし、

大山町に旅館翠涙閣、伊豆屋、駒屋、玉木等あり

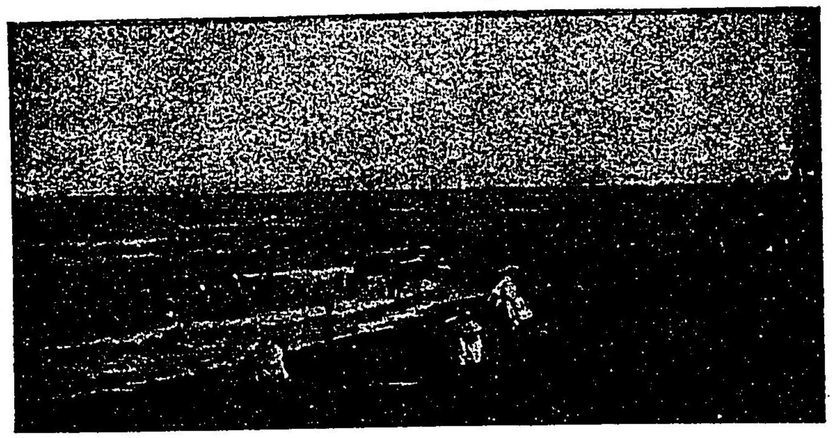
平塚町より北望すれば宛から覆碗のごとき一高山あり、所謂雨降山にして山巔に雨降神社あり、神體は一大岩なり、大山石尊と稱して信崇するもの多く毎歳六月廿七日より七月十七日に至るの間、賽者雲集し碧嵐翠微の郷は化して袂雲汗雨の地となる、石尊の在るところは大山町より殆ど二里、深溪路右に沿ふ、良辨の瀧あり、磴道登り盡して更に磴道、磴盡きて即ち祠廟なり、祠廟壯麗、日本武尊東征の時、此の山に登り、戟を植てゝ此の石上に憩ひ以て四方を眺望したまひしところと傳ふ、降りて親鸞上人、錫を此の山上に停め、石面に歸命盡十方無碍光如來の十字を鐫せりと、此の地曾て雨降山大山寺なる伽藍にして十有八房を有したりしが後縣社となる、雲古り樹老ひ盛暑山中輙ち秋かと疑ふ、不動堂の北に二重瀧あり、上下を合せて都て八九丈、更に霞が原に瀑布あり高さ二丈有奇、其邊泉聲木語、人間を去ること遠きを覺ゆ

大磯

海水浴場○高麗山○化粧坂、花水橋○鳴立澤○西行庵○東海道第十二次の停車場、海水浴旅館に濤龍館、松林館、招仙閣等十數軒あり

鎌倉覇府の盛時この地は正に煙華の場、化粧坂の邊、花水橋の畔、白馬銀鞍の鎌倉武士が金鞭を估却して酒に當て、柳を尋ね花を訪ひて風流を占領したるの地、頓て海道の一寒驛となりしが明治の九年時の軍醫總監松本順この地を相して海水浴を作りしより、毎年夏に至れば浴客雲集し侯伯縉紳の別莊を作るもの年一年より盛んに、復た一繁華の地となれり、松老ひ砂軟かに、危礁あり波を防ぎ、潮水清澄、快浴して身神を養ふべし、海は則はち相模洋、水雲の間に伊豆の大島を見る、町の後は則はち高麗山、高麗神社あり、神功の高麗の神和光を祀りしところと傳ふ、古樹葱々、茶店の竹欄に凭りて眺望すれば大磯の濱、小磯の濱、國府津、小田原伊豆の海かけて風光甚だ佳、月升り潮湧の時、磯邊の岩に割れて

碎けて裂けて飛ぶ波の様は亦以て平生讀書の眼を醫するに足れり、山の下に昔高麗寺あり今は存せず、當時池苑の石飛んで縉紳別墅の庭に入る、東して町の盡頭に至れば松樹路を挾み坦路此に至つて稍や低し、謂ふ是れ昔の化粧坂の蹟と、一水更に路を絶ちて短橋を架す、古の花水橋とは是れ、田疇の間に一小堂宇の廢荒せるものを見る、故延臺寺の在りしところ、堂に虎子石を安置す、其形楕圓にして高さ二尺許、大さこれに適ふ、面に鏃痕あり、傳へ曰ふ曾我十郎祐成妓虎と相昵る、仇氏工藤祐經人を放つて夜竊かに虎の家に入り、箭を飛してこれを射る、箭その石に中り祐成以て免る、因て十郎身代り石といふと、是れ妓の名の虎といふの故を以て、過まつて石を見て以て虎となし之を射て羽を沒したる唐土孝子の事を附會したるものか



大磯海水浴

落暉晩鐘の中、踽々として杖を曳いて澤畔に徘徊したる西行法師の『心なき身にも哀れは』と歌ひたる鳴立澤は、町の西端の左に在り、一澗海に通じ、老松十數章、一草堂を護る、堂には西行の木像あり、曰ふ文覺上人の鉈を以て木を彫り作るところと、杖を肩にし膝を抱いて嗒然嘯ぶくが如く古色掬すべし、傍らに虎子堂あり、虎が法體の像を置く、庵には西行の書くところの歌、手澤ある竹杖及び葦の床柱等あり、俳客堂を守る、人の乞ひに任せて什物を覩せしむ、茶を啜つて靜座すれば松聲潮聲堂に滿つ

箱根山

國府津○小田原○石橋山○早川○湯本○鐵道馬車あり國府津停車場より小田原を歷て湯本に達す溫泉宿に福住、小川等あり○早雲寺○石垣山○塔の澤○湯本より五町、溫泉場に玉泉樓、玉の湯、環翠樓、一の湯、藤尾、福住あり○堂が島○湯本より一里半、大和屋、近江屋、江戸屋あり○宮の下○湯本より一里半、富士山、奈良屋等あり家屋宏大○底倉○湯本より一里二十二町、梅屋、仙石屋、鳶屋あり○木賀○湯本より一里三十二町、龜屋、伊

勢屋等あり、湯本より此に至るまで人力車を通ず○小涌谷○湯本より二里、開化亭、三河屋あり○蘆の湯○湯本より三里二十町、紀之國屋、松坂屋等あり○賽河原○箱根驛○蘆の湖○箱根神社○箱根の古道

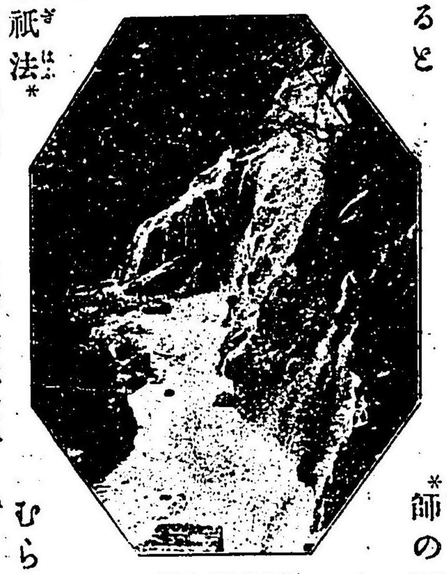
萬松東海道の國道に連なりて相摸灘の波瀾と相映帶するの邊、國府津の停車場あり、村に傍ふて荷葉殿を作せる一丘陵は、曾て親鸞上人が唐土より一切經を求め渡し、其の船八重*葉黄なるの時金丸山に溢る、尤も奇觀なり、停車場前より鐵道馬車あり、

小田原外耶賣

*の潮路を超えて此の丘下に來泊したりと傳へられ、丘の名を唐津といふ、海濱の景は大磯に讓らず、海水浴旅館あり、村後の山多く密柑を種ゆ、初冬霜白く

酒匂川を渡り小田原を經て箱根の湯本に達す、車を僦ひて酒匂の清瀨を渡れば、晩翠道を挾んで路迷はず、直ちに小田原町に至る、北條早雲が覇を關八州に稱せしところ、今尚城池を存す、濠邊の老松徒だ當年の餘韵を傳ふるあり、報德神社あり、經濟大家二宮尊德を祀る、別に舊城主大久保氏の靈を祀れる大久保神社あり、其の北に小峰の梅林あり、春風吹き渡りて寒雲山を倫却す、黄昏人なきの時、横斜の影浮動の香、誠に靜寂の境たり、町に八つ棟作り虎屋の舊家あり、外郎を賣る、梅干魚醬はこの地の名産、町の南熱海街道を行くこと三十町にして石橋村に石橋山あり、山水の勝あり、是れ治承四年源右府の大庭景親と戰ひたるところ、山の背古木鬱葱の中は則ち右府が偃木の間に隱れしところ乎、老猾なる梶原景時が弓を伸べて朽洞を搜り、右府佩刀櫛上の金鳩飛んで低鳴し景時依て景親を詰むきしと傳ふるところ、小田原の盡頭路初めて箱根山に入るところに早川あり、源を頂の葦の湖より發し、峰巒を間の縈迂曲折して海に入る、水駛くして石活く、承久の亂北條朝時、甲斐參議範義を捕へて鎌倉に檻致するの途、此處に至りて水に沈めしところ、元弘の亂參議平成輔また此處に斬らる、殘山剩水餘哀を留む

既にして馬車は湯本に達す、國府津より此地に至る道程三里、乃はち七湯の第一次、山を背ひ溪に枕んで浴館櫛比す、溫泉は湯坂山麓の岩罅より湧沸するところ、鐵管を架して毎家の浴槽に注ふ、透明にして底を見る、冷煖體に適し煦煖春の如し、湯本村の西南に金湯山早雲寺あり、北條早雲の創立するところ、大隆禪師開基たり、北條氏五世の墳墓は石塔石欄干、隋葉隕露の中に寂寞として立つ、又た宗祇法師の石塔あり、宗祇終焉の地といふ、寺は故輪奐の美を極めたれども今は荒廢す、僧房の大襖子の雲龍と風虎とは、古法眼元信の繪くところ、精神ありて活躍せり、惜むらくは曾て村毀たりし時、頑童其の龍の眼睛を抹殺し、秋蛇春蚓墨を塗るの痕多きを、豐公建るところ下馬札あり、當時小田原陣中に用ゐし木椀あり、其の他什物甚はだ多し入生田村の東風祭村の南石垣山あり、字天主臺といひ、又塔の尾といふ、是れ曾て豐公が彼の奥州の驍勇伊達政宗を麾き近づけ、刀を執り



湯本玉簾之瀧

て後に跟はしめ、高きに登つて篁竹の鞭を揚げ、遙かに小田原の城を指點して諸侯伯の軍營を觀せしめ、氣魄八州を壓せしところにあらずや」

湯本より溪に沿ふて登ること北六町、山漸く秀で溪漸く深し、塔の澤の溫泉あり、溪を隔てゝ挺然たるは塔が峰、阿彌陀寺あり、佛は僧惠心の作といふ、寺を距る三町石窟あり、本尊の阿彌陀しところ、樹荒れ烟低し、開山彈誓上人の練行せ朱舜水曾て此地に游び淹留數日、謂ふ驪山に勝ると、因て勝驪山といふ、浴館は皆な溪に沿ふ、水激して舞雪となり飛絮となる、夜深け閑夢靜かに返るの時是れ雨かと疑がふ、客情轉多し、是れより路は早川の大溪に沿ふて宮の下に到る、一里半、車馬を通ずべし、峭壁斗絶し古木石を攫んで立つ、下は急水淙々滙して蒼潭となり、懸けて飛泉となり、行々看て心眼を新たにし、聽いて聒喧ならず、雲洩として晴巒を縈ひ雨峰を繞り、時に低れて人と親んで車と路を爭ふ、途中太平臺の邊の茶亭前、姫の水あり、昔し北條氏の女毎日この水を汲み來らしめて粉粧の用に供せしによりこの名ありと、未だ宮下に至らざる二三町のところに『えのぶ塚』の碑あり、折れて急阪を下れば則はち堂が島、翠峭四に圍みて三方に早川の溪流を繞らす、地の溪底に在るを

以て日三竿なるもこの地は尚ほ曉かと疑ふ、頽嵐行雲座に入來す、溫泉三所より湧く、其の夢想湯と稱するは夢窓國師の初めて草萊を辟いて發見したるものといふ、國師堂及び坐禪石あり、石今溪に墮つ、前面は溪を隔てゝ明神が嶽の半腹萬綠の間に素練を布けるが如き瀑布を見る、白絲の瀧といふ、平松某の別墅には別に調べの瀧あり、高さ十五丈、平石に布き纚々然とし下る、琴筑を鳴すがごとし、又た宮の下より此の地に至るの間道を行けば、深樹の間に一瀑を見る、木隱の瀧といふ

宮下は實に山中の一繁華、地を拔くこと一千百二十尺、明星が岳、早雲山、鷹の巢が嶺、小地獄山、起伏して波濤の如く、早川の溪流、萬山の間に縈回して一道の紺碧杳として白雲の底を穿過し、山の盡るところ遙に相摸の海を望むべし、此の地の旅館夏は多く紅毛碧眼の人を見る、底倉は宮の下に隣り、鷹の巢の山を負ひ早川の溪に望む、鷹巢山の麓は則はち蛇骨川の懸崖、汀邊數々蛇骨に似たるの奇石を出す、溫泉石罅より湧く、傳へ曰ふ新田義隆、義を奥州に唱ふ、戰ひ破れて晝伏夜行此の地に至りて溫泉に浴し、金創を療す、偶たま足利氏に告るものあり、百槍を叢らして家を圍む、義隆赤裸大刀を提さげて出で鬪ひ、終に死すと、

溪壁り崖立ち石肥え水瘦せ、當年暗啞叱咤の聲を作す、萬年橋を渡れば太閤の石風呂なるものありといふ、石は形卵子のごとく横八九尺縱七尺ばかり、深さは坐して人の乳房を沒すべし、昔豐公小田原を征するの時、軍旅の無聊に禁えず、石を穿ちて浴槽を作らしめ、數々この地に來り浴せしものと

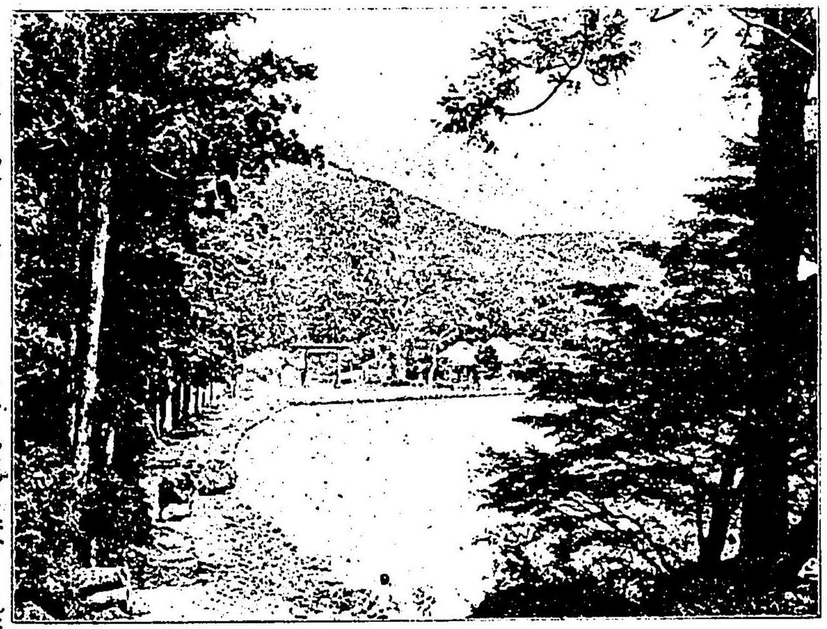
小涌谷、その西北の早雲、大地獄の溪間なる大涌谷、硫氣常に燃えて地皮は泥のごとく爛敗し、沸々として白烟を噴く、行人若し脚を失すれば輙はち熱泥の中に沒して膚肌糜爛す、雨ふるの時硫氣尤も多く、潤ふて低迷す、此際愼んで獨り往くことなかれ、大地獄山の頂き閻魔臺あり、馳望甚だ快」

石地藏

木賀溫泉は底倉を距ること西北八町許、橋あり仙禽橋といふ、溫泉溪に沸く、辟邪泉あり、飛泉刀の如く亂石を斫りて下る、地寂寞痾を養なふべし、雲來り雲徂けば幾陰晴し氣象萬千なり

蘆の湯は木賀を距ること南一里半、西に冠嶽あり南に雙子山あり、東北稍や開敞、海を拔くこと實に二千七百六十尺、山秀儁にして雲物奇變、

夜開けて中宵に天狗の嘯ぶくごとき聞く、蓋し老鶴の唳くなり、人間の盛暑この地早く秋聲あり、箱根驛に至る、一里許、途雙子山の麓を歴て路左に石塔三基あり、其の一は稍や小、石面に梵字を刻す、謂ふ曾我兄弟の墓、其の小なるは妓虎の墳と、義魄俠骨兩つながら千古、眉月衣稀として*青苔を照すの時轉た行客の腸を斷たしむ、別に多田滿仲の墳あり、庄司が池、綠沈底を見す、汀邊に古碑あり應長の碑といふ、紙に打て珍重す、字體溫籍なり、更に薺の池あり、此の邊は所謂る賽の河原、石佛多し、滿目荒凉、薺の池の邊に至れば深樹

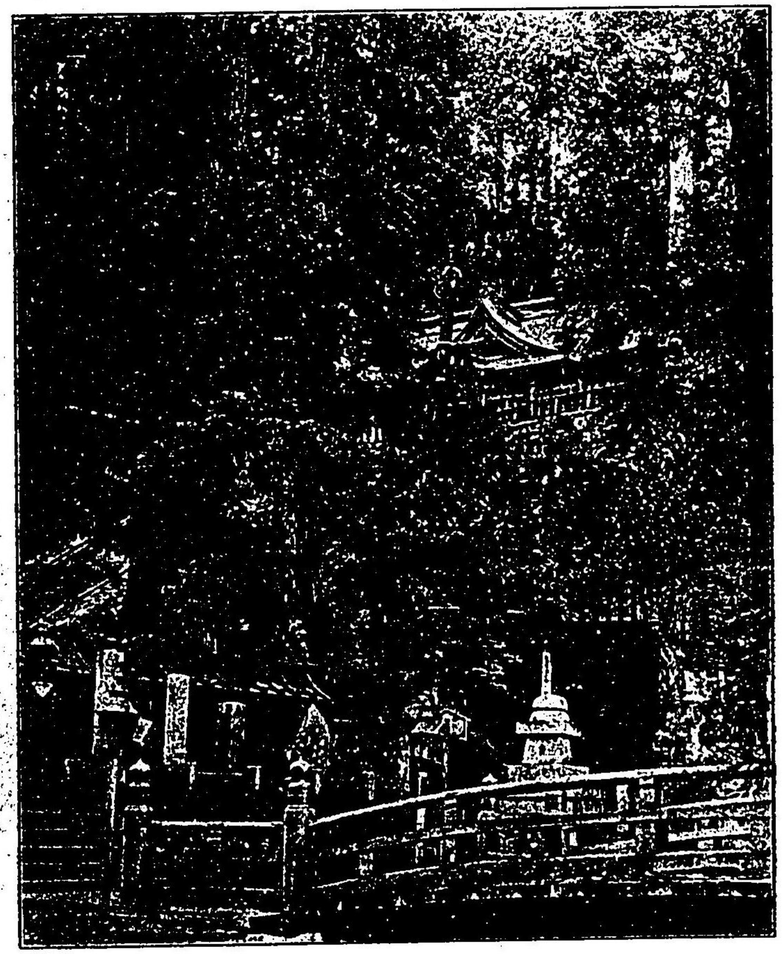


薺の湖

の中に一碧を見る、是れ葦の湖なり、湖中の塔が島は離宮の在るところ

富士山倒に水に涵す、倒さ富士といふ『玉くしげ箱根の山の峯ふかくみづうみ晴れてすめる月影』なるもの、この地湖に傍ふて簇々數十家、箱根の驛なり、昔は東海道の驛路、今は鐵路の要地に通せしより烟稀に人少に甚だ寂寥なり、唯だ盛夏の時のみ避暑の客多し、湖水は周圍四里三十町深さ四十餘仞といふ、舟あり儆ふて湖に浮ぶべし、浮んで湖心に至れば碧落を上下にし四顧蒼茫、悠然として神は徂來の雲に駕して往かんとす、湖に鱒を産す、湖を渡れば姥子及び湖尻の溫泉に到るべし、湖畔の箱根神社は、天平寶字元年の創立にして、瓊々杵尊、彦火々出見尊、木華開耶姫を合祀す、昔は金剛院東福寺に屬せしが維新の後廢寺となる、石華表、石燈籠、雨淋風打幾百年、苔石を蝕して石爛れんとし、古木寒巖尤も幽邃なり、將軍阪上田村麿、源頼義、源頼朝、北條時政等累代豪傑の士多く弓矢を獻ず、社殿は小丘に據り石磴斜に通じ、曾て華麗を極めたりしも、今は荒殘す、曾我兄弟の靈を祀れる祠あり、又た源頼朝富士に獵せし時用ゐたる陣釜二個あり、經と高さと共に四尺許、古鏽華の如し、箱根驛の西端は則はち所謂箱根の古關の在りしところ、今尚は斷礎を見る

箱根驛より古道を渡りて塔の澤湯本に行くも亦た風興あり、其の間凡そ三里、城不見坂、老が平に至れば右に文庫山左に湖を隔てゝ雙子山あり、里人春初に火を放ち、草を燒き木を燃す、爆々くこゑあり、極めて奇觀とす、酥雨一夜に過れば燒痕のところ蕨薇肥え來りて地を抽くこと寸寸、小店あり醯を賣る、銚子坂、猿滑、枳穀坂、樫木坂の四危險を下れば畑宿に至る、



道了社

大澤坂、割石坂、朝日の瀧あり、須雲川、藥師の瀧、葛原坂、日向の瀧、觀音坂より隧道を過りて終に塔の澤湯本に至る、凡て古道を度るの奇は、夜籃輿を儆ふに在り、舁夫甚だ健蹻、一人大松明宛ら椽の如きものを燒き路を照して先づ行く、巖樹隱々、木魈石魅の來りて人を窺ふかと疑がはる

伊豆の浦曲

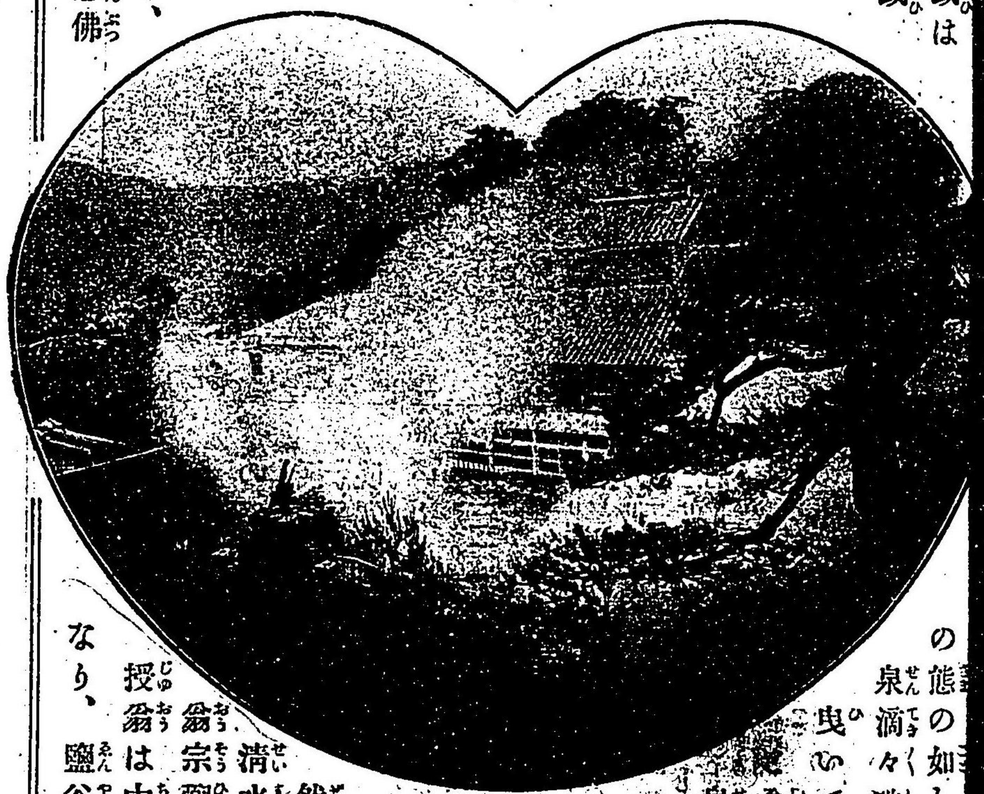
伊豆山溫泉○小田原より人車鐵道に乘じ二時間半にして達す相模屋、江島屋、中田屋ありの熱海○伊豆山より十八町、人車鐵道の終點○大湯○溫泉寺○熱海八景○初島○錦浦○錦が岩○觀音窟○旅館三十數軒あり重もなるもの富士屋、相模屋、眞誠社、忠助、對孝館、鈴木屋、阪口屋、露木、香露館、小林屋等○網代港○宇佐美○伊東○熱海より十四五里、溫泉旅館は松原猪戸に山田屋、旭屋、山本屋、芹澤、本猪戸には福住、升屋あり出來湯には前田屋、寶來屋、新井屋、鍋屋、和田、上の湯には大阪屋、櫻屋、東屋、扇屋、新湯あり、東京より下れば汽船隔日に往來す○潮吹洞○富戸○稻取港○白濱明神○柿崎辨天○二十七夜記○下田港○汽船の往來あり○大野浦○彌陀窟○石廊崎○修善寺○沼津停車場より三島驛に出で三島より五里にして達す此間馬車と人力車とあり溫泉旅館の重なるもの發氣

館、菊屋、對碧樓、衛生館等十餘軒あり、養氣館尤も大なり○戸田○保養館あり沼津より汽船あり○天窓山洞窟○自然窓○田子の浦

相州の小田原町より熱海に至るの間人車鐵道の布設するあり、輕車數人を載せ二人之を鐵軌の上に推挽す、走ると甚だ快捷、坐ながら山海の勝を看るべし、米神、江の浦、城の口、吉濱、門川、一水相豆の境をなす、既にして伊豆山溫泉あり、山を負ひ海に臨み黛眉幾個か海を隔てゝ遙かに房總の山を望み、青螺數點天際遠く伊豆の島を見る、浴館には溫泉の小瀑を作り下流は走りて海に入る、世に伊豆山の走り湯といふ、伊豆山神社は元走湯山東明寺と稱し、伽藍莊嚴、三千の支坊あり、關東の總鎮守と稱せしが、維新の後頽廢し今は唯だ上の宮を存するのみ、巨樹森然たり、古への所謂古々井の森、杜鵑を以て名あり、伊豆山より半里すれば則ち熱海

熱海の地、舊記を按ずるに仁賢天皇の四年蚊島穗允君獄に死す、天皇其の屍を熱海の海に投じたまふ、海波忽ち沸湧し鱗介皆な爛死す、後天平勝寶の元年箱根金剛王院の僧萬卷、靈泉の空しく海中に流逸するを惜み、其の泉脈を尋ねて湧沸のところに藥師佛を置くと、現今熱泉の湧もの都

で二十餘口或は石罅よりし或は沙層より、尤ども奇觀なるは『大湯』の熱泉湧沸の狀となす、大抵晝夜三次時を違へずして湧噴す其の將さに湧噴せんとするや石罅に細泡を吐く、宛ども蟹子念佛の態の如し、既にして溫泉滴々珠をなし白氣を曳いて落つ、落ると愈々多くして熱泉遂に噴湧し、響き奔雷の如く、雹狂し、白氣天に漲ぎる、之れを久うして寂然として止む、清水山溫泉寺は授翁宗弼和尚の開基、授翁は中納言藤原藤房なり、鹽谷高貞の龍馬を



熱海大湯湧沸

後醍醐天皇に獻ずるや、藤房直諫して納れられず、冠を掛けて去り開山國師に隨ふて其の衣鉢を受け、天授六年此の寺に入寂す、寺に授翁の傳衣紹金七條の袈裟一肩あり、授翁手栽の松は寺の門邊に在り、晩翠鬱々たり、古井あり三點水と樹流泉太だ清新、來宮は五十猿命を祀る、二株の老楠高く天に朝す、雨いふ、凡そ熱海の地一方は海に面し三面山を負ひ、夏は甚はだ熱からず冬も甚はだ寒からず、而して風景佳絶なり、成島柳北曾て熱海八景を撰ぶ、梅園の春曉、來宮の杜鵑、溫泉寺の古松、横磯の晩涼、初島の漁火、錦浦の秋月、魚見崎の歸帆、和田山の暮雪是なり、梅園の春、香雪吹いて寒からず、竹

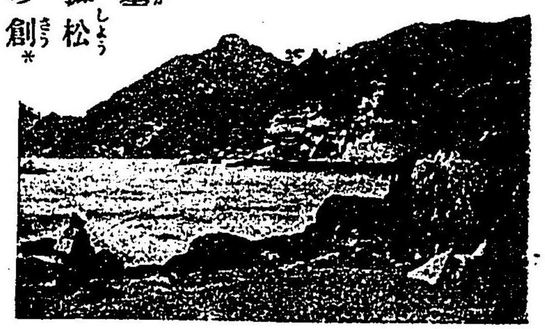
熱海溫泉宿

霽れ月細きの時杜鵑を聽くに佳し、横磯には海水浴あり、初島は海上三里を隔てたる一孤島、淵紫沙白、蟹舍蜃莊を點綴す、風景畫くが如し、『箱根路を我越え來れば伊豆の海や沖の小島に波の寄る見ゆ』と源實朝の歌ひしは此の島とぞ、島に水仙多し花の大いさ盃の如く其の葉また大、緋桃多し、寺あり二、此島古より人家四十二軒、民口繁殖すとも新に家を作らず、一島親敦、夜も戸を鎖さず、毎年七月十五日初島神社の祭禮を行ふ、華麗目を驚かすといふ、念佛山の遷遷として海に入るのところ、海岸一帶奇勝に富む、錦浦とい

熱海瀑布

ふ、魚見崎、峭巖の上茅屋あり、漁人此に宿直して魚の集まるを視て魚板を敲ひて同人を呼ぶ、魚見崎の名これに因る、この海岸都て亂礁、佛魔鬼魅禽獸の狀をなす、奇なること甚だし、碁盤石、烏帽子岩、兜岩、霰岩、五色石あり、雀が島、馬の背島を看て西に折れば巨巖呀然として海を呑まんとす、狗くゝりといふ、霰岩は氷裂紋をなし落々墮ちんとす、其の下は則ち石門、急潮盤桓して舟を導く、既にして錦が巖あり、削成數十尺、五彩の石を累ね錯綜紛糾す、朝暾波を出づる時石これに映じて紅紫白黄の色煥然として燿やき、宛から蜀錦を展るが如し、岩に肉なし潮に骨あり、潮怒りて岩怖れ、岩上の古松矍然として森立す、更に進めは懸巖雋拔、又洞あり、觀音窟といふ、昏陰其奥を知らず、時に白蝙蝠の飛ぶを見ると、碧泉沸々岩罅より流る、石觀音を安ず、風霜の打つところ蛟龍の洗ふところ、髣髴として眉目を見るのみ、この浦尤も船を浮べて月を看るに好し、熱海の邊雁皮紙を産す、薄きこと蟬翼の如く光澤ありて玲瓏なり

熱海より海に沿ふて行くこと二里、網代の港あり、風光亦た佳、根越の觀音堂あり、行基の刻するところと、曾て山下の岩窟の中に安置したるも風濤高きの時往々にして像を漂はすを以て、乃はち移して山腹に置く、石に踞して駛望すれば胸宇空濶海を呑まんとす、網代より二里にして宇佐美あり、宇佐美氏の古城址あり、青松白波の中を行くこと一里にして伊東、村は山を背ひ海に臨み簇々數十百家、一水村を貫きて海に入る、海は紫膏のごとし、亭子島あり峻險攀づべからず、古木多く海鳥巣ふ、遙かに初島あり欹帆仄帆相逐ふて行く、曾て伊東祐親の邑たり、祐親の墓は地藏が原の丘頭に在り、孤松これを護る、東林寺は祐親の創*



伊豆網代湊

鯢の潮水を噴出するが如し亦た一奇觀なり、問通しの島あり兩岩並び立ち上に青松あり下に廻瀾あり、小舟を其の間に通ずべし、近年佛光寺の邊の商估小原倉某庭園を作らんとし地を穿つて奇石を得、いよ〳〵穿ち基、河津三郎祐安の冥福を禱りしものと、寺傍に音無の森あり、頼朝の祐親の女八重姫と慰懃を語りしところ、潮吹の洞は新井の盡頭潮吹山の南の懸崖に在り、潮高くして潮を呑み潮低くしてまたこれを吐く、其の吐くや鯨の

到れば池あり山あり石あり木あり、終に地下より一個の庭園を發掘す、布置尤も妙、蓋し曾て伊東朝高の庭たりしものといふ、此の地溫泉處々に湧く浴舘あり夏時人多く來る、然れども熱海のごとき雜沓を見ず、伊東より三里半、富戸村に至る、奇礁海濱に亂立し濤を看るに好し、前に大島を望む、居民農漁相半す、海岸山蓮着寺は日蓮僧て此の地に謫せられ其の船の漂着せしところ、海中の巨岩魚俎岩は船守彌三郎の日蓮を波上に救ひしところといふ、八幡は富戸より三里、二里にして赤澤、七曲の嶮を行けば、飛泉あり高さ十丈ばかり白絹糸を懸けたるが如し、此間錦浦と一樣の風光、是れより三里にして稻取港あり、山斗出して碧灣を包む、風光明媚なり、海に天草を產す、一里にして見高村天女祠あり、奇巖百樣、古松千樣、四里にして乃ち白濱、來路の海濱多くは巖礁、此に至て一望白沙尤も眼を喜ばす、汀に白島あり、色粉壁の如し、巖上の松異態あり、白濱明神、白杉數株あり、珠垣の邊り古井三あり、其の一潮水地底より通じ常に小瀾を生ず、碗中の水を搖かすが如し、他の二井は深く地縫に入り潮水洄り入りて其の奥を知らず、一里にして柿崎、辨天嶼あり、沙路才かに通ず、山は都て松、汀は皆岩、重嶂疊水丘浦遙村

蒼々然として一望際なく、畫圖猶且つ若かず、柿崎辨天堂は則ち吉田松陰の夜る舟を盗み米艦に投じたるところ、其の『二十七夜記』を讀むに人をして涙を隕さしむ

二十七夜記

三月二十七日夕方柿崎の海を巡見するに辨天社に漁舟二隻泛べり是究竟なりと大に喜び蓮臺寺村の宿に歸り湯に入り夜食を認め下田のやどへ往くとて立ち出でや（下田にて名主夜行を禁ずる故一里程隔て蓮臺寺村へ宿す云々）ご田をとり下田へは船の樣下田へ宿す（是見廻り多く野宿す）と云ひ夜行して夷を去辨天社下に至る然るに潮頭退きて漁舟二隻共に沙上にあり故に辨天社中へ入り安宿す八つ時社を出で舟の所へ往く潮進み舟泛べり因て押出さんとて舟に上る然るに櫓くいなし因てかいを櫓鼻褌にて縛り船の雨旁へ縛り付け澁生と力を極めて押出す褌絶ゆ帶を解きかいを縛り又押ゆく岸を離るゝと一町許「ミシッヒー」船へ押付くれば船上より燈籠を卸す（燈籠はギヤマンにて作る形圓き手行燈の細し如し火元に就て漢字に我邦に異ならず但し色白く甚だ我邦に異なりて吾欲往米利堅君幸請之大將と認め手に持ち船に登るて甚だ上梯子あり）

し夷人二三人出で來る甚だ怪む氣色なく認めたる書付を與ふ一夷携て内に入る老夷出で燭を把て蟹文學をかき此方の書付と共に返す蟹文字は何事やらん讀めず異人類に手眞似にてポウバタン船へゆけと示すパタンの乘る所船なは大將吾等頻に手眞似にてバッテイラにて連往けと云ふ夷又手眞似にて往けと示す已むことを得ず又舟に還り力を極めて押行くと又一町許ポウバタン船外面に押付く此時澁生頻に云外面に付ては風強し内面に付す可しと然れ共かい自由ならず舟浪に陥て外面に付く船の梯子段の下に我船入り浪に因て浮沈す浮ぶ毎に梯子段へ激すると甚し夷人驚き怒り木棒を携へ梯子段を下り吾舟を衝き出す此時予帶を解き立かけを着居たり舟を衝き出されてはたまらぬと夷船の梯子段に飛渡り澁生に纜をとれと云澁生纜をとり未だ予に渡さぬ内夷人又棒にて我舟を衝退けんとす澁生たゞ兼纜を棄て飛渡る已にして夷人遂に我舟を退く時に刀及雜物は皆船にあり夷人我二人の手をとり梯子段を上る此時謂へらく船に入り夷人に語る上は我舟如何にも成る可しと我舟を顧みず夷船中に入る船中夜番の夷人五六名あり皆或は立或は歩を習はす尻居に坐するものなし夷人謂へらく吾等見物に來れりと故に羅針等

指し示す予は筆を借せと云ふ手眞似すると日本語をしるもの「ウリヤムス」出で來る因て筆をかり米利堅にゆかんと欲するの意を漢字にて認めかく「ウリヤムス」云く何國の字ぞ予云日本字なり「ウリヤムス」笑曰くもろこしの字でこそ又云名をかけ因て此日の朝上陸の夷人へ渡したる書中に記し置きたる偽名余は爪中萬二澁の道を開く可し其時來るべし且吾等此に非ず余因て向三ケ月とは今日よりか來月よりか「ウリヤムス」指を屈し

一向通せず頗る困る其内生は市木公太と記しぬ「ウリヤムス」携て内に入り朝の書翰を持出此事なる可と云ふ吾等うなづく「ウリヤムス」云此事大將と余と知るのみ他人には知らせず大將も余も心誠に喜ぶ但横濱にて米利堅大將と林大學頭と米利堅の天下と日本と事を約束す故に私に君の請を諾し難し少く待つ可し遠からずして米利堅人は日本に來り日本人は米利堅に來り兩國往來すると同國の如くなる豆大島伊

て對て曰く來月より吾等曰吾夜間貴船に來るとは國法の禁ずる所なり今還ては國人必吾を誅せん勢還るべからず「ウリヤムス」云夜に乘じて還らば國人知る者なからん早く還る可し此事を下田の大將黑川嘉兵知るか嘉兵許す米利堅大將連てゆく嘉兵許さず米利堅大將連て行かず余云然らば吾等船中に留るべし大將より黑川嘉兵にかけあひ呉るべし「ウリヤムス」云左樣には成り難し、ウリヤムス反覆初のいふ所を云て吾歸るを促す吾等計已に違ひ前に乘棄たる船が心にかゝり遂に歸るに決す「ウリヤムス」云君等兩刀を帶るか曰く然り官に居るか曰く書生なり書生とは何ぞや曰く書物を讀む人なり人に學問を敎ゆるか曰く敎ゆ兩親あるか曰兩人共父母なし此偶言少し江戸を發すると何日ぞ曰く三月五日曾て予を知るか曰く知る横濱にて知るか下田にて知るか曰く横濱にても下田にても知る「ウリヤムス」怪で曰く吾は知らず米利堅に行き何をする曰く學問をする時に鐘を打つ凡そ夷船中夜は時の鐘を打つ余曰く日本の何時ぞ「ウリヤムス」指を屈して此を計る然れども答詞詳ならず此鐘時なし七讀べし吾等云ふ君請ふきかずんば其書翰を返すべし「ウリヤムス」置てみる皆讀み得たり予廣東人羅森とかき此人に遇せよと云ふ「ウリヤムス」云ふ遇

て何用かある今臥して床にあり予曰く來年も來るか曰はく此れより年々來る也予曰く此船又來るか曰く他の船來るなり歸に臨み我等船を失ひたり舟中要具を置けば事發覺せん如何せん「ウリヤムス」云我が傳馬に乘行きて君が船を尋よ因て一拜して送るべし船頭に命じ置けり所々乘去る然るにバッティラの艦頭直に海岸に押し付け我等を上陸せしむ因て船を尋ることを得ず上陸せし所は岩石茂樹の中なり夜は暗し道は知れず大に困迫する間に夜は明けぬ海岸を見廻れども我舟見えず因て相謀て曰く事已に至此奈何すべからずうろつく間に縛せられては見苦しと直に柿崎村の名主へ往て事を告げ遂に下田番所に往き吏に對し囚奴となる「ウリヤムス」の日本語を使ふ誠に早口にて一語を誤らず而れども吾等の云所は解せざる如きと多し蓋し渠が狡黠ならん是を以て言はんと欲すると多く言得ず僕が大畧如此夷船へ乘移る際少しく狼狽したり故に我舟を失ひたり若船を失せず又要具を携へ船に登らば後に心がゝりなく船中へ强て留るとを得我文書等を夷人に示し又船中の容子を見んとを求め風聞等を尋ぬる間に夜は明つらん夜明けば白晝には歸り難しと云ふて一日留らん其中には必ず熟談も出來計自ら遂ぐべかりしな

り假令事は遂げずとも夜に至り陸に返り急に去らばかゝる禍敗には至らぬなり其の事の破れの本を尋ぬれば櫓ぐいなき計りにてかくなりゆきしなり因て思ふ左傳某の役の敗を記して嚮挂而止とやらあり大軍の敗もかゝる小事に因ると也左氏知兵故に其叙事甚妙なり又思ふ漢李廣

從衛青擊匈奴惑矢道青欲上書報天子失軍曲折この曲折と云ふ甚味あり

敗軍すれば一概に下手の樣に云ふとも其の曲折を聞かば必ず無據とあるべし後人紙上に論英雄悲夫吾等の事後世史氏必書云長門浪人吉田寅

次郎澁木松太郎謀夷舶出海外事覺見捕寅等好奇無術故至此澁木生甚だ刀を舟中に遺せしを大恥遺憾とす然れ共敗軍の時は何も心底に任せぬ者なり洞春公東照公の名將にてさへも大敗軍には一騎落したまひしとあり然れば吾等の事も強て恥とするに足らず但天命を得ず大事成就せぬは憾と云ふ可し亦何益の譏を免かれぬ所以なり

數奇なるこの風雲兒の曲肱枕睡靜かに夜闌を俟ちし天女祠の古欄干を撫し、更に磯山を踰えて外浦に出れば波間の亂礁皆な赭色、朱甲金兜の金剛力士の戟手して人を呵するの狀をなす、柿崎より半里程則はち下田港となす、

人烟稠密灣に巨舶小船の浮ぶもの數十隻、この地北の方河内蓮

臺寺に達し東武山を仰ぎ下稻生田川縈回して海に入る、海は東南の濱を洗ふて南鵜島の山積翠波に入り、西には乳峯あり額嵐市を壓す、港の口には石壘を築きて遠く外洋の波瀾を防ぐ、灣內波靜かに一大鏡を磨す、港口に兩個の秀巖ありて相對峙し、數町を隔てゝ柿崎須岬の坡陀一文字を劃す、六摺の青綠山水屏風を展匝するが如し、風光明媚誠に良港とす、町の海善寺、狩野探幽の畫出山釋迦の大幅を藏す

下田港より三里半程にして大野浦あり、浦邊の亂礁尤も奇瑰、大なるもの樓觀の狀をなし、少なるもの宛かも是れ文官武人、頭上の進賢冠、腰間の大羽箭、紫を施き青を垂れ、盾を揮し戟を抱いて趨りて宮廷に入るの狀をなす、碧水の中には神子本、石取の島あり、遙かに利島、新島、敷根島、神集の島の青螺を見る、浦に續ける赤松林は明石、舞子の濱に髣髴すといふ

一里にして手石村あり海に入る、所謂彌陀が窟の在るところ、彌陀が崎なるもの是なり、滿山皆な松、颼々として海風に鳴る、其の下の阿彌陀堂、阿彌陀佛を置く、松露紛々として佛龕を敲き、空翠人物を青殺す、堂の前巨岩削成して下紫瀾に接す、其の形缺甕を立たるがごとし、堂の

東崖路螺旋して岩下の海に赴むく、大石犖确急潮其の間に盤桓して色藍よりも青く、大渦小渦相逐ひ相合して人を呑まんとす、窟あり蓋穴といふ、潮水を吸ふ、其の左巨巖窟あり呀然として萬斛の海氣を吐呑す、所謂彌陀が窟なるもの是なり、潮落ち波靜かなるの時は、儘小舟を縱つて此の洞の中に入るべし、入ること數十歩にして昏黑漆のごとし、忽ち見る紫金の靈光燿耀として深幽のところより出で、直ちに人を射る、海氣の凝つて露となるものこれに映じ靡々として天華の散落するが如し、人眩迷して正視すべからず、怖れて舟を返すと、手石より小稻、下流、大瀨、長津呂、而して伊豆の南端石廊岬の絶勝あり、手石を距ること三里、大瀨村より佛浦を過ぎて簑掛岩を望む、形尤も奇なり、春筍の相依つて立つがごとし、長津呂の港峭壁左右に立ちて上に蟠松あり、また躑躅あり、花さくの時腥紅碧波と相映帶す、亦た奇觀となす、山を行くこと十町許、則はち石廊岬、山は岩を穿ちて磴を作る、行き盡せば地平夷、古松多し、復た行くこと數百歩、鬼斧一下して巨巖削成し其下深淵なり、木欄を設く、萬巖の間を魚貫して下り、仰ぎ見れば巖腹に石廊神社懸る、堂に入り廊を度り巖頭に立てば、巖下十數丈波はさながら銀兜素甲の輕騎の突貫し來るがごとく、直ちに巖脚に觸れて喑啞叱咤し、兵を曳いて更に退き、寂然として聲なく、深淵綠礬の色をなす、少時して復來り、馬跌踶し人踴躍し、波飛んで岩腹に至り、亂驚となり驚駭となる、看るもの氣魄を動し久しく立つべからず、皆を決すれば蒼茫たる海天六島の遙青を看、首を回らせば右の方長津呂港口より簑掛岩に至る長汀曲浦の勝を見、左りは遠州洋七十五灘を望む、誠に絶勝たり、伊豆東岸の勝此に盡く

已上は豆州の海岸に沿へる縣道の探勝記なり、三十一年の夏七月、著者友人木溪氏と共に船して此の海邊を一周したり、奇勝驚くべし、豆南記勝十六篇を作る、今これを抄錄す

豆南記勝

小田原の驛南より人車鐵道あり車毎に八人を載す、客相對して坐す、體を側だてゝ僅かに容るべし、膝は膝と相撞き肩と肩と相觸る、窮屈なる甚し、壯丁四人これを推挽す、凡そ熱海に至る路程七里半、車賃五十錢、走ること四時間にして達すべし、車路は常に山隈水滸を沿ふて走り、上

は懸崖下は亂礁、海潮岸を打て寂莫として回る、曲々として路は窮するが如く、風奔せる吾が車は人と共に直ちに海に向つて墮落し去らんとするを疑ひ、車中六客、冷汗握に滿ち色然として隻語なし、忽ちにして鐵路弓の如く彎り、更に前村に逕ず、此の如きもの數時、其の峻阪を下るや勢ひ奔雷を作し、若し一片の石の路を欄むるあらば車は忽に脫線して人と共に海中に顚落すべし、車丁いかに金剛力士の勇力ありともこれを制遏すべからざるなり、而も其の山に昇るの時に當りては、流汗淋漓、刻苦して推し進む、烈日燎くが如し、赤脚にして嶙峋を度る、車上の客をして見るに忍びざらしむ、終に伊豆山の石磴を望んで走り、午後二時熱海に入る、小田原より熱海に至るの路、昨月の大雨の爲めに多く橋梁を失ひ、橋は唯だ骨立す、人車鐵道の線路、一綫縷の如く其の上に通ず、度る時軋々として聲を作す、人をして寒心せしむ、

『杜鵑人知れずのみ啼き渡る』と歌はれし古の古々井の杜の平林缺る所、半ば危磴を含みて隱々として古廟を露はせるは是れ伊豆山神社、一峰其の背に在りて雄然として高く聳るもの是れ十國峠、更に日金山あり雲冷やかに嵐寒く青を舒べ紫を施きて三面に環り、中に參差たる畫樓粉壁を

簇らするもの是れ熱海町なり

此の日會ま町の鎭守社の後の祭として、揃ひの浴衣着たる若者ども皆な酒を被むりて蹣跚の步嘔啞の歌路に相望めり、余等其の喧囂を厭ふ、木溪氏と相議して直ちに舟を浮べて伊東に至らんとし、授翁手栽の古松ある溫泉寺、水樹淸新なる熱海公園、皆な往き見るに及ばず、車を走らせて汽船問屋に至りしが、生憎明日ならでは汽船來らず、乃ち新たに和船一隻を艤せしむ、風流緣あり、一葦を錦が浦に縱ちて坐して海山の勝を看ることを得、喜び望外に出づ

木溪氏先づ主婦に吩咐して其の携さへ來たりし小瓢に美酒を盛しめ、別に牛肉の罐詰と鮎一盤とを買ひ來らしむ、肴核全く備はれり、乃ち導かれて海濱に至れば、軟沙の上りに膠舟あり、舟子五人推挽してこれを海に入れ、余等を載せて乃ち發す、時に潮正さに高うして天地靑く、海風帽を吹飛さんとす、舟颺々として輕く揚り、直ちに波瀾を截ちて進むこと甚だ疾く、驚珠愕玉時に舟に入る、木溪氏手を拍ちて歡笑し、瓢を出して頻りに數盃を傾むく、余も亦た盃を啣んで坐して海山の勝を看る、念佛の山、高きこと數百尺、さながら六曲屛風を立つるが如し、上に靑

松の扶疎たるあり下は則はち絶壁、山勢海に入り、更に起つて巨巖となるものを離岩となし、平滑にして楸枰のごときものを碁盤岩となし、烏帽の岩、兜の岩、舟は取次にこの奇巖の邊を過ぎて南すれば忽ち一巖窟あり、古松青繖を張るが如し、狗竇といふ、更に進めば石門あり高さ數丈、波瀾は寂寞として聲を收さめ、碧膏の如く靜かに流れて其の中に入り、門を隔てゝ依稀として遙村の人家を見る、石門の紋理氷裂し磊磊として將に壞れんとするものゝ如し、霰石といふ、これを過ぎれば則ち錦が岩なり、絶壁四五十尺、大斧劈皴を作し呀然として巨洞を開く、洞中の石其の色紫潤間ま斷霞流雲の模樣を交え錯綜して奇文を成す、古松離々として其の上に立ち清陰の下百合花ありて正さに開く、誠に奇觀なり、更に進めば又大洞あり、一泉石間より出で濺々として海に入る、傍らに石佛を置く、

首を回らせば長汀曲浦、眞鶴が崎より以東迢々として直ちに鵠沼江の島の海に至り、初島近かく三里の海上に在りて呼べば應へんとす、更に大島を見る、大島より東南、水天萬里、直ちに南溟の雲に入る、

咿軋の櫓聲、高低の舟謠、一味の詩を載せたる余等の舟は、この畫の如き海山の間を度りて網代港の沖を過り、終に亭子島の下より折れて伊東の濱に入る頃はひ、瓢は自から空しく脊核も亦た殘す、舟を捨てゝ岸に上り、舟子をして旅館に導かしむ、行く〳〵田疇の間を過ぎ水樹清新の村に入り、終に猪戸といふに至りて、旅館桝屋に投ず、屋後の樓は正に新築せられ、青疊の香室に滿つ、簷高く欄長く、稲田を隔てゝ海光一碧と見る、望み甚だ佳なり

先づ溫泉に一浴して滿身の塵垢を洗ひ去り、照々として春の如き美慵を帶び新らしき浴衣の襟を披いて清風を迎へ、海山の望み尤も佳なるのところに卓を移して酒に對す、暮色蒼然として到り山紫に水明かに、時に千頃の稲田を吹き度るの風青く、簷端の鈴鐸鏘々として自づから鳴り、低迷の流螢と遠く又近き啼蛙と皆詩にあらざるなし

一切の煩累、これを三十餘里外に放擲し去つて心下に一悶事なし、酒は稍や醇を缺けども之を彼の酒精を混じたる都の酒に較ぶるに、優ること數等、魚は今宵新たに錦が浦より網し獲たるもの、魚軒の肉は飛舞せんとし椀中の羹は細脂珠を浮ぶ、夜淺けれど村は甚だ寂寞、會ま村端の一屋に毬燈の或は高く或は低きを見、琴々として鼓聲を聞く、小婢に問へ

ば曰ふ村芝居なりと、醺後更に飯し、乃ち涼を趁うて行いてこれを看る。夜闌にして歸る、一睡陶然として曉を覺えず、覺る時日既に三竿、木溪氏曰ふ、今曉、日出を看る、其の滄溟を出るや色爛銅の如く、凝視すれども眩せず、洵を去ること一竿の頃、波色忽ち腥紅をなす、甚だ壯觀なりしと、朝餐の後旅館を出で、四近の古蹟を訪ふ

先づ漁莊蜑舍の邊を逍遙し、終に思ひが淵、不鳴が瀬、音無川の清瀨の、彌陀八幡の祠畔に傍ふて海に入るところ松川の橋を度りて市廛の間を過り、更に商家小原氏の家を訪*昏く雨愁ひ狐啼狸躍の場となりしを、今より十四年前、小原氏地を此に買ひ、大に草萊を辟く、墮葉既に土に化すること久しく甚はだ陰濕なるを以て、更に深く土を穿ちしに、忽ちにして一路の石矼を得、怪しんで更にこれを穿てば石出で池露はれ、布置安排皆な法に適ひたる一庭園を

久須美神社

*ひ、刺を通じて所謂鎌倉時代の古庭を看る、小原氏の家は曾て伊東朝高の館せしところ、近く佛光寺に隣る、竹樹年に茂生し六百餘星霜の間、煙

現出するに至る、史籍に據り口碑に徵して、正に伊東朝高館中の庭たることを知ると、庭は山を負ひて一泓の池を穿つ、水の色縹碧に蓼萍の浮ぶこと青錢の如し、池を環りて皆な石、土華斑々として古香を吹く、小石橋を架す、石に傍ふの松、岸に立つの竹、皆な趣態あり、主人は余等が爲めに說て曰ふ、伊東祐親既に死し其の族多くは四散して之くところを知らず、朝高また落托して四方に流寓すること數年、後故鄉に歸る、偶ま疫を病み、將さに起たざらんとす、僧の日蓮時の執政の旨に忤らひ謫せられて篠海の浦に在りと聞き、其の族綾部正清をして往き請ふて呪を修め病を攘はしむ、病輙はち癒ゆ、朝高感激して歸依し、佛恩に酬ゆる爲めに佛光寺を建て雜髮して日預と稱し、終に壽を以て終ると、去つて佛光寺に詣る、琳宮寂寞、僧に問ふて朝高の墓を堂後の山隈に得、山盡て青疇、麥秀で、漸々たり、此の邊は彼の一時雄を豆相の間に稱せし豪族伊東祐親の館せしところ、山に據り海を望ぞみ、水村山廓指呼の間に在り、物見の松あり、山河幾たびも主を代ゆるも此

伊東入道物見の松

の松獨り依然たり、去つて更に祐親の墳を竹樹の甚はだ凄陰なる一荒丘に覓め得たり、墓は五輪塔、四方に梵字を刻す、風雨七百年、露多く苔青し、村の人今尚入道樣の墓といひてこれを尊崇す、人と沒せんとする長草の中に、僅かに一綫の路を傳ふて山を下り、久須彌の神社に詣る、祠畔に大楠樹を看る、周圍七八丈、木理犖确、老幹既に石に化するかと疑ふ、幹は分れて三枝となり其の下朽ちて空洞を作し、小石龕を置く、此の如きの大木は余等の未だ曾て見ざりしところ、祠に褰して後音無の森に詣らんとし、亦た村に入る、竹樹幽邃、一水傍ふて流れ、涓々として人と相隨ふ、行く〳〵播間に入りて路窮す、清川あり、沙明らかに石潤ひ、濺々として鳴つて竹篁の陰に入り、寂然として聲を收む、終に音無の森に至る、この森、曾て賴朝が伊東氏に客たりしの時、其女八重姫と慇懃を通じ、暮夜この林中に相會ひて與に語りしところと、英雄野合のところ、傳へて今に至るを聞かば、何人か一笑せざらんや、古樹鬱葱たり、中に音無明神あり、毎歲十一月十日の夜、暗夜に祭事を行ふ、其の神饌を頒つの時は、座に一燈をも點せず、暗中に模索し、臀を抓つて次第にこれを傳ふと、亦た笑ふべし

是に於て村中の古蹟は蹈遍し終る、日甚だ暑し、旅館に歸れば正に亭午、小婢促して曰ふ、汽船將に發せんとすと、急に午飯を喫し、走つて海濱に至れば船未だ來らず、日は天心に中して樹影は笠よりも少に、煩熱堪ゆべからず、此の邊の海、沙軟かにして絕えて石なし、波瀾取次に岸を打つて沙上に蒲伏し、奇文を描き留めて寂寞として回る、蓋し退潮なり、水の色明淨にして閑汎の身を次第に遠きに致す、木溪氏と余と得意に游泳し、瀾を排し波を趁ひ、行くこと數町、俄かに深水三四尋のところに到りしに驚き、急に快く身を回して岸を望んで泳げば、忽ちに冷潮あり、氷の如し、覺えず戰慄す、煩熱乃ち去る、既にして船至る、乃ち搭ず、船は終に港を出で亭子島を過ぎ、岸を距ること一里の沖を走れり、岸は皆な峭巖、石門あり、洞窟あり、老松其の間に點綴す、其の景これを昨日過ぎり來たりし景に比すれば更に壯大なり、篠浦の邊を過ぐ、巨巖、屏風の如し、其の上松林、林の缺るところ伽藍を見る、これ蓮著寺、日蓮の謫せられしのところと、淺間山あり、天に向ふて巨洞を開く、故の噴火孔か、山の姿は笠を覆せたるが如し、滿山皆草青うして烟らんとす、左りは水天萬里、七島と見る、稻取の港を距ること數里、忽ち機關を損

傷し、船少しも進まず、東南の風甚だ強し、波瀾澎湃し、舟漂流す、日既に黄昏、四に顧りみれども山を見ず、唯だ大庚の海を照して蒼茫たるのみ、驚極まつて船中一語なし

強からざりし東南の風も次第に烈しく、波さへ高く激すれば船は自づから浙瀝と快よからぬ響きを發して横さまに傾むきつゝ、船脚怪く、陸地の方へと推流されたり、頓て右に天城の山の黄昏の空際に露はれし樣は、巨魔の頭顱と見られたるが眼に見えぬ金剛索を船の舳に結び付けて岸へ〳〵と牽き行くが如く、斯くてあらば半晌の後には、峭崖亂礁に吾が船は觸れて寸裂せらるべしと、皆な相顧みて一語なし、余常に以爲らく船の覆沒せざる限りは、一度風濤の難に遭遇したしと、而もこの時に當りて、稍や風濤難の情味を解することを得たり、木溪氏は余と同じく航中食慾太だ旺盛、甲板の上に箕踞し瓢酒を執りて相酌み波瀾の奇を看る、船中の客多くは船暈を發し、唄々の聲四に起る、既にして機關の修補僅かに成り、習々として汽を漏洩しつゝ船は乃ち駛り初めぬ、日全く暮れ御子本島燈明臺の燈光を正南に見る、海風甚だ寒し、乃ち携ふるところの毛布を被むり肱を曲げて臥して天を看る、星斗闌干たり、之と久しう

して終に睡る、木溪氏に喚醒されて驚き起てば船は正に下田港に入れり、時は十時に近し、船を喚びて岸に上る、黑山黑水見るところなし、唯だ燈の搖くところ人家あるを知るのみ、舟は柔櫓の下に一道の鹹光の青く流るゝを曳いて、次第に岸に近づけば舟十數隻あり、腥氣人を襲ふ、舟より舟に行き躍つて岸に上れば、岸邊一帶の路に鰹數百千尾を排列し、歩を着くべからず、蓋し近海の漁舟の歸り來れるなり、蹈んで度り市廛の間を過り、人に旅舘のあるところを問ひて、宿す

潮氣に潤濕したる衣服を脱却し借り得たる浴衣を着け、先づ浴室に行かんとすれば、湯は既に空しといふ、乃ち婢をして町の湯屋へと導かしむ、中に入れば床の上泥沙狼藉して足を下すに處なし、主婦言ふ、今夕漁夫一隊海より歸り來り此の狼藉を致せり、貴客は請ふ女人浴室に行けと、余と木溪氏と相顧みて躑躅せり、竊かに女湯の中を窺ふに女三人あり正に浴す、一人年齡四十左右一人は二十六七、一人は二十許、以爲らく余等の入り來るを見ば恐らくは驚異すべし、且は婦人の德を侮蔑するものと、出で去るを俟つこと良や久し、渠等研拭千遍して容易に去らず、乃ち強て勉めて中に入り、鞠躬として一浴し、倉皇して出づ、女等、余

輩の入り來るを見るも少しも怪訝せず、四十左右の婦人余等と共に出で、一禪飄然、裸體にして衣を抱き、其の家に歸り去る、余木溪氏と見て大に驚く、此夜一睡陶然たり、曉に至りて木溪氏先づ起き、余を喚び促がして、朝餐の前に柿崎辨天祠に詣で來らんといふ、五時半旅館を出で、先づ海濱漁戸の間を逍遙す、騁望太だ佳なり

疇昔は微白の星の光りの下に他奇なしと見し黑山黑水の下田の港は、今一幅の青綠山水の畫を眼前に披展せり、海潮一碧巴字を作して灣入するのところ岸は都て峭岩にして其の色は紫潤、上に老松の盤舞するあり、左りは柿崎の山遙かに青嵐を舒べて海に入り、蟹舍蜒莊は參差として相連なり、二小嶼あり、一は灣の口に當りて欹ち一は宛かも埠頭と柿崎との間に横はる、日いまだ出でず海氣は灣の中を立て籠めて夢かとばかり霞みたるが、やがて日の彼方の山の缺處より射出づれば、山も海も醉へるが如し

埠頭に繫泊せる漁舟の多くは此の朝潮に舟出せんと、舟子ども忙がはしげに打働らきぬ、岸に近き舟の中に、草帽短葛の一老書生あり、此處へ行くかと問へば、利島へ赴むくなりと答ふ、尋常漫遊の客の活躍したる

風姿なくて、憂たげの顏色せるは、生業の道を海島の中に求めんとて行くなるべし、余は惻然としてこれを目送したり

橋を渡りて行くこと十數町、路は山を左にして海を右にし、沙明らかに波青く、ホウといふ短木の抹香臭き香りを放てる淡紫の花を咲けるが軟沙の上りに繚亂し、朱蟹簌々として載を揚げて横行し人と路を爭ふ、汀に傍ふて一島あり、全島皆岩、沙路これに通ず、岩を穿つて石磴を作る、磴盡きて小堂あり峭岩に倚つて立つ、これ柿崎の辨天祠なり、吉田松陰の將に米艦に投せんとするの夜、肱を曲げて一睡し、以つて夜闌け人定まるを俟ちしのところは此堂の欄邊、海濱松林の中に住吉神社あり、社頭より海を看る尤とも佳矚、社前の凌霄花、花稠密にして且つ大、奇品といふべし、玉泉寺に米艦乘組の人の墓あり、還つて下田奉行の館趾の今麥田となりし邊を看、市廛の間を過ぎりて旅館に歸り、直ちに朝餐を喫し、彌陀が窟、石廊權現に至るの水路を問ひ、且つ舟を倩はしむ、恰も好し今朝漁舟の手石の澳に歸るあり、下田より三里水程、乃ち之に便乘するに決す、旅館の主婦送りて埠頭に至る、舟は所謂鰹舟なるもの、舟子二人して櫓を操る、行く〳〵奇岩峭壁の下を過ぎり、終に港を出づ、

豆南の奇勝は將に此より始まらんとす

宛かも下田の港を出でんとするの處に、一峭岩あり周圍は數百歩、岩の色渥丹の如し、急潮の激するところとなりて腥血滴らんとす、上に落々たる青松あり、舟子に島の名を問へば曰ふ赤根の島と、島に連なりて更に三四の奇礁あり、潮高うして盤桓し舟は幾たびか刀戟を懸垂したる如き亂礁の中を過ぎり、撞かんとして撞かず觸れんとして觸れず、舟子櫓を操ること甚だ巧みに、間に一髪を剩して過ぎ行く

仰ぎ見れば懸崖數百尺、崖は皆な岩、岩の色は蒼黑にして斧劈、披麻、解索、磐頭の諸皴皆な備はり、潮の激するところ蝕まれしごとく竅孔狼藉し、波の及ばざるところ岩華亂れ咲きて岩も亦た爛れんとし、一掬の土さへなきところ、極めて趣致ある老松の根を露はし石を攫んで倒まに懸るあり、南東は積水雲に入りて天と色を同じうし、天と水との間に半環の一線を劃して、其處に數點の山影を見る、近きものは雲よりも青く遠きものは煙よりも淡し、是れ七島なり

朝日村の沖を過ぐ、蒼崖缺くるところ軟沙一帶、瀾白松青の勝あり、中に黄茅の家を點綴する誠に繪も若かず、これを過ぐれば洞門多し、呀然

として海を呑んとす、崖邊の岩形ち春筍の如きものあり、獲荷の如きものあり、人物、麟鳳、魑魅の樣を作すものあり、水の色此に至つて深碧、深碧の中數十、人あり、水に沒して海草蝦鮑を採る、諦視すれば則ち漁女なり、其の水を出るや氣を吐いて嘯ぶく、其の聲甚だ悲し、聽くこと之を久しうして自づから墮涙す、舟を進めて行けば、波間岩際其の聲を聞かざるなし、時に舟を距ること數尺のところの波を排して、蓬頭青面人を望んで嘯ぶく、一味凄酸の思を發せしむ

吹上の濱を過ぐ、蒼崖壞るゝと數百尺、萬斛の白砂を吐き一望雪の如し、青松離々として立ち下に漁村あり、是れより峭崖の下巨洞甚だ多し、若し此の百分一のもの一個だも、これを京に近うして交通の便あるところに置かしめば、詩客はこれが爲めに名を選び、文人はこれが爲めに文を作り、籍々として世間に聞ゆべし、漁夫に洞の名を問へば、曰ふ皆な無名の洞と、激濤洞中に入り、鳴ること奔雷の如し、終に手石の澳に入り碇を下す、彌陀が窟は則ち當頭の山腹に在り

左手に摩天の巨岩を仰ぎつゝ碧の嘗とばかり湛えられし手石の澳へと舟を進め、舟子錨を投げ入るれば靜かなる水の面に圓波の次第に擴りて倒

影皆な皺みぬ舟子手を擧げて呼べば、應るものあり、一老翁巖陰より緩やかなる波紋を曳きつゝ小舟に棹さして出で來る、乃ち舟より舟に移り直ちに彌陀が窟に至らしむ、翁は年六十ばかり、尋常一樣漁村の人に似ず、眉に白毫を交えて且つ長く容に品格あり、低く南無阿彌陀佛と唱へて舟を進め、潮を趁ふて巨洞の下に至る、三洞あり、中央は高さ一丈ばかり横ゑこれに稱ふ、左右の二洞稍や少なり、潮急にして盤桓し洞は窈してこれを呑む、鳴ることと奔雷の如し、老翁は徐かに舟を其の中央の巨洞に入れぬ、巖の色は紫潤、海氣は其の面に凝り、亂雹の如く落ち來りて人を撲つ、水の色は縹碧なり、舟の洞に入ること半町ばかり、漸やくして黄昏の時の如し、老翁の六字の名號を唱ふることを絶たず、其の聲洞に滿ち人をして幽遠凄陰の情を催はさしむ、忽ち洞の深奥昏黑のところに三個の光明を見る、木溪氏と余と覺えず呼んで曰ふ見えた見えたと、老翁舟を停めて復た進まず、六字の名號を唱ふること益々悲しく怪しむべし此の三個の光明は灼燿として正に三個の佛體を彷彿せり、最も左なるは二尺ばかり、次なるは一尺半、又次なるは一尺許、潮聲の堂答たるの中に在りて或は上し或は下す、余等往き近きてこれを極めんと

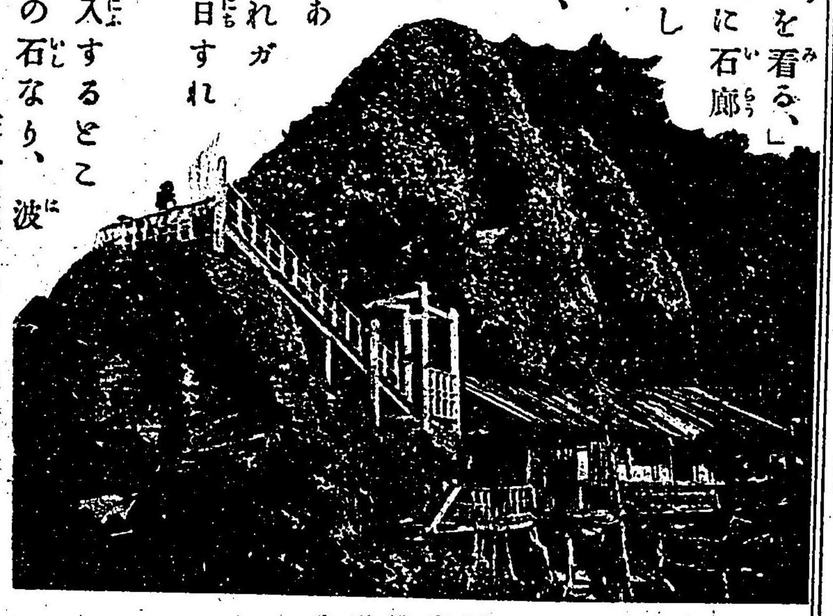
し翁をして更に舟を進ましむ、翁は怖れて從はず、叱してこれを鞭ませども遂に舟を進めず、木溪氏携ふるところの雙眼鏡を執つて仔細にこれを窺ふ、俄かに呼んで曰ふ三尊の光明に衣の襞の如きものあり、諦視すれば巖面の皺紋なりと、余も亦た鏡を執つてこれを窺ふに果して其の言の如し、光明は正に日光の反映したるものなり、木溪氏と相討尋して其の光明の來る所以を知る

前人の此の光明を說くものは皆な言ふ、洞の奥に岩罅あり一道の日光を通じこの光明をなすと、余等以爲らく然らずと、急潮日光を浮べて馳突して三個の洞中に入る、海氣に潤へる洞の天井の窄窿を作せるもの宛も凹鏡の如ければ、日光を受けて更に之を稍や平面鏡を作せる潮の上に反射し、平面鏡は復たこれを凹鏡に反射し、相受け相照して終に洞奥に映射するなり、其の三個の光明は實に三個の洞口の影たるに過ぎず

翁は怖れて舟を返しぬ、木溪氏曰ふ、爾善く石廊が崎まで行き得るかと、翁白き齦を露はし長き眉を搖かして曰ふ老夫年六十なるも尙ほ十里の波を破つて行き能ふ、三里の海の如き一唾手の勞のみと、腕を敲いて勇を示す、乃ち先づ舟を下留の海村に停めて麥酒と鷄卵とを買ひ來り、生鮑

を下物として行く〳〵此の海山の勝を看る、」舟は蒼巖の下、亂礁の中を度りて終に石廊の崎の峭崖の邊に至る、波漸く大にして舟を掀翻し箕踞する、尚ほ推倒せらる、老翁強て勇を鼓して舟を行る、潮を趁ふて行くこと甚だ快く、石門や巖窟や奇松や怪礁や、舟を迎へ且送り頃刻にして百變し應接に遑あらず、礁の下に美紅燃ゆるが如きものあり、余は看て珊瑚となす、翁曰ふこれガンガラ貝なるもの、採り得て後兩三日すれば紅全く褪めて白色となると

終に長津呂の澳の深く雙崖の中に彎入するところに到る、崖高きこと數百尺、一片の石なり、波瀾の激摩するところ風霜の鏤刻すると石膚全く剝落して骨を露出し、磊々として懸垂し、仰ぎ見て氣魄爲めに動く、幹の古怪にして葉の細緻



石廊櫨現堂

なる老松ありて赤根を現はし石罅より生ず、高さ三四尺にして而も數百年外の物なるべし、下は急潮盤旋し倒涵の山光と射映せる日光とを碎いて少しも停めず、波いよ〳〵青うして空碧を浮動す、左は則ち渺漫たる大海なり、風景の雄偉にして卓宕なる、余等の未だ曾て見ざるところなり

老翁力盡きて腕殆ど脱せんとせるものゝ如し、強て談笑して自若の風貌を裝ひ舟を石廊が崎の下に泊す、巨巖削成し、石を穿つて僅かに足を受べきの磴を作り鐵欄を設く、水の深さ幾仞なるを知らず、其の色藍の如し、舟を岩陰に置いて木溪氏と余と將さに岸を攀んとす、忽ちにして急瀾あり、舟は横まに傾きて左舷は岸に懸り、木溪氏兩脚天に朝して身は舷外に在り、殆ど溺る、余も亦た半身は舟に在りて半身は岸に在り、事急にして相救ふこと難し、老翁長眉倒まに竪ち目を瞠り口を開き、驚き極まつて茫然として自失し、唯だ手を拱して立てるのみ、急瀾再び來りて舟を掀げ舟は則ち浮ぶ、木溪氏と余と僅かに魚腹に葬らるゝを免かる、此の事咄嗟の間に在り、衣帽潮に潤ひて甚だ不快なるも別衣なければ其の儘にして直に岸に上り、石廊の崎の絶巔に行く

望楼の下を過り燈明臺の邊を行き、先づ石廊權現堂に詣る、巨巖に傍ふて堂を作り、廻廊の下は則ち海、空外に懸るが如し、堂の中、人の守るものなし、柱に姓名を題して更に廊を度り、巨巖に蝸附して崎の盡頭に至る、亦た小祠あり、船具を集めてこれを作る、祠の下は則ち峭壁數百尺、波瀾の激すること雷霆の如し、右は仲木、左は長津呂、手石、峭崖曲々として灣一灣をなし、前は一望千里、水は南溟の雲に入る、壯絶又快絶、還つて燈明臺を訪ひ刺を通じて臺の内部を看んことを乞ふ、看守某あり、喜び迎へて燈明臺に導びき遍ねく看せしむ、曰く余の此の地に居るや人間と隔離す、君等の遠來を得るは、空谷の跫音の如しと、余等水を乞ふ、曰ふ此の地井泉なし、雨水を湛えて飲料となすと、細君に吩咐して茶を煎て飲ましめ、語ること一時、謝して舟に還れば、老翁勇氣大に沮喪し、手を額にして謝して曰ふ、老夫力盡きたり、仲木の港に到りがたし、貴客の爲に今恰かも仲木に還るの漁舟を僦ひ置けり、老夫は此より辭せんと、手を揚げて舟を呼ぶ、二舟子あり、櫓を鼓して來る、乃ちこれに乘じ、更に石廊權現祠の下を過る、風濤稍や高し終に仲木の灣に入る、左りは巖礁、右は峭壁、佛魔鬼神の形ちをなせる

岩多く、峭壁の上には短草煙らんとする溫容の山あり、優美と壯高とを巧みに綜合したるこの江山、人をして看て心醉せしむ間〻石門あり洞窟あり、凡そ長津呂と仲木とは實に南豆第一の勝たるのみならず、東海の海濱中、之れに匹敵するの好風景はあらじと思はる、

山紫に水白き日暮の頃、余等二人を載せたる漁舟は仲木の濱の軟沙の上に着きたり、仲木は漁村、人家五六十、唯だ一個の旅館あるに入りて宿しぬ、斯寂しき海村にても麥酒ありて醉ふべく、ラム子ありて醉を解くべし、唯だ意外なるは海の幸に富る村ながら美き魚を味ふこと能はざることなり、魚夫どもの獲し魚は、直さま汽船に載せて沼津に送り、沼津より復た東京へ送るなりとぞ、此の夜暑きこと甚し、木溪氏は夜闌て起き出で牖を全たく開け放て、團扇を手より釋てず、曉まで眠らざりしと、曉四時といふに木溪氏に喚び起されて、疇昔の中に調へ置かせし掬飯の笹折提げて、今しも聞ゆる瀛笛の音に倉皇しく海濱に走り、小舟に乗りて沖なる汽船へと搭じたり、

日はまだ出でず、唯だ一面の靄青くて、宛ら青幔の中に山も海もいざたなく睡れる姿の麗なり、數聲の汽笛にやがて夢も破られたるか如く、

山色海光次第に明らかに次第に鮮かに、頓て朝日の彼方の青嶂より出でたれば、誠に泥金の山水畫一幅を披展するが如くなり、是れより船は伊豆の西岸に沿ふて走りぬ、雲見岬の邊よりは、富士を眞北に仰いで、西には江尻、久能あたり青一髮を曳き、駿河灣一帶の風光は亦た一入の眺望なり、午刻を過ぐる頃には沼津の千本松原より、原吉原の松原かけて翠一帶白沙と相映じ、裾野のあたり濃紫に絶頂のあたり黑くて、中に萬年雪の鹿子斑に眞白なる富士の高根の、殊に偉大に莊麗に、洵を壓して立ちたる樣は得もいはれず余人ともに唯だ恍惚と仰ぎ見るのみ、午後の三時といふに戸田の港に着き舟を傭ひて保養館といへるに投じぬ、御濱とて長松一路、斜に海に入りたるところ其の林の中に二棟三棟、離れ離れに立ちたる館の、松に倚り水に枕める景色よし、濱の松の下には、濱萬年青の花も咲き、檜扇の花も咲く、夕榮の色富士の高根を染めて、濃紫の山の半面は瑪瑙とばかり美しく耀やきたるが、餘紅の御濱の松の下に射したる、其の麗しさ得も言はれず、木溪氏と余とは浴み果てたる後、この繪よりも妙なる松林の下に遊び、濱萬年青の花、檜扇の花の邊に箕踞して黃昏頃まで畫中の人とはなりたり

斯くて水晶膾を下物にして微醺するまでに麥酒飲み、飯をも心地よく終たる後、松風蘿月の下に肱を曲げて、都を出でしより以來のをかしきことなど打ち語りて今更の如く興味を覺えぬ、此の家には先頃より帝國大學醫科の生徒たち游泳倶樂部といふを設けて朝夕二回の日課の外には、ハンモックを松の下蔭に懸けて午睡するもあり、釣り獲たる魚を割いて相招邀しつゝ燕りするもあり、私かに骨牌を鬪はすあり、軍歌、唐歌など打ち吟ずるあり、清宵の中に松籟を聽いて、清き夢に入らんと期した る余等は、其自由を妨げられたり、左れど彼の人達の斯くせるも自由なれば、余は唯だ余等が自由鄕を他處に開拓すべしと思ひて其の夜は遲く眠りに就き翌日は勉めて疾やく起き出でたり輕衣飄然として御濱の松の下、石の上を逍遙するに、日はまだ出でず、千本松原より原、吉原、興津、清水、三保、久能へかけて、靄薄碧りに鎖したるが、中に白帆の三つ四つ二つばかり、殊に鮮やかに見ゆるなど眼も覺むる景色なり、右手を仰げば、瑠璃色の大空に尤も鮮やかに尤も明らかに濃紫の色の富士の高根、繪くが如く現はれて、天上の玉露萬斛

に潤ひけん、裾野に曳ける白雲も頓て青くも色變へて、秀氣は人の肺肝に透徹したり、余は初めて此の御濱の浦の眺めは、蒲原、興津、江尻邊のよりも増して、正さに三保の松原の邊の騁望と伯仲すと覺り、而も富士の高根を望むには、此の濱こそ尤も麗しかるべけれと終に思ひぬ

朝露浴びて色殊に艶なる濱萬年青の花檜扇の花の中を、松の下傳ふて、恰かも母の懷ともいふべき波穏かに潮清き入江の濟へと來りぬ、草履を脱ぎて清淺を歩み行くに涼氣は骨に透るばかり、木溪氏は忽ち衣脱ぎて淘然と飛入り拔手して泳ぎはじめぬ、靜かなる入江は頓て環をつゞけ投げしがごとく木溪氏を中心にして圓波頻りに搖ぎつゝ相追ひ汀の軟沙と私語きたり、余も亦た技癢に堪へず、衣を松の枝に懸けて、到影搖ぎ皺む邊に身を浮べぬ、木溪氏と共に泳ぐこと三四十分時、人間に夏ある を忘れしむ、疇昔の夜他處に寛めんと語り合ひし自由鄕は實に此の松青く水碧なる邊に在り、是に於いて余は終に戸田の港の御濱を愛するの念に禁えず

室に返りて朝餐せし後、この愛すべき地に別れて余等二人は小舟に打ち乘り、恰も午前九時に港を過りし汽船豆洋丸に搭じて沼津へと走りぬ、

大瀬の明神の邊より江の浦、獅子が濱打ち眺めて、彼の松ある村に親しき友の香池園主が久しき前より痾を養ひ居るなど思ひつゞけて沼津に着けば、余等二人は實に伊豆半島を一匝し終りたり

靜浦　獅子濱　及修善寺

風濤煙浦幾夜の寂を分けて語りし木溪氏に、別れを告げて西と東に袂を分ち、日午にして傘より外に人の影なき町を行き、車を倩ひて靜が浦なる獅子が濱に香池園主を訪はんと急ぎぬ

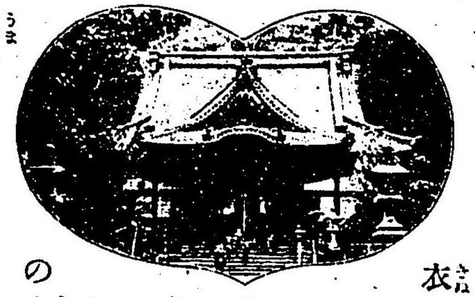
狩野川を渡り我入道の山、牛臥の濱の邊を過り竹落蕉院幾個の村を歷て、頓て處女の笑顔とばかり晴れやかに漣漪の笑める濱邊のほとりに出でぬ、彼方は豆州の山々、此方は駿河の浦々、灣の中湖靜かに汀遠く、松林なゞ繪がくが如く連なりて波の碧と照り合へば、霞よりも淡く烟よりは濃き海氣の四邊をたて籠めて、一抹したる淡紫の搖曳ける、新派といへる洋畫家のものせし繪を見るが如き、見て美くしき睡を催ほさしむるばかりの長閑さ、靜が浦とは誰が名づけゝん

東宮殿下の御館の前を過ぎ、保養館の門をも過ぎりて漁莊蜃舍の中を歷へ

て、頓て路窮まれば海岸、蒼蛭の高さ百尺ばかりなるを左にし、靜が浦を右にして、獅子が濱の上なる植松氏の家に香池園主を訪へば、美しき處女の優雅に粧ひたるが門に出で、草帽短葛の余をも怪しまで、香池園主は今しがた海に浴みせんとて行きぬ少焉俟ちたまへと言ひて、下婢に見て參れと吩咐けらる下婢を勞するまでもなし、余も濱邊に行きて求めんと、傘と毛布とを殘して立出で、先づ獅子が濱の軟沙の上を歩みぬ、波の頭碎けて雪と見ゆる邊に、村の童男童女ども打ち群れて泳ぎ居る中に、香池園主のあるかと見れど姿なし、麗かなる景色を看つゝ、沙路渡りて布島といふ大廈の上に登り、ふりさけ見れば瑠璃の空に明淨と輪廓鮮やかに立てる富士の根、鐵芙蓉と夏の富士を詩人の言へる金剛不壞の山の遠近に、下界の夏を他所にして『萬年雪』の青鉛の色の如くなるが寒げに殘りたる、秀靈の氣は靜が浦の海を壓して、人をして覺えず襟を正さしむ富士の高根を打仰ぎつゝ復故の路へと還り來れば昆侖奴と見ゆる村の人に異なりて、色白き優男の廂廣き帽子かぶり白き衣に兵兒帶しめたるが、手に雜誌を讀みつゝ波打際を來るに逢ひぬ、眉暈頰彎澹としておぼろな

から余は一瞥見て香池園主なるを知れり、知らぬ爲して近づきつゝ、三歩の間に帽を脱して立停まれば、香池園主は瞠目少焉、驚定まつて歡笑し、君の來ること意外なり、夢かとばかり意はるゝと、直ちに誘ふて植松氏の家に入り、軒高く椽廣きところに蒲團して相語り、背戸の山の松の風、門邊の濱の波の聲の中に、一陶の酒、數碗の飯、彼の孃氏の親切なる待遇にて、余は實に家居の時の如き平和なる午餐を終れり飯を終れば、香池園主は今より君を修善寺の溫泉に誘はんといふ、諾哉と應へて余は主翁と孃氏とに禮を述べ共に立出で、海濱に至れば舟あり て余等を俟ち、曩に看て繪の如しと言ひたりし景色の中に、更に一個の白帆を挂け添へたるは、正に余等を載せたる舟なりき山は青風を施き海は紫靄を籠めたり、蒼茫たる灣の中に吾が舟の帆を掛けて碧落を上下にして獨り行く、二人は舷端に臂を執りて、沙明らかに松昏き邊りの幾個の漁村を指點し、山の名あるもの寺の古佛あるもの島の詩あるもの古城の逸史あるものなど語らひしが、笠寺の村の沖を過ぐる頃、風死して舟は波の上に坐したり舟子はやがて帆を卸して櫓を操りぬ、香池園主は傍はらより其の櫓を奪

ふて諸肌脱ぎて盪ぎ初めたり、余は舟底に仰ぎ臥して、白衣蒼狗風幡なる種種の姿して無心に徂ける雲を眺めて、眼も遙に思ひも遠く、詩境の中に游びしが、やがて只ある海村に舟は着きたり、先づ海に浴して満身の塵垢を洗はんと、余は岸を距ること三四十間のところに錨投げさせ、衣を脱して藍色なせる波の中に飛び入りたり、深さは三尋ばかりもあるべし底は珠の如き小石のみにて潮いと清し、修善寺香池園主も續いて飛び入り互ひに底へと沈めんと挑みたはむれ、清涼の氣脾肝に徹りし頃はひ舟を汀に寄せて上る、此より修善寺まで二里數町、謝して舟子を還せり後山路を修善寺さして踰えたり、山を穿ちて二町ばかりの隧道あり、隧道の中、深泥膝を沒するばかり、昏暗の中、黒怪の巨物の來るに逢ふて驚き避くれば米を運べる馬なりき



隧道を出で幾個の里落を過ぐれば、則ち大仁町、町を過ぎりて狩野川の清流あり、渡頭に舟を呼んで渡り、更に馬車を倩ふて行くこと正に一里、山青く溪明かに簇々數十百家あり、是れ修善寺なり、馬車を捨てゝ虎溪

橋畔を過り、養氣館新井氏の家に搭ず養氣館は一に青州樓と稱し此の地第一の巨館也、三層樓あり、樓に傍ふて更に層樓を連ね、山に對し溪に枕み、客室佳潔、紫明坐を照す、主人余等を其最高樓に導く、近く嵐山を望み、桂川の清瀨を下に瞰、虎溪橋、渡月橋、皆な指顧の中に在り、甚だ佳嚮となす、新衣を着て直ちに浴室に赴く、樓下諸處に温泉湧く、凡そ五、菖蒲湯、桂の湯、雪の湯といふ、自然石の中靈泉湛ふ、淺處は涓々、深處は汪々、清雅喜ぶべし、中に就て菖蒲湯は、源三位頼政の夫人菖蒲の前の常に來り浴みしところと傳ふ、源某なるものあり、罪あり伊豆に流さる、妾を納れて女を生む、菖蒲と名く、後赦に逢ひ、女を拉れて京都に歸る、女長ずるに及びて端麗なり、宮禁に入る、後頼政に賜ふて妻となす、頼政宇治に戰死し、菖蒲伊豆に遁れ髪を削つて西妙と號し、其子仲綱の知行したる田方の河内に庵して頼政の冥福を修し、數々來りてこの溫泉に浴せりと、年七十八にして愛玉の里に身を終ゆと、浴室の邊更に桂川の水を引いて一泓の池となし、中に緋鯉を放つ、水樹清新萬斛の涼あり晩間主人藏するところ諸名流の書畫を看る、主人亦畫を善す、清風の中

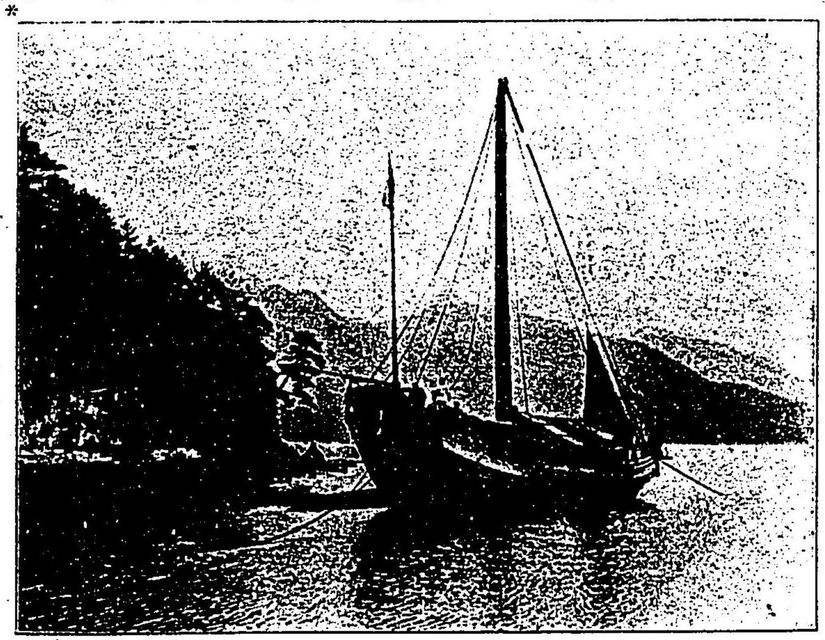
に坐して語りて午夜に至る、翌日早起、桂川の渓中に湧くところの獨鈷の湯に浴し、飯後主人と共に旭瀧を看る、此地を距ること正に一里、瀑の高さ三十丈、久旱にして水やゝ涸るも亦た壯絶、瀑下に小亭あり、女僧茶を煎る茶を啜り竹欄に凭つて瀑に對し、且つ女僧と語る、風流なること甚し、

洞が島の洞窟、田子の浦

三島神社拜殿

戸田の港より南して松崎の入江あり、船此に停まる、軟沙を踏んで行くこと一里にして近く、濱村あり、これ伊豆西濱の奇勝堂が島の洞窟の在るところ、舟を僦ふて普ねく見るべし、村の西搖橋あり、白槇の木にて造ると、藥師堂あり、堂下は則はち海、汀には扶疎の松林と邐迤の沙路とあり、飛龍岩、龜岩、小出地、比叡等の幾個の青螺相依り相離れて海を扼し、寸紫尺白波瀾層々として笑めるが如く、欹帆仄帆鳥を出で島に入り、風景尤も美、扁舟を僦ふて灣を出づれば駿河の海の烟波縹緲の中に

龜の子崎、雪見の嶽、高島を指點すべし、淺渚席の如き瀬濱の洲の北、二脚島、島、矢立島、米苞島あり、斷續して天窓の山の絶壁に至る、天窓*の山高さ數十仞峭巖の下に一大洞窟を開く、高かさ二十尺横さ三十餘尺、潮水委蛇して洞中に入り自から舟を導く、舟の往くところを縱ままにして入ること一町ばかり、遂然として深幽、陰風刀の如く懷中を吹くを覺ゆ、忽ち潤然として朗明なるに驚きて頭を昂ぐれば、洞間自然に窓を穿ち上に碧落を見る、日華散落して洞底に透徹し、魚隊の水中に浮游するもの甚だ人に親ましむ、行くこと四五艇身にして西に岐洞あり、凡そ三十歩



沼津海濱

にして洞漸く窄く、更に岐れて二洞となり、冥漠にして其の奥を極むべからず、蓋し遠く地縫に入れるものか、潮高きの時は萬斛を吸ふて溢れす、潮の入る時宛ながら巨礮を射るが如きの聲をなす、始め洞を入る十二三級身にして副洞あり、西に向て走り峭巖を穿つて海に通ず、洞に並び て更に洞あり、潮落るの時は水清淺、舟を捨て赤脚にして礁石を踏んで行くべし、中に白沙の濱あり、沙軟水柔にして蒼蝦紅蟹多し、又蝙蝠多し、低飛して吃々として啼く、凡そ此の洞に入る盛夏の時と雖も人をして纖衣を思はしむ

田子の港は田子の村大字田子の西に在り、灣内水靜かに碧空を湛へたるがごとし、參差の松林斷續の漁家、林を隔てゝ更に市廛の櫛比するあり、海に田子の島あり、鷺島あり、八朶の玉芙蓉を正北に仰ぎ看る、潮來つて天地青く、晴雪の眉宇を照す、歌聖が曾て『田子の浦ゆ打出て見れば眞白にぞ富士の高根に雪は降ける』と歌ひしところ、駿の田子の浦にあらずして實は此地なりと傳ふ、

鮎坪宮士見瀧

富士の高根

登山するに五道あり東京よりするものは瀛車にて御殿場に至り近年開通したる東表より登るを順路とす、御殿場には旅舘富士屋、吉島、松屋、大黒屋などいふあり此にて一泊し翌早登山し八合目の石室に宿り日出を看、絶頂を一周すれば午後には寛々と旅舘に歸らるべし、麓より絶頂まで凡そ五里、一合目毎に必ず石室あり餅鷄卵、草鞋、米等を賣り滿腹をも貯へて人を宿せしむ○「富士の高根」○金剛杖○草木○石室○急雨○夕陽の美○月の美○夜の石室○夜雲○日出の美○萬年雪○絶頂○銀明水○淺間神社○絶頂の觀○金明水○すばしり○登山の道○富士の山影○大宮○白絲の瀧○人穴○甲斐の河口湖○胎内窟

去來今來我が大和民族の胸宇に崇高秀麗の氣象を移植するものは此の神さびたる靈山なり、萬葉集中此の山を詠ずるの歌に曰ふ

なまよみの甲斐の國、うちよする駿河の國と、ごちゝの國のみ中ゆ、
出でたうる不盡の高根は、天雲もいゆきはゞかり、飛ぶ鳥もとびものぼらず、燎る火を雪もて消ち、降る雪を火もてけちつゝ、言ひも得ず
名づけも知らに、異しくもいます神かも、石花海と名づけてあるも、
その山のつゝめる海ぞ、不盡川と人の渡るも、その山の水のたぎちぞ、

日の本のやまとの國の、鎮めともいます神かも、寶ともなれる山かも、駿河なる不盡の高根は、見れど飽かぬかも

返歌

不盡の根にふりおく雪は六月の十五日に消ぬれば
その夜ふりけり
ふじのねを高みかしこみ天雲もいゆき憚かりたなびくものを
余曾て獨往して此の山の奥を極ぬ『不二の高根の記』あり、

不二の高根

帝紫微の宮に座し群仙を會して曰く東方精華の鍾まるところ坤輿の中樞なりそれ太山を作りて永く萬邦の鎮となすべしと一夜に大地を擘して此の不二の高根を成る史あるの前幾千萬載斯の山既に秀でゝ靈あり

榎新田より富士を望む

惟孝靈帝の御宇東海の氣漸く清明に始めて斯の山を中霄に見る頂きは分れて八峰を成し其の雪を戴くが爲めに宛も玉芙蓉の如し爾來二千年仰げばいや高く望めばいや尊し歌仙も其の高きさまを歌ひ盡す能はず畫聖も其の尊き形を畫き盡すこと能はず岳神は容易に秘奥の符を示さずして唯だ人の獨詣して冥契を得るに任せ三千年にして一人之を畫くものあるを俟つものあり五千年にして一人之を歌ふ

靜座して此の玄靜なる不二の高根を想ひ更に憶ふて余が岳南の曾棲村に至れば歸牛牟々落暉を帶びて靜かに度る小川の漣漪にも岳影皺み千本松原の露隕つると多きところ欹帆仄帆皆な晴澗に涵せるこの高根の上を行き縉紳の別墅の楣間を照らすの紫嵐の色は復た尋常一樣の家に入る冥目して其の美を心に描けば悠遠崇高一たび登りて其高を極めんとす今茲七月念三日遂に登る

函嶺より望めば晴巒雨峰を壓して高く雲漢を出る此の山あり上峰は五朶を成せり上青天と連り白雲と接す車の行くに從ひて四朶となり三朶となり既にして復た四朶と成る雪は日を得て雲母の色をなし陰は紫嵐を凝せり看て御殿場に至り客舍に就く日は亭午に近し主人曰く登岳の

客は皆平旦にして行く貴客は京人蹄涉の具に乏からむ豪力を僦へと豪力なる者は綿衣草鞋食糧を負ふて客の東道をなすもの余や應せず直に飯を命じ飯し終る馬を呼ぶ馬來る先草鞋數隻を買ひ來らしめて之を腰間に佩び騎して發す主人送りて戒めて曰く岳上日暮寒きこと甚だし石室の中に宿すといへども衾を重ねて僅かに困夢を得るのみ殊に平旦の如きは朔風獵々として加賀の白山を渡り甲州の諸山を掠め直に岳に至り寶永山の大洞研して之れを吸ひ横さまに缺所より吹く堆沙や殘雪や皆な活きて走る終に雲を呼び雨を喚ぶ既に雲に路を偸却せられ更に狼雨に逢はゞ或は恐る貴客行く所を失はむと余は鞍上に據り顧眄し以て勇を示し韁を按じて行く仰ぎ見れば岳影忽ち沒し風色甚だ惡し馬夫面を仰ぎて曰く雨將に來らんとす然れ共山は應さに美晴なるべしと雲の徂徠すること頻なり隱々として中に岳影のさながら斷霞の如く紐きを見る一路燕麥香し馬鈴の音を趁ふの胡蝶は夢の神をそのやさしき翅に載せて我懷に送る既にして大斷聲あり夢覺むれば急坂馬頭より起る馬夫曰く回馬坂なりと馬を舍つ賣茶の翁に茶を乞ふて喫し且つ憩ふもの少時是より矮樹と長草路は委蛇して其の間に通ず既而一宇あり金剛杖

を賣る之れを購ふ長五尺六稜角を爲す山に登ば草や樹や漸く短く少なり初は人を沒し次は帽に及び次は肩而して袖而して行縢步に從ふて取次に短少となる遙に望めば草色煙の如く迢々として雲に入る近けば却つて無し唯蓬の所々に散點して憐れに澤なき花を咲き亂せるのみ終に一合目に至る路は瀾沙の上を走れり顧みれば近山遙水甚だ鮮明に身は既に人間を拔こと幾百尺の上に在り鞋を沒する沙は淨ふして纖埃なし踏んで行けば珊々として聲あり已に鞋して二合目に至り更に三合目に至る石室あり茶を賣り菓子を賣り卵と草鞋とを賣る凡そ一合目毎に石室あり皆山骨露出の所を相し之れを背にして屋を作り圍むに累石を以てし僅かに一面を缺きて出入のところとなす遠く望めば隆然として凸し室に入れば巖華寂寞頗る幽陰なり已にして四合目に至れば足柄山の山愛鷹の山及び甲州の諸山は皆な余が鞋底に在り大地の蒼々然たるところ兩碧の甚だ明かなるを見る南なるは富士の沼にして東なるは甲州の山中湖なり小なること盆地の如し眉寸雲の帶び得たる雨を受くるも水は當に四坡に横溢すべきを疑ふなり皆を決すれば東海の濱一帶百里水は南溟の雲に入る其の間を截ちて蜆

よりも澹きもの一道浮動する是波瀾の岸を打つて回るの影なり時は暮に近し雲あり相逐ふて上峰より落ち皆な下界に堆屯して流れず風の吹き披くあれば青糸の穿ちたる銀針ありて之を縫ふ青糸に似たる者は是田子の浦に浮べる三保の松原か千松萬松何ぞ其れ縷の如きや銀針に似たるものは富士川か三十六瀬何ぞ一芥を浮ぶるに勝へざるや既にして山影皆な消ゆ雲既に人寰を鎖せり岳上の奇將に是より始まらんとす忽ち脚下に波濤の如き聲を作すあり一望平布の雲は爭ひ立ち羊角して岳に上る是風雨の人間に滿つるなり雲急に余を追ふ余は遙方の石室を望みて走る雨は逆上して濺ぐこと亂雹の如し草帽飛ばんとする者數々身は雲と相先後す漠々たる者既に行膝を沒せり超乘して走りて僅かに石室に至れば雲は既に咫尺余を石室の内に窮迫して更に上峰に向つて走る其走也沙石皆な活く石室の人哂つて迎へて曰く此れ過雨なり頃刻にして霽れなむと言未た終らざるに黑風白雨室に滿つ膝を抱いて俟つと久しうして石室の戸に微紅あり走り出でゝ余を追ふ所の雲既に上頭の寶永山に觸れて碎け更に夕暉に照さるゝに逢ひ雨は千顆萬顆の珠璣となり紛々として中天より落つ手を舉げて之を受くれば光彩

一瞬にして消え唯衣上新に亂暈の痕を添ふるあるのみ人寰のところを見れば正さに黃昏夕暉の前に雲あり奇峰をなして爭そひ起つ皆な日を嘲めるが爲めに紅くかゞやき周圍に金精色を放てり朱馬の駃騠して炎の如き鬣を振ふが如きあり金剛力士の金兜を戴き緋甲を攘し相觸れて立てるが如きあり處子が百寶の花鬘を被むり紅鳳の花韡を穿ち霞衣を披きて舞ふが如きものあり終に相盤旋して却走す既にして朱丸の如き夕暉急下すれば奇峯取次に沒し天地寥廓皎然たる大月虛明に浮ぶ指を屈すれば今宵は是れ舊曆六月十一日なり余や金剛杖を横たへて看ること之を久うして殆

乙女峠より富士を望む

んぞ我あるを忘る仰いて上峰を望めば雲あり俯して下界を瞰れば雲あり上下の雲間に唯だ鐵よりも黑き一大絶壁の斜に懸垂するあるのみ四顧すれば縹緲蒼茫身は天柱に攀ぢて紫微に入るの想ありこの高遠の景に對しては口言ふ能はず筆描くこと能はず神澄み氣晴れ愴然として涙隕つるを知らず

爛沙の上を度り一路微白なるを踏み磬折して登り終に行きて六合目の石室を得たり石室の主人爐を擁して坐す驚き起ちて迎へて曰く暮夜獨往貴客の如きは稀なりと余や寒むきこと甚だしきを以て直ちに主人の坐を奪ふて坐し且つ飯を命ず粗糲にして食ふに堪へず枯魚一枚豆腐汁一碗又箸を下すに堪へず蓋し此地海を拔くこと七千尺大氣の稀薄なるが爲め火氣甚だ微弱にして飯を炊ぐも之を熟すること能はず糯を加はへて僅かに粘力を添ふと饑ゆるを以て勉強して數碗を傾むけ終に衾を擁して臥す枕邊に鏘然たるものあり琴筑を鳴らすがごとし屋上の雪解けて寛を傳ふの聲なり之れを久しうして眠り得ず首を上ぐれば小燈焰なし石室のうち凄陰幽寂屋外唯だ風聲を聞く靜かに起ちて扉を推せば落月袂に在り寒星人に親しむ微茫の中物あり

簇々として來りて石室を去ること數尺のところを過ぎる白衣冠して白馬に騎するものあり素車に乘るものあり白幡を擎ぐる者あり虛を度りて聲なく寂として行く岳上の仙客此夜闌け人籟絶ゆるの時に出でゝ遊ぶならんや燈を執て之を照せば馬や幡や車や忽ち消え一氣あり氷より冷かに來りて燈を吹き滅し一團の白氣上峰に向て去る蓋し夜雲の行くなり

大靜大寂久く立つべからず終に扉を鎖して寢ぬ奇寒蒲團に上り眠り熟し難し曉ならざるに短夢回り來れば主人既に爐に踞して飯を炊ぐ余や既に萬古の雪に嗽ぎて心下に一塵事なし靜坐して以て日出を待つに踞して之を見る初め東方昏黑のうち紫氣あり搖曳し漸く變じて微紅となる余眸を凝らす俄かにして炬の如きものあり色は渥丹の如し或は升り或は降る會ま彷彿として上峰に天鷄の聲を聞く石室の主人曰く是れ淺間神社の鐸聲なりと余屏息して立ち石室の人跪つきて暮拜す須臾にして溟中渾沌のところ依稀として五彩の龍紋をなし次第に鮮明を加へて光芒陸離遂に混じて猩血の色をなす其中に物あり浮べり雙黃の卵

の如し忽ち合して熔銅の色をなす石室の人曰く是太陽なりと熔銅の色は再變して爛銀色をなし環らすに紫金を以てし終に白熾鐵の色をなす忽ち大鎚の一下に會ふ如く百千道の金箭直ちに天を射り溟中猩血の色逆だち起ちて之を追ひ太陽躍如として升る天地玆に清明なり

余や宇宙の大觀を看るを得て胸宇の海の如く濶きを覺ゆ石室の人と共に飯して流星の如く連に數碗を傾け結束して出づ石室の人曰く是より嶮なること甚だし徐々として脚を攢めて登れ然らずは呼吸切迫して上峰に迄る能はざらんとす謝して行く仰ぎ見れば峥嶸たる絶頂は四峰を成して高く天を衝き無心の雲も亦怖て近づき飛ばず下瞰すれば絶壁斜めに走り直ちに人寰に至り一物の遮ぎるあるなし爛沙漸く大に所々に山骨を露はす其のところ毎に雪あり鞋痕この碎銀の如きものゝ上に狼藉たり掬して之を食はんとし驚歩して淨所に就く「萬年雪」の冷やかなること脾肝に透徹す路は益々急なり磬折して登り僅かに八合目の石室に至る是より愈々嶮なり鞋底幾たびか摩敝して終に襪に及ぶ踞して鞋を易ふもの兩三次岳神の棲處は既に近し奇巖所々に立つ呵して立て る巨魔の如し既にして九合目に至り既にして絶頂に至る

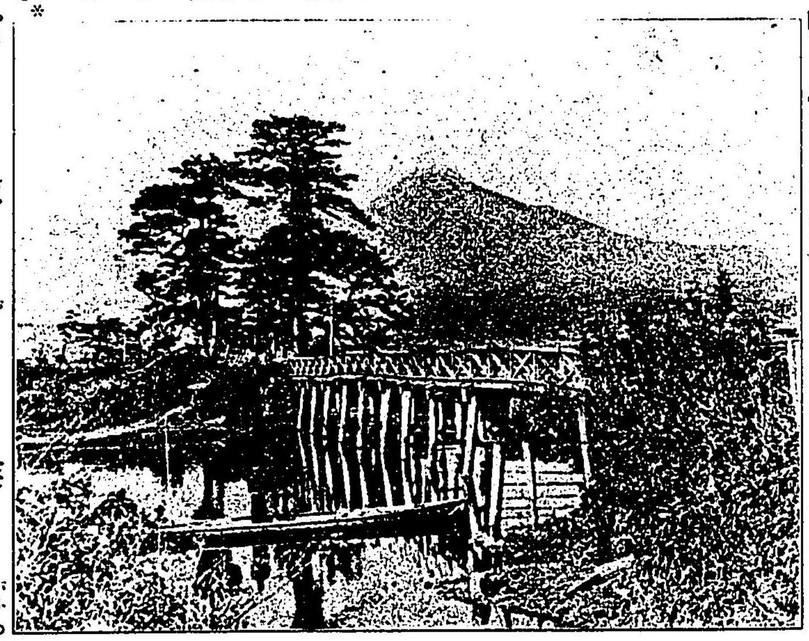
氣魄先づ驚ろく岳頂の一大洞深さ數千仞周圍五十餘町四壁は皆懸氷なり千戟萬戈の森然として倒垂するものゝ如し日華を受けて青く燿やき紅く煌き歩に隨ふて異彩紛々として洞に充つ洞を環りて劒が峯欲ち雷岩欲ち白山岳欲ち夕須志が岳欲ち成就が岳欲ち三島が岳欲ち駒が岳欲つ八峰の蔭皆雪あり其峰を瓣にし其洞を琵にし萬古の氷雪之を澹粧濃抹して斯の玲瓏たる玉芙蓉を成す

余や先づ銀精いまだ凝り成さゞる如き水を湛へたる銀明井に汲みて之を飲み終に駒が岳に攀づ木梯を懸くる者二「八子の梯子」と云ふ傳へ曰ふ聖德太子の驪に騎りて登りたるところと石廟あり青銅馬を安置す古鏽して蒼玉の如し登り盡せば累々として石室あり路盡きて華表甕の如き巨鐸を懸く之を過ぎれば淺間神社僅あり石室の内より趨て出で余に淨手の水を與ふ手を洗ふて更に其鐸を振へば聲四岳に振ふ平旦聽いて以て天鷄の啼くとなせし者是れなり神に賽す堂下は皆氷立つこと久しうして寒きに堪えず終に出で石室に憩ふ醴を賣る謂是れ金明水に和して釀せるものと彼僮鐵印と木槌とを持して來り余の金剛杖に向つて頂上の印を刻せり石室の人は皆綿衣を襲ねて爐を擁す余や單衣のみ而

かも垢塵と雨暈と相交りて奇文を成す寒きこと甚だし金剛杖を揮ひ勇を鼓して進む唯だ其獵々たる朔風の吹くを逆へて行くの時に當りては身は水楊の如く震戰するを覺へざるなり

祠背に出で洞を環りて行けば畫虎の碑あり岸偕の畫くところ背に都良香の富士山記を刻す傍に碑あるもの二三更に鰶池のほとりを過ぎ天の浮橋を渡り三島が岳に登り下に獅子が巖を看て終に劍が峰に攀づ高さ四百尺八朶の峯中尤も高きものその形は宛も巨劍を倒に植つるがごとし下りて絶崖千萬仞直ちに岳麓に向つて走れる大澤を看て賽の河原を渡り馬背の山に登り雷が巖を看る天陰りて風雨大いに發するの時は殷々くの聲此の岩邊より起ると言ふ更に小内院の洞を窺ひ金明水の湧く所に至り井華を小壺に汲みて之を腰間に佩び夕須志が岳の邊を度り祠に賽して石室に憩ひ成就が岳より小石累々として重なりて塔の如き東賽の河原を過ぎり大環の缺くるが如き「欠間」に至る頃ほひ天飈大に起りて石を走らす須臾にして風は息めり唯だ洞中に蓬々の聲を聞く頃刻にして獅子岩に宿せる雲は紛々として起ち流雲の如き紫霞を婆娑と振ふが如くなるを見ると共に刀よりも利き風一陣二陣「欠間」よ

り吹く時に人を吹き倒すに至ることありと余や蒲伏して過ぎ再び駒が岳の青銅馬の在るところに立ち風雲の奇を觀る風の過ぎる所皆蒼し雲の裂けて人寰のところを現すなり吹くこと益々急なるが爲に白衣蒼狗相逐ふて飛び去り遙かに諸州の山を露はす小なること蟻垤の如し試みに掌を開き岳を下る頻に飛躍すれば空より隕つるが如し七合目の石室に至れば一



河合橋より富嶽を望む

て之を掩へば豆の山や甲の水や憐むべし皆余が手中に在りて藏くる嗚呼高哉海を拔くこと一萬三千尺脚は三州に跨り頂は雲漢に入り晴雪十三州を照し八方の山皆な仰ひで朝す」

余は既に高きを極めて其奥を窺ふ是に於て終に

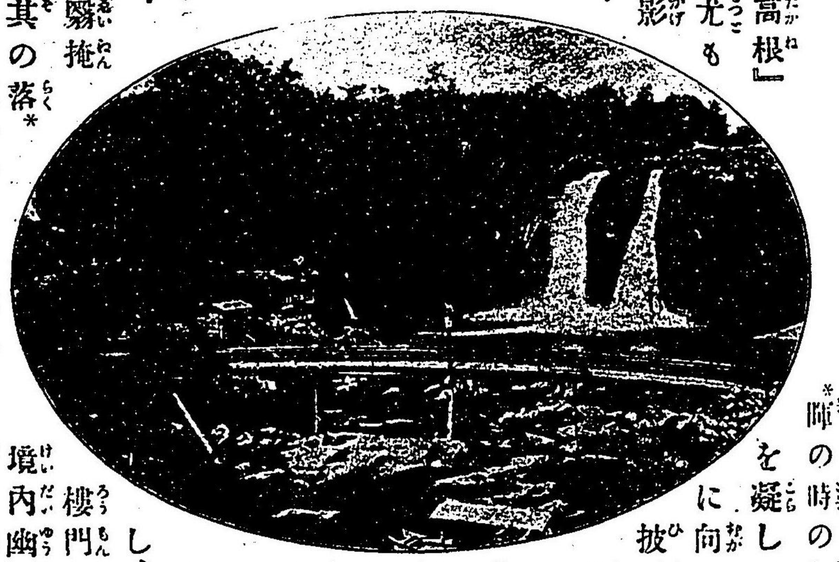
路の爛沙遠く岳麓に連る「走り」と稱するもの是なり草鞋を襲ね穿つと三杖を植て沙を踏みて下る沙は人と走り人は沙と走り滾々として急下す唯だ天風の耳輪に觸るの聲を聞くのみ三合のところに至り杖を停めて顧れば白雲深く鎖して上峰を見ず唯だ遙驚の隊を成して遲遲して行くが如きを見る蓋し「富士詣」の行者なり更に回馬坂に至り歸馬に騎し客舎に歸る客舎主人迎へて曰く岳神の福を君に錫ふや厚し兩日の美晴君が獨往を護ると

此夕うすむらさきの暮岳に對して月虛明に浮び銀河低く垂るゝの時昔の夜を憶ひ悠然として神往かんとす更に眼を閉ぢて冥想すれば岳の詩神の雲に乘りて彷彿として大荒を度るを見る

凡そ皆な山に登る五道あり、大宮よりするもの正道たり、南須山よりするものを須山口といひ東御殿場よりするものを須走口及び東表口とし甲斐の吉田よりするものを吉田口とす就中、大宮及び吉田の二道尤も險絶、其の東表口と稱するものは近來開通したるところにして五道中甚だ峻急ならず、東京よりするの人は御殿場に瀉車より下り旅館に一宿し輕裝を調へ平旦に及び剛力を僦ふて褞袍草鞋及び行糧等を負はしめ山に登るを

可とす

山の大觀は『富士の高根』稍や之を悉す、別に尤も壯觀なるは富士の御影と稱するもの是なり、好霽の時日の三竿なる頃ほひ、岳影分明に人寰の上に布き、山に亘り水を越えて方數十里、隱々として淡墨描き成すの富士を見る、朝暾の時は西、夕暉の時は東、數州の山水皆な其の翳掩するところとなる、其の落*洞兩つながら愛すべし、垂絲櫻あり花尤とも美、社背より一里にして村



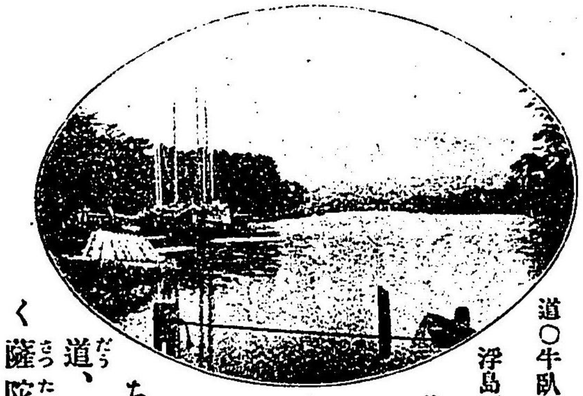
*暉の時の如きは岳影紺紫の色を凝して人間黃昏のところに向つて横披の絶大畫を披展す、尤も鮮明

鈴川停車場より西に鐵道馬車を驅れば佐野四里にして大宮、官幣大社淺間神社のあり、登山の正道なり、曾て社殿の瀧莊麗なりしも寶永山湧くの時大に荒殘し、今は僅かに拜殿、樓門の舊樣を存するあり、境内幽邃明鏡の池、玉泉の

山に達し、乃はち山に入る、巨木森然として日影を見ず、皆な千年外のもの、有名なる白絲の瀧は大宮より三里白絲村大字原村に在り、高さ八十七尺横は四百二十餘尺、滑石に平布して下る、新柳の雪を帶びて垂るゝが如し、大なるは雄、少なるは雌、其他無數の飛泉錯綜して無賴の楊花の舞を學ぶ、瀑畔に藤、躑躅多し、初夏の候紅紫水を照して水も亦た香し、加茂季鷹の『時知らぬ雪解の水か神代よりとばに落ち來る白絲の瀧』の歌を勒せる碑あり、曾て仁田四郎忠常の奥を極めて神怪を見たりと傳ふるの人穴も、亦た大宮を距ること一里上井出村大字人穴に在り、人の入り得べきもの僅かに二町、石を積んで更に行くことなからしむ、火を執て路を照す、洞中に古潭あり、其の甲州吉田口の北、河口の湖あり、周圍凡そ四里、東西北に峰巒を環らし南獨り開けし富士を見る、水色靛の如し、鵜島あり、乳が崎あり、胞が崎あり、産屋崎あり、風來りて岳影皺み、環翠亦た搖く、舟を縱ちて遙岸なる舟津の村に至る、此間の風光尤も明媚、『かげうつる富士の高根にうづもれて殘る水なき川口の湖』とは曾て清水の濱臣の歌ひしところ、胎内貧は吉田口の途福地村の鈴原に在り、入るもの膝頭に草鞋を穿ち蒲伏して入る、漸く行て漸く窄し、兩肩石罅に扼せられ體を舒べ一氣に通過し去る、洞に入りしより此に至るまで一小燭を燃して剩すこと寸許、迷信の人この殘燭を執つて産孽を照す

田子の浦曲の風光

我入道○沼津停車場より狩野川の湊橋を渡り十餘町にして達す海水浴舘三島舘あり○我入道○牛臥の北三丁松田舘あり○桃郷○沼津○千本松原○原の帶笑園○松陰寺○浮島が原○田子の浦○蒲原○興津○海水浴舘に海水樓、一碧樓、身延樓、佐野屋等あり○清見寺○清水港○三保松原○龍華寺○久能山○東照廟○靜岡○淺間神社○賤機山○義元の廟○臨濟寺○各處の路程は田子の本文に在り



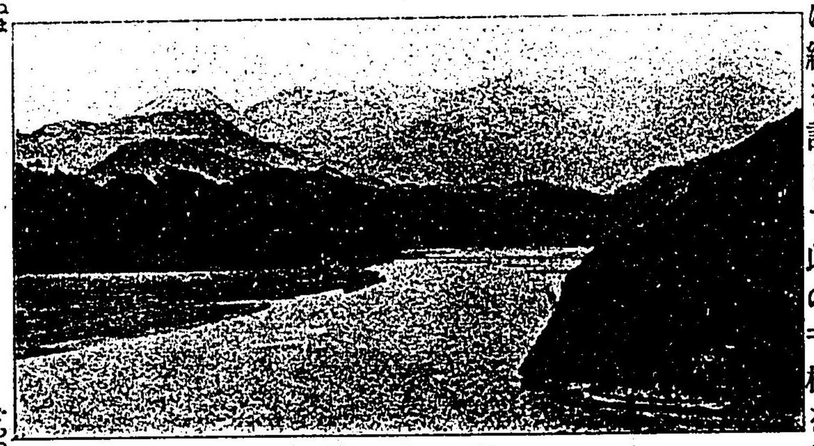
田子の浦の風光なり、松路十數里幾個の名區を連絡す、青絹の絲を以つて明珠を穿ち聯ねたるが如し、海濱の名區を擧ぐれば曰く我入道、曰く沼津の千本松原、曰く鈴川、曰く富士川、曰く薩陀の山、吹上が濱、曰く興津の清見寺、曰く龍華寺、

曰く三保の松原、曰く久能山

我入道海水浴は沼津停車場の東狩野川を渡りて行こと一里のところに在り、青松扶疎趣態多し、これに隣りて牛伏、往々縉紳の別墅を見る、東宮殿下の銷夏殿亦た在り、其の東は桃郷、闌春の時絳雲村を埋む、沼津は故の三枚橋城又た觀潮城、今川氏の築くところ、後武田氏に歸し、徳川氏の時松平康親、中村一氏、大久保忠信、水野忠友、交〻封をこゝに受く、幕府の末造維新の初め兵學校を興す、當時の俊髦今多くは峨冠大帶の雄將軍となる、矢塵脹盛なり、所謂千本松原なるものは沼津町の海岸より原町に至るの間に在り、昔し乘運寺の增譽上人海風の害を防がんとして一株毎

牛臥海水浴

に經を誦して此の千松を栽ゆと、享保の頃時の領主この松を算へしめしに無慮九千餘章ありしと、濱の觀音寺に百二十端の曼陀羅あり、大小の觀世音を描く、毎年暮春の候これを長松に懸て賽客に看せしむ、海濱は沙明らかに波媚び、前は伊豆の山呼べば應へんとし、右に田子、久能の遙青を看る、少女の稚兒を負ふて催睡歌をうたふを聽くに『坊やは好い兒だ寢ねしな、此の兒の可愛さ限りない、天に昇れば星の數、山には木の數草の數、沼津へ下れば千本松、千本松原小松原、松葉の數よりまだ可愛い』と原町の素封家植松氏の帶笑園は海道第一の名園、人に看せしむるに吝ならず、近く松蔭寺あり、白隱禪師曾棲の蘭若なるを以て其の名高し、これより鈴川に至る三里の所國道に沿ふて浮島が沼なるものあり、五六月の交水高くして稻禾肥え彌望蒼茫として直ちに

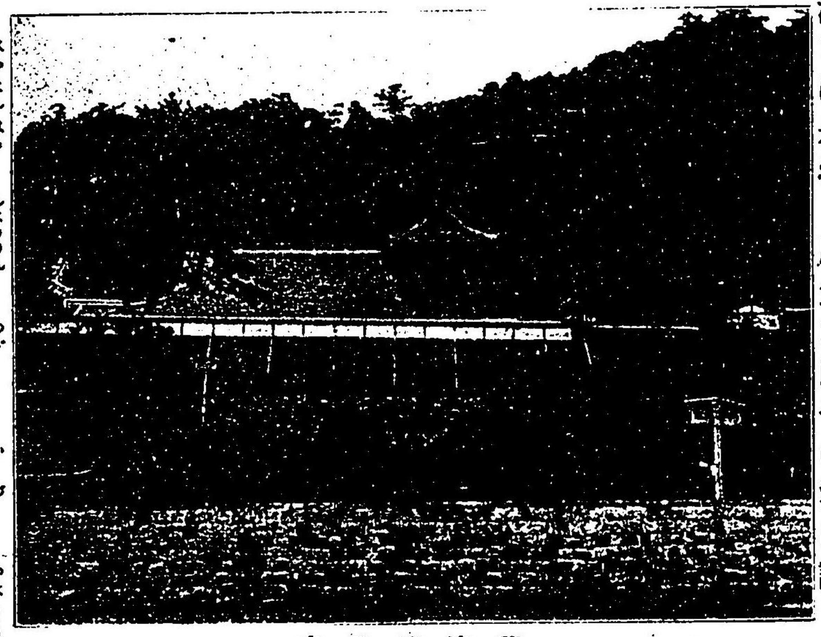


富士川

富士の青嵐に連なる、鈴川の南、砂山あり、其の景千本松原に譲らず、古墳あり六代公子の斬られしところと、山の東妙法寺の毘沙門天は聖徳太子の作りしところと、肩上更に太子の像を置く、堂の前兜石なるものあり、形似を以て名づく、これを過ぎて富士川の海に注ぐのところに至る、一帯の海濱は則はち田子の浦、沙軟かに松静かに、挺然摩天の岳蓮を仰ぎ見、西に三保の松原を臨み、南は雲濤萬里なり、風光壯にして且大、人の襟度をして濶如たらしむ

興津海濱

富士川の急湍を渡れば岩淵の里、白沙一帯山を抱き水に沿ひて蒲原興津に連なる、吹上の濱とは是れ、風光は田子の浦に譲らず、山は則はち薩陀の峠、蒲原町の南に浄瑠璃の墳あり、古松これを護る、傳へ曰ふ矢矧の長者の女浄瑠璃、源九郎義經を追ふて東下し、此に至りて病んで死す、里人哀れみてこれを瘞め墳に六松を植らし栽ゆと、信なりや否やを知らず、此地曾て武田機山、北條氏の將北條綱重と戰かひしところ之を過ぐれば興津の町、晴灣の邊海水浴館と旗亭とを兼たるもの五六あり、毎館多くは瀟洒、亞字欄に靠つて騁望すれば、霽色灣に充ち、紺碧の海は微瀾の笑めるが如く、西は龍華寺の邊清水の港、東海を抱いて環の如く青嵐舒やかに



興津清見寺

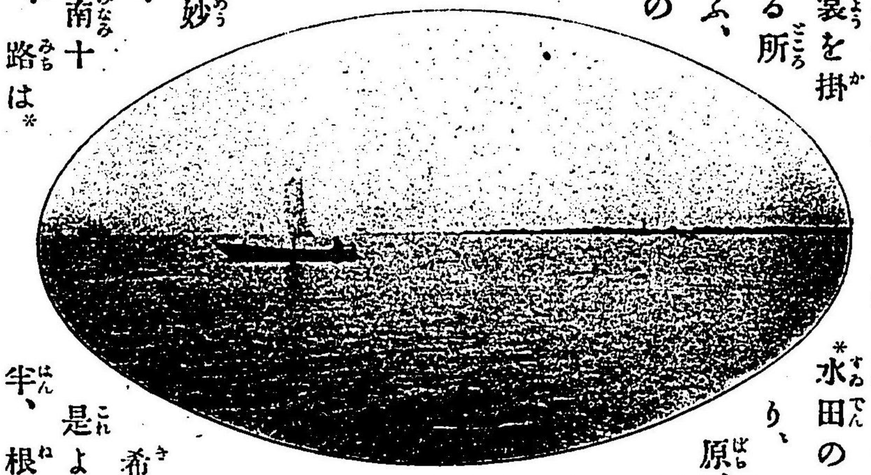
は原吉原の松林に續ける伊豆の山々、

度り、其の環の缺けたるところ、三保の松原遠く翠一帶を施きたり清見寺の寺門の在るところは則はち古の清見が關趾、當時其の關門の前に駢列して霜威人を壓したる刀戟斧鉞の類の、今鏘華爛斑たるもの寺に秘藏せらる、蘭若高く青山に倚りて百里を眼中に收む、堂前古梅樹あり、幹折れて地に入り、更に地を出でゝ走ること十數歩、別に垂絲櫻二あり、花時に至れば珠簾聲なく半天より垂る、尤も美觀、是れより長松平沙路迷はず、直ちに江尻より清水港に至る

清水港は海道有數の港灣、陸には百貨を集め水には千帆を簇らす、海水浴場あり朝陽館といふ、舟を僦て三保の松原に至るべし、所謂三保の松原は港の南三保の村に在り、長州一帶東南に同て舒ること一里にして遠く、下には白沙あり上には老松多く、鐵枝狼藉千樣の趣態、御穗神社のある所尤も蒼古、松聲青く瀾語紫

倉澤の富士

に、逍遙の人をして歸を忘しむ、汀邊の一古松は是羽衣の松、曾て天女の霓裳を掛けたる所と傳ふ、*水田の中に逶陀し、富士見村に至つて龍華寺あり、寺は青嶂を後にし晴灣に對し、左には蒲秀麗の地由來神話多し、故に穿鑿せざるを妙とす、港の南十餘町、路は半、根古屋の村に入りて古歌の所謂有渡の濱邊

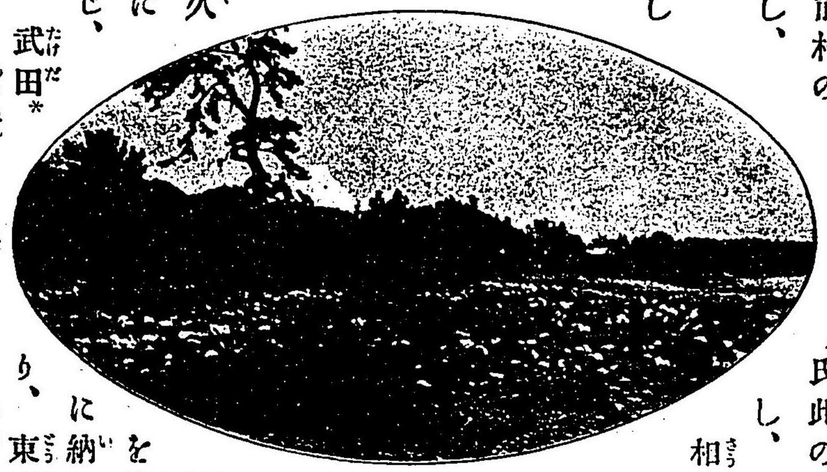


原、薩陀の峰さては興津江尻の長汀曲浦、塔影樓影霞みて夢より淡く、右は三保の松原、富士の山皎然として海に涵すを見る、其の景清見寺に讓らず、佛堂の前大蘇鐵樹ありて叢り立つ、尤も高きもの二丈六尺、太さ合抱、低きものも一丈八尺に下るものなく、老幹亭々として中霄に入り、葉の大いさ箕の如く、海風に扇く、更に覇王樹あり、葉の數凡そ五百枚、數間の地を掩ふ、兩ながら希物と稱す

是より路は幾個の海村を過りて行くこと一里

を度り、遠州洋七十五灘を眺めつゝ久能村の久能神社に詣る、根古屋村の邊桃林多し、春闌黄昏の時海風林を吹いて碧桃寒く、落暉波に在り、罷釣歸來の漁人蕭々として行歌相送迎するのところ、詩すべく畫すべし

久能の山は地を拔くこと八百九十尺、峭壁削るが如し、東照廟の在るところ、崇廟嶙峋に倚り、金碧煌燿老松と映帶し、高く大洋の波瀾を壓す、昔推古帝の御宇久能忠仁なるもの觀世音菩薩の像を獲て一宇を此山に立て、補陀洛山久能寺と稱す、養老年間僧の行基此の寺に詣でゝ自から作るところ觀音の像を安じ、眞言の精舍とす、戰國の時今川氏亡び、武田氏此の地を領し、形勝を相し城を築き寺を村に移し、松に納れしより、東照公麾下の將をして守らしめ、公亦數々登臨して遊賞し、手づから花木を栽ゆ、



三保松原

天正の年城主丹波城今福を德川氏に納れしを

蔕するに及びて遺命に因りて此處に葬むり、山城を廢すといふ、德川氏の天下の力を極めて經營したる此の山廟なれば、甚だ莊麗なり、山を削りて石磴を作ること實に二十一曲一千三十六級、石欄苔蒸して古香人を吹く、磴盡て第一門、則ち故の城門、門扉の釘頭大いさ杏の如し、東は伊豆、西南は安倍川の海に注ぐところの大崩、城の腰の入江を傳ふて大井の川より遙かに美人の眉の如き黛半彎なる遠江の御前崎を望み、正南は則ち大平洋なり

第一門の中梅林あり、大井あり、地に入ること十餘丈、山本道鬼の穿ちしところと、遂然として水を見ず、長綆を垂れて水を汲み掬して之を飲めば味甘冽なり、更に石磴を登れば廟門あり、太だ莊麗、後水尾帝の宸額を揭ぐ、門に入りて復石磴、廟、畫棟繪欄精美を極む、廟内の承塵に三十六歌仙の額を環らす、歌は後水尾帝の宸筆、神廐に木馬あり、東照公の愛馬を摸刻せるもの、青銅華表あり、玲瓏として玉の如し、核割の梅あり、高野槇あり、高さ數丈、公の手栽といふ、鼓樓あり、寶庫あり、廟後は則ち東照公の英靈の長へに在すところなり、塋域の中、石欄干を匝らすこと長さ三十五間、石を甃みて石塔を置く、高さ一丈八尺、諸侯

伯の獻進したる銅石燈籠十數基あり、松杉昏く隕露多く太だ幽邃なり、物の見の松なるものあり、幡根を攫んで空外に懸るが如し、蝦附して俯瞰すれば、削成すること數十丈、盤鳶の脊を見るべし、

靜岡淺間神社

久能より靜岡に至る、道程二里二十九町と稱す、靜岡は海道屈指の都會市街百二十七を有し、市廛頗ぶる賑盛なり、城は德川氏の築くところ、家康晩に征夷府の印綬を解いて此の地に老す、七層の天主閣あり、今は烏有、淺間神社は賤機山の麓に在り櫻樹多し、廟殿は結構華麗、貝原益軒の日光東照廟に匹敵すといふもの溢美にあらず、晩春の時、千櫻の花廟の金翠と相映帶し、尤も綺麗、廟後の賤機山の最高峰に登れば、靜岡の全市及び安倍川の流域を瞰る

賤機山の下、淺間神社の前を行くこと十數町、人家漸く稀れに麥疇茗圃相隣る、路傍に今川義元の廟あり、青葱花荒るゝのところ黃茅の小宇立つ、義元の織田信長と戰かつて桶峽に敗死するや、麾下の士其の首を抱いて遁れ歸り此に瘞むと、義元及び殉死の士の位牌を置く、墮葉あり狗趾痕あり、蛛蜘跛扈し屍胡蝶懸る、誰れか豪傑を弔らふものぞ、是より一路長く臨濟寺の寺門に通ず、樓門あり額して大龍山といふ、門に入れば則ち伽藍、後奈良帝の宸筆『敕東海最初禪林』の大額を掲く、堂前に木蓮華多し、德川家康今川氏に質たりし時大源和尚を師とし、讀書習字したるの室あり、房の廣さ六疊ばかり、低く帳幔を垂れ、机、硯、筆

架、文庫、蒲團を安排す、許多の什寶多し、中に三國名花組合の行厨と いふものあり、家康の賜ひしものと、其の名の如く本朝及び唐土と天竺との名什を綜合して作るところ、誠に珍重すべし、僧に乞へば堂内の諸房に寶什を觀るを得べし、本堂には今川義元の衣冠して大刀を横へたる半身木像あり、雪齋長老の木像あり、茶を啜つて靜坐して群妙を觀る、境寂寞、閑花地に落ちて聽て聲あらんとす愛すべき田子の浦曲の勝は此に盡きたり

多摩川の西岸

甲武鐵道の飯田町停車場より立川驛に至り、更に青梅鐵道に乘換へ青梅町に至る、氷川まで山路七里小河内まで更に三里、青梅と氷川の中間拂子澤に旅亭あり、氷川には旅舘二あり、小河内にも旅舘あり

一路の清流群山の間より出で、湛えては靜潭となりて倒影繪くが如く、激しては奔湍となり、馬鈴の度る、杼語の聞ゆる、清瀨の聲と相和して一味の詩を歌ひ、長亭短亭を過る毎に次第に清冽を加へ來り、水中の白礫潤ふて玉の如きものを多摩川の景となす

甲武鐵道に駕して立川停車場に至り、更に青梅鐵道の流車に搭ずれば一時ならずして青梅町に至る、市廛の間を行き左折して一阪を下れば、竹樹幽邃、淺渠其の蔭に通じ潺々として鳴て人に隨ふ、路窮れば則ち金剛寺、滿地の松釵人の掃ふなく、佛堂僧房晩翠と相映ず、堂後の竹樹風を嘯んで容易に吹き放たず唯だ籟聲あり、靜かに聽けば梵唄の聲を作す寺を出でゝ行くこと數町、町盡て村、一水傍に流れ家鳴呱々として啼て人に親しむ、村盡て竹樹、樹間に初めて多摩の清流を俯し見る、兩岸皆な岩、老樹嵯牙として根を露はし、巖然として空外に懸る、水の淺きところ石白く、石の立つところ水青し、其の深潭の縹碧なるもの流れて綠々然として日華を浮ぶるところ明らかに、翠微の搖曳するところ陰り、彼岸一帶の山皆な荷葉の皴をなす、風光太だ美なり、一路あり林を穿ちて崕下に通ず、此の邊兩岸相蹙りて高きこと百尺、一橋あり飛ぶが如く清瀨の上に懸る、橋に一個の柱なし、兩岸の蒼嵒を穿つて木を横へ、層一層を加はへて中に至りて相合ひ、木板を載せて人馬を通ず、萬年橋なるもの是なり、度るもの當に氣魄を動かすべし、一昨年の某月某夜火あり此の橋を燒く、橋板多くは亡きも尚

は舊態を存し、仰ぎ見れば斷虹の如し、今人馬の往來を禁ず、老翁の舟を嵓蔭に繫ぎて渡人を俟つあり、唯だ水勢の甚だ駛きが爲めに、兩岸より鐵鎖を通じて舟を約し、別に彼岸より一條の綱を横へ挽いて以て舟を行るなり、中流のところに至りて少留し、俯して水を見れば萬條の銀箭並び下る、彼岸の水の淺きところ漣漪細々、小魚あり浮游して依るところなし

是れより一里にして日向和田、日蔭和田あり、日蔭和田の則正寺、樓門は古丹老碧結構看るべし、竹柏伽藍を護る、惜むべし昨年炎上す、二俣村を歴て拂子澤村に至る、數個の茅屋、風光水色の中に在り、晩鴉の夕陽を帶びて行くの後、溪邊の金襖子啼いて月明を呼び來るの時、景物尤も妙とす、若し夫れ日の東嶂より出づるの時、御嶽の峰の一角先づ醒れども他山は猶ほ睡る、日升り烟銷するに及んで、青綠山水の畫圖は別に異彩を添て泥金の山水屏風を披展するが如し、美觀云ふべからず

川井の村、小丹波の村を過れば脚下に喬木の梢を見る、林の缺くるところ蒼潭ありて露る、鳩の巣の淵といふ、人家の後より木石の間を下り、僅かに行き見るを得べし、路窮まりて巨岩あり、數十人を坐せしむべし、

蝸附して峭崖を下れば脚下咫尺にして深潭なり、大石左右より起りて溪を扼す、水は千峰の間より來り、此に至りて怒號して逆上す、潭呀して之を呑み盤渦すること一瞬にして千百回、俄に寂然として聲を收めて微波をも揚げず、太だ冷靜なり、蒼嵓の上一草堂あり、堂に一佛なし、凄陰幽寥なり

更に行くこと一里にして棚澤の村に至れば一溪あり、路を奪ふ、木橋を架す、瀑布あり懸崖の上より落つ、高さ一丈有半、平潭に入りてまた流れ、復橋邊に一瀑をなす、溪に傍ふて多摩川の石磧に至れば水石益す奇なり、是れより二里にして氷川の村に至るの間、山次第に高く、谷次第に深く、水次第に瘦せ、石次第に肥ゆ、途に金剛の廢あり、高さ數百尺上に赤松あり、趣態繪くが如し、氷川村は秩父山中の一邑、旅館あり、氷川神社あり、更に行くこと二里、小河内の鑛泉場あり、傳へ曰ふ日本武尊東征の歸途浴して金創を療したまいしところと、此間の風色實に凡にあらず

氷川の奥二里にして日原の里あり、洞窟山を穿つて入ること一里許、火を執つて中に入れば、石佛あり、鍾乳石あり、石皆な鬼魅罔兩の狀をな

す、其の奥を極むれば地縫深さ幾百千丈なるを知らず、炬火を投下すれば其の光り一炷香の火のごとく、愈遠く愈微かに、終に見るべからざるに至る、洞の中數岐となり、昏迷して路を失へば或は出ると能はざるに至る、行くもの導者を伴なはざるべからず、盛暑の時といへども陰寒の氣肌膚に迫ると、又青梅より多摩の兩岸梅樹多し、則正寺の邊尤も多しといふ、春風溪上に吹き渡るの候は應に、小月が瀬の看あるべし

碓氷の泉

信州の山、碓氷に至つて東し、卓拔の妙義となり、壯大の榛名、赤城となり、走つて奇峭の庚申山となり、更に野州に入りて黑髮日光の雄偉となる、勢ひ游龍の如し其の間峰の題名あるもの、城の逸史あるもの、寺の古佛あるもの、山光水色の詩すべき、畫すべきもの甚だ多し、就中日光の廟宇の華麗と風景の偉大とは共に無雙と稱せらる

赤城山

赤城沼の大朱鯉○赤城神社○赤城の原○瀧澤不動○瀑布○大通瀧○小通瀧○深洞○日本鐵道前橋停車場の東北六里半、小暮村に至るの間人力車を通ずべし小暮ゆ山の麓、項上まで四里、赤城神社の邊、人家あり旅客を宿す

山に他の奇なし、唯だ山巔に湖水あり、隱凄幽寂にして日夜雲物の影を涵し、山の缺るところ上毛の平野を看るべく、馳望甚はだ快、傳へ曰ふ、此の池に朱鯉あり大さ二三丈、好晴の日時に浮游するを見ることあり、某一昨年の夏此の山に銷夏して書を讀む、一日好霽節を曳いて高きに升り眺望ところより湖に至る凡そ十七八町程、魚の大いさ徑寸ばかり、推してこれを量れば魚の大いさ應に二三丈ばかりなるべし、某矍然として毛髮竪つ、馳せて山を下り、中途に及び更に小立して諦視すれば、湖心圓波を揚げて鉤影驚き皺み、怪魚の影終に之くところを知らずと、湖は所謂古歌の石垣沼なるもの、寒時氷を作り夏時市に鬻ぐ、沼の南に赤城神社あり、

御隆の松

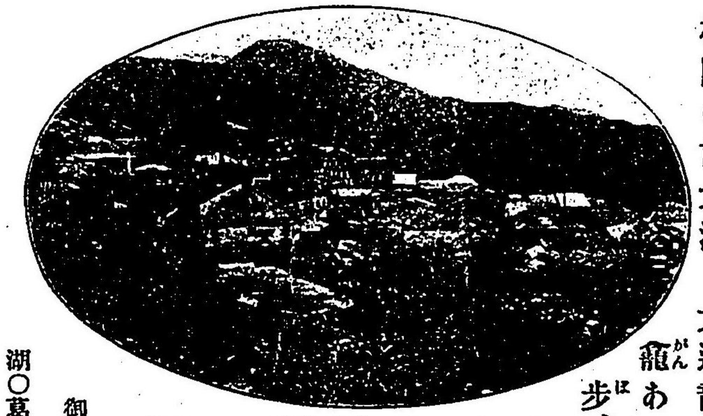
皇太后

*す、會見る湖面に物あり、色は渥丹の如く稍や金光を帶ぶ、或は左し或は右す、某大に怪しみ眸を凝して諦視すれば正に是れ魚なり、其の節を植つるのと

夏時に至れば銷暑の客多し

山の半腹の廣野は則ち赤城の原、草色青々碧落に連り、白雲に入る、間々松樹あり、一路蛇の如く草間を走り處々に斷碣あり、碣は瀧澤不動の道を勒す、一溪の清淺なるを渉れば路は彎環して深谷の中に入る、樹聲溪聲中に磬聲あり、是れ瀧澤不動の在るところ、溪底石を穿つて磴を作る、磴盡きて茨茅の樓門あり、門に入れば巨巖峙つこと數丈、巖華は青錢のごとし、岩の下洞窟をなし、中に不動堂を置く、楣畫欄繪の美なしといへども、古雅愛すべし、僧あり年齒三十左右、清瘦鶴のごとく寂然として堂を守る、風細々として吹けば溪聲樹聲堂に滿ち、鈴鐸獨り錚錚し佛燈自づから明滅す、僧耳を聾す、而も善く談じ、石鼎を敲いて茶を瀹し、茶を媒するに山果を以てし客に喜び接す、石猊語なく閑雲儘ま徂來し、亦た一幽境、溪を渉りて不動廟の背二三町、則ち石垣沼の決處、瀑布懸る高さ十六丈淙々として平潭の中に入る、飛沫霏々として驟雨の如く、樹石皆な潤ふ、僧毎旦必ず瀑布に垢離す、曰ふ身を挺して直ちに瀑下に就く時、冷鐵の頸に觸るが如く、眼を開けば唯だ千萬條の銀箭並び下るを見るのみ、初めて瀑に浴せしの時は、骨肉皆共に碎くるかと疑ふ、三冬の時間々氷片を下す、肌肉時を裂くと、袒して肩を露はせば刀瘢の如きもの狼藉たり、笑つて曰ふこれ氷瘢なり、今や肌膚鐵の如し、大石急下すとも應に微疼をも感せざるべしと

樓門の前大溪、大通龍の巖あり、鐵鎖に賴つて僅かに攀づべし、上に一龍あり、更に小通龍あり、横さまに溪に入ること數十歩、上殺、下豐、馬背の如し、蝸牛に似たる古苔あり、虛心にして行くこと十數歩なれば、豪勇の士も亦た踵を回す、一たび脚を失すれば則ち隔世、瀑の傍國定忠治の潛伏したりと傳ふる一洞あり、曰ふこの洞深く地縫に入り越後に至る、曾て一鷄を縱ちしに數日にして越後の某の谷より出ぬと、荒唐笑ふべし



伊香保温泉宿

榛名山　伊香保

御影の松○伊香保○物聞山○船尾瀧○箕輪城○二ッ嶽○榛名山○榛名湖○葛籠岩○榛名神社○鞍掛岩○高崎停車場より五里程なる滝川に至るの

問鐵道馬車あり、毎瀛車の着後發車す、澁川より伊香保まで二里數町、人力車を通ず溫泉旅舘多し重なるもの十家、木暮金太夫、木暮武太夫、村松秀藏、島田多朔、千明ばる、石阪惠十郎、塚越七平、岸權三郎、福田與重、森田秋三郎等、伊香保より湯澤の左岸を行き、湯本道より右に分かれ山道に入る、一里ばかりは伊香保平、又十數町にして榛名湖、湖畔の天神峠より神社まで十八町

澁川より至る、足指漸く仰ぐ、行くこと一里にして御影の松あり、英照皇太后陛下の曾て御輦を停めたまひしところ、碑あり歌を勒す、又行くこと一里餘にして伊香保、山淺く谷低く溫泉旅舘その間に簇る、亭舍多くは清潔、暑を避け病を養ふべし、溫泉滾々として湧き伏樋により毎家に通じ、溢るゝもの落泉となり泓池となり、更に小溝を走りて路傍を流る、池に游魚あり、溝に水車あり、泉質は炭酸泉にして色やゝ赭赤、臭氣なし、夏日に至れば浴客群集し、太はだ繁華なり、伊香保神社あり、物聞の山は町の東南に立つ、郭公の名所、船尾山は高崎街道の西に在り、傳敎大師の開基の巨刹あり、只今

伊香保沼

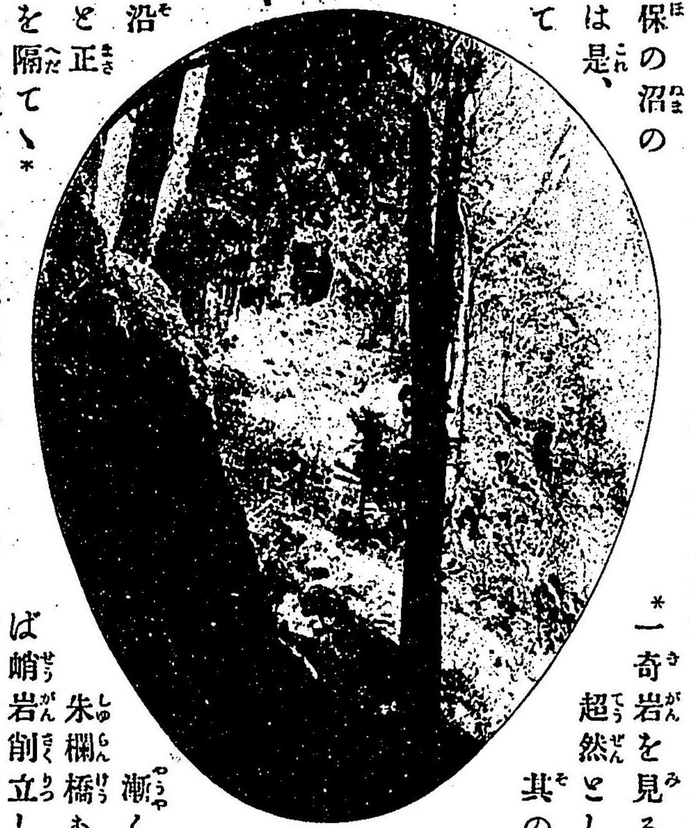
唯だ荒草の中に斷礎を見るのみ、

船尾の瀧

山に船尾の瀧なるものあり、高さ二十丈ばかり、溪深く石多し、山の南に箕輪城趾あり、大永年間長野信業の築くところ、武田機山の雄略を以てするも之を拔くに五年を費せりと、伊香保の南二十餘町にして二ツ嶽の蒸風呂なるものあり、熱氣砂中より噴けり、病客爛砂の上に偃臥すれば、煦々として美慵を發す、榛名の山の榛名神社に詣る、伊香保より二里二十餘町、車を通ずべからず、伊香保より湯澤の左岸を度りて一橋を渡れば、路は峰巒を抱いて之字樣をなす、伊香保平あり、一望の青蕪の中に倦牛の牟々啼いて背を露はし慵うげに人を送迎するあり、近くは伊香保富士、相馬が岳、加々鞠山、髮櫛山、遠きは赤城及び總常

の山皆な望み見るべし、之を過れば則ち榛名湖、上下の碧落四圍の青嶂を浮べ、洸洋として一色をなす、其の東岸清淺のところ菖蒲あり、古歌の所謂伊香保の沼のあやめ草とは是、

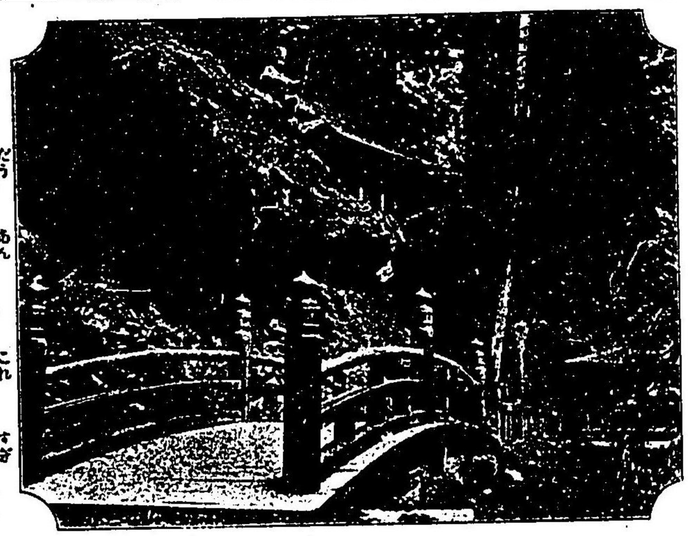
*一奇岩を見る高さ幾十丈、超然として天を摩し、其の頂岩石累重して將に頽れんとす、其の名狀甚だ奇峭、辨天葛籠岩といふ是なり、



榛名湖を下にす、眺望甚はだ美、大溪に沿ふて下ること正に半里、溪を隔てゝ、*

湖右に沿ふて行けば天神峠、大華表あり、青天を上にし澄

く、巖を穿つて磴あり、四脚門を立つ、柱や扉や皆な蟠龍を刻す、丹碧多くは剝落して苔を生ず、老楓あり鐵枝嵯峨す札して曆序楓といふ、漸く奇、路盡きて朱欄橋あり、橋を度れば峭岩削立して古華人を吹



榛名神橋

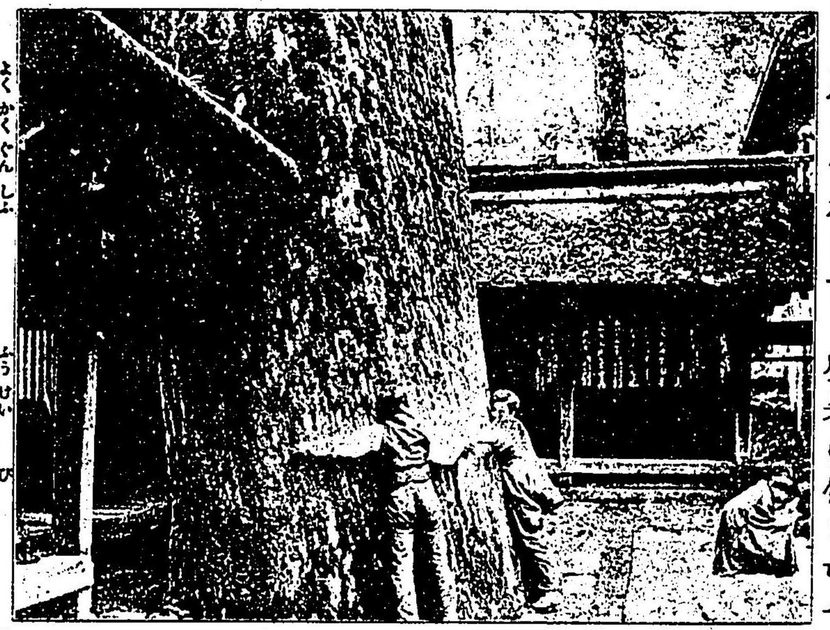
落泉あり琴筑を鳴らすがごとし、萬年泉といふ、その間蒼岩面を壓して起ち老杉四に匝り、人の衣袂を青殺す、風なければも一味涼あり、更に石磴を登り盡れば則ち榛名神社、廟宇壯麗、萬巖萬樹の中に在りて太だ靜幽、廟の傍ら鐵燈籠あり、圓蓋にして六稜幹、鏽花あたかも銀針綵絲巧みに繡ひし來るものゝ如し、新田義貞の寄進せるところ、社背に巨岩あり十數丈、巨人の形をなす、御影岩といふ、退ぞいて更に別磴を下れば、又朱欄橋あり、巨巖人と路を爭さふ、下に窟あり、一堂を安ず、之を過れば繪くが如き三重塔あり、又溪に沿ふて行くこと數十歩、巨巖あり勢飛動せんとし半ば溪を掩ふ、鞍掛の岩といふ、更に樓門あり、門の下石磴數十級、磴を挾さんで御師の家あり、乞へば人を宿せしむ、また茶亭あり、飯酒を賣る、凡そこの一區、巖老樹古、

花はだ凄陰にして、孤詣の客は久しく居るべからず、盛暑の候といへども老鶯鳴いて止まず、更に不斷の鵑聲あり

妙義山

磯部○松岸寺○碓氷川○妙義町○妙義神社○金洞山○風穴○奥の院○大日峰○石門第一○石門第二○石門第三○石門第四○金鶏山○奥の石門○青牛道士○磯部、鑛泉旅館鳳來館、三景橋、對岳樓等あり○妙義は磯部より二里、松井田にて汽車を下り、更に驛より碓氷川を渡れば、一里にして妙義町に達す、旅館あり、松井田にも亦旅館あり

高崎より再次の停車場を磯部といふ、溫泉あり、曾て縉紳の別墅あり、浴客群集せしも風景の美なきを以



樣名大杉

て今は漸く人に疎まる、溫泉旅館あり、村の東十數町にして磯明山松岸禪寺あり、蕭條たる一古刹なり、佐々木盛綱の墓あり、石塔缺損して苔多し、正應六年四月日の七字僅かに讀むべし、匝らすに石欄を以てす、又た大野九郎兵衛の墓あり、唯だ一片石のみ、勒して慈望游謙の墓といふ、九郎兵衛既に赤穗城を致し、孤劍飄然として來りて此の地を相し、庵を結んで終焉の

樣名明神社

ところとなし、字を村兒に敎ゆ、寛延四年の秋九月亡すと、

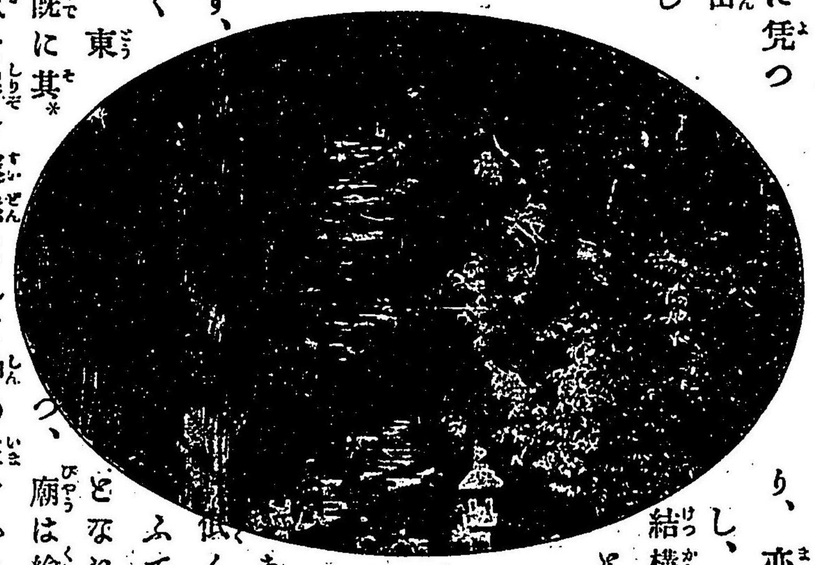
磯部より妙義に至る二道あり、一は町より折れて桑田の間を行き、幾個の村落を過れば路二里にして幾く、一は渠車に乗じて松井田の驛に至り、碓氷の川を渡れば一里にして妙義に達す

碓氷の川の清瀨を度りて、漸く山路、仰ひで妙義の山を看れば白雲、金洞、金鷄の三峯*ひで山を看、看て終に山を見ざるに至れば則はち妙義町、簇々二三十家、

葛籠岩

浮動して中に樓觀人家を見る、竹樹桑田行々仰*皆巒頭皺をなし、蹙々空を刺す、曉日夕暉の時、寒嵐低雲搖曳

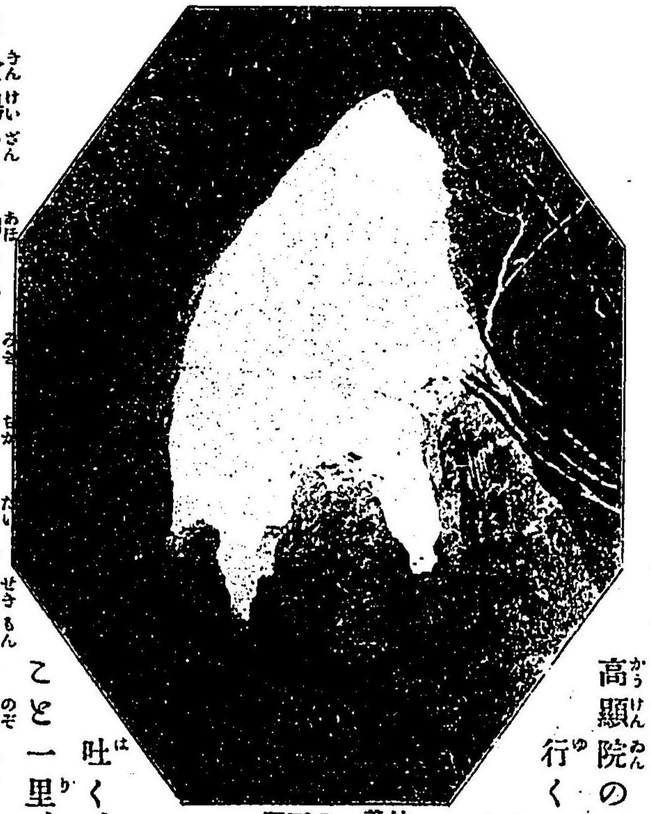
幾年の昔まで面の白き衣の香へるもの亞字欄に凭つて人を送迎し曾て山中に小繁華を稱せしもの、今は則ち人烟稀少、旅館蕭條として兩三家、町の人たまさかの旅人に木枕蒲團一夜の睡を借すの傍ら、屋背の石田數畝を耕やして蒲衣糲食す、而も夏に至れば多く銷夏の人を簇らす、東宮殿下の離宮今や既に其*人をして情を遠け氣を屏け邃然として神の在すかと思はしむ



*の礎を此の地の好風景地に置けり、亦た昔日の觀に復すべし、樓門町を壓して立つ結構莊麗、遍して高顯院といふ、門を過ぐれば堂宇、石磴數十級杉昏く苔白し、上り盡れば廟門、金剛力士の手を戟して靈境を呵護する門を入れば冷雲あり、低く垂れ、時に天風に隨つて上峰の寒嵐凝つて露となれるもの紛々として落つ、廟は繪楹彫扉、甚だ壯嚴に

妙義石段

高顯院の扁額ある樓門より左折して行くこと數百武、小澤某の葡萄園あり、一溪を渉れば則ち金洞山、山の奇漸く初まる、遙かに大溪を隔てて金鷄山の峰角に風穴なるものを看る、風蓬々然として雲を飛せば、洞呀してこれを呑み呑んでまた吐く、一路上下巖樹の間を行くこと一里、濶然として望み開く、左に金鷄山を仰ぎ、右に近く第一石門を望み、更に行くこと十數町奥の院に至る、神官の宅あり、客の爲めに飯を供す、留題名簿あり、客をして名を記せしむ、宅背は則ち大日峰、全峰皆な巖、高さ數十丈峰の形は春筍の如し、石樹骨立し、半ばより以上は一毛をも生せず、岩を穿ちて磴を作る、皴盡きて大石彈渦皴をなす、身を欲だてゝ僅かに登れば、更



妙義一の石門

に巨巖の眉間を壓して起るあり、一大巖を踰れば則ち絶巔、坪地あり僅かに數歩、行き猿攀して上り、一條の鐵鎖盡きて更に鐵梯、蝸俯して一柄の幣帛を置く、人の能く佇立して四外を下瞰するもなし、皆な匍伏して僅かに見る、神悸れ心驚ろき久しく居るべからず、若し氣を縱ちて高歌すれば、聲は山を度り雲に入り、木石皆な應じて木魈天狗の類啞然として大笑するもの、如し、大日峰を下りて故路に出で、更に山に入りて亂岩の上を度れば則ち、石門第一、高さ五丈許濶さ一丈有餘、人をして巨靈の奇を弄するに驚ろかしむ、

妙義二の石門

天霽るの日は常の筑波山を遙望すべしと、更に岩樹の中を行くこと數百歩、第二石門に至る、大さは第一石門の三分の一、嶮奇はこれに倍す、門に入れば正に第一石門の側面を見る、巨劒の倒懸するが如し、門を出れば峭壁十丈ばかり、鐵鎖に賴つて僅かに下り復た上り第三石門に至る、門は横さまに濶し、巨魔の口を開くが如く齒牙全たく露出す、更に第四の石門あり、大さ第一門に讓らず、奇峭は及ばざるも壯觀はこれに過たり

山中の人曰ふ、此の山の石門其の幾十なるを知らず、人の稀れに至るも十六門に過ぎず、其の多くは第四門に至り、其の嶮絶なるに怖れ色然として踵を回す、石門の中最とも琦瑰なるもの金鷄山の奥に在り、長さ三十餘丈、高さは五六丈を下らず、進むこと十數歩にして昏黑漆の如し、一泓の池あり、水清冽、火を揚げて照し看れば、岩皺自然に鬼佛の模樣をなす、俄かにして洞磬折し、朗然として碧落を見ると、此の山曾て長清道士あり、父の仇を復し避けて此の山に入り、巖下に就いて錫杖頭をもて洞窟を穿つこと一丈許、八柱を留めて穹窿門となし、窟を支ふ、中に冥座して出でざること數年、道を修し心を練る、一青牛を養ふ、毎に

青竹筒を其の角に懸く、食盡くるに及べば、木葉を摘して蕎麥粉味噌若干と求むるものを書し、卷いてこれを青竹筒に盛り、放ち遣る、牛其の意を解し山を下りて松井田の村に行き、牟々として啼く、里人相告て曰ふ青牛來青牛來と、木葉簡を出だし讀んで其の求むるところの物を喜捨し、牛背に載すれば、青牛乃はち還る、光風霽月の夜時に道士の青牛に駕して虛明に游ぶを見る、年百四十餘、延寶乙丑の年、一夜之くところを知らずといふ

峡中の山水

高雄山○琵琶瀧○蛇瀧○小佛峠○古戰場○吉野○關野○猿橋驛○猿橋○桂川○笹子峠○駒飼村○天目山○首洗池○景德院○甲將殿○寺の古物○甲府○差出磯○逸甲橋○昇仙峽○北岳禪寺○洞門○昇仙橋○仙蛾瀑○猪狩里○金樓神社○誓紙鐘○望岳第一○獅子淵○石獅○羅漢寺○身延山久遠寺○芬陀利峰○七面山○富士川を下るの記○禹瀨○菅沼古城○四行瀧○屏風岩○苞石○甲武鐵道にて八王子に至り、高雄山に倍て更に小佛峠の峻嶺を度り、五里半にして相模の吉野驛、一の谷川を渉りて行くこと五里、有名なる猿橋に達す、猿橋より行くこと四里にして笹子嶺あり、亦た峻絶、踰れば駒飼村、村の北二里にして勝頼戰死

のところ天目山あり、駒飼より五里にして甲府、凡そ小佛より一の谷に至る馬車あり、一の谷川より猿橋に至るまた馬車あり、猿橋より笹子峠に至るまた馬車あり、別に笹子峠を度るに駕籠馬車なるものあり、駕籠に四輪を附し一馬これを曳く、凡そ一輛毎に旅客三人を容る、輕籠喜ぶべし、既に山を下れば馬車あり、殘山剩水迎へてまた送り、長亭短亭路迷はず、直ちに甲府に至る、甲府より北三里半にして御嶽山あり、所謂昇仙峽なるもの、車馬を通ぜず、唯だ駕籠あり、差出の磯は甲府より東北三里餘、馬車、人車あり、甲府より鰍澤に至り、船にて富士川の急瀨を下り、身延村宇波木井の岸に達し、行くこと五六町にして身延山、鰍澤より富士川を下れば、駿河岩淵まで行程十八里、四時間にして達す

甲武鐵道の軌道直きこと髪の如し、直ちに多摩の清瀨の上を渡りて調布の里の邊を過り、八王子の驛に停まる、此の地は蠶桑の市場、甚はだ賑盛なり、一里にして高雄山あり、馬車あり客を載せて山麓淺川村の高雄橋邊に達す、松杉天に朝し頗ぶる幽邃なり、登ること三十町、藥王院あり、飯縄權現を祀る、峻磴登り盡せば社殿、彫檻畫楣甚はだ莊麗なり、藥王院の僧坊儘ま客の淹留を容し、精進の饌を供す、銷夏の好境なり、山に琵琶瀧あり、水平石に布きて琴筑を鳴すがごとし、高さ丈許、琴筑を鳴すがごとし、更に蛇瀧あり、水蒼岩の缺處より落つ淙々二丈許、山の最

高所に至れば、甲武相の群山波濤のごときを見る、望み濶大、青女一夜風霜を飛して、黄葉紅葉夕陽の山に滿つるの時は、尤も美觀と稱す

小佛の峠は武相の境たり、海を拔くこと實に一千八百尺、故道は峻險、新道は稍平夷、馬車に踞して雲物の變化を看るべし、而も凡そ一里の間は車を捨てゝ徒歩せざるを得ず、永錄の四年、梟雄武田機山の萬兵を提さげ來りて關東の覇主北條氏政の軍を破りしところ、峰高く谷深く、大石犖确として路に當る、伏して高木の梢を見る、小なること猶ほ春の野邊の菫の如し、亂雲亂水世と相隔つ、幾個の溪村を過りて吉野驛に達す、更に一の谷川の清瀨を渉り、鞭聲肅々として嵐光水色の中を過ぎ、桂川に傍ふて關野の古關を度り、上野原、野田尻、鳥澤を歷、終に飛驒の匠が創めて作りたりといふ猿橋ありところ猿橋驛に達す

桂川の清流、遠く群山の翠微を載せ來るが爲めに、初めは水の晶白なりしもの次第に青、次第に碧、終に靛藍の色をなして盤桓して驛を過ぐ、兩岸欹立すること數百尺以て水を扼す、石に骨あり水に肉なし、相激して玉屑を飛し更に交綏して水石共に淵默し、深潭冷然として獨り澄めり、兩岸は皆な陰樹、風吹き度るごとに、驚翠愕綠、潭氷微かに笑つて倒涵

の影を皺ます、所謂猿橋なるもの飛が如く其の上に懸る、長さ十七間、幅三間、橋下に一柱の支ゆるものなく兩崖を穿つて礎を置き、横さまに木を加へ遞ひに層疊して寸を進め尺を延べ、空外に相合ふ、橋板を布き欄干を立て以てこれを作る、奇巧驚ろくべし、欄干に靠つて俯瞰すれば、陰樹の下、潭光宛ら眼睛の如し、人の顔を映じて小なること徑寸、

猿橋より四里にてし笹子の嶮あり、海を拔くこと實に三千四百七十尺、駕籠馬車なるものあり、一馬これを挽きて奇峰削蜋のはとりを度る、亂雲蓬々車と路を爭さふ、深谷の下を見れば大木のさながら苗のごときを見る、而もこれを平地に移栽すれば梢は應さに雲漢に入るなるべし、雄峰谷を隔てゝ立つ、屯雲蒼茫として平湖のごとし、氣象壯大なり、山を下れば駒飼村、東北に行くこと一里にして天目山あり、武田氏の亡びたるの地、山は日の川を帶び星川に枕み、海拔三千五百尺、天爵古杉の林を吹ひて猶は當年叱咤の聲を作す、山に首洗池あり、傳へ曰ふ武田勝頼の首を洗ひたるところと、池水淡朱の色を帶ぶ、梟雄の血玄黄、雨淋風晒四百年の今に至りて猶はいまだ晞かざるものか、山麓の田野村の景德院は、則はち天正十年三月十一日勝頼の屠腹したるところ、伽藍華麗百個の觀音菩薩を安置す、惜むべし數年の前炎上して烏有となる、廟あり勝頼、信勝、勝頼の室相摸の方の靈を祀る、甲將殿と云ふ、勝頼既に天目山に敗れ織田の軍金鼓雷發、潮來して圍む、勝頼顧笑し、傳家の寶、無楯の甲を其の子信勝に授せしめ、石に踞して老臣と共に枯魚冷飯を頒ちて酒を擧げ、更に健鬪して刀缺け弓折るゝに至り、腹を屠つて寂然として逝く、寒煙荒草の中、老僧の當年の事を語るを聽けば、肉の動き髪の竪つを覺えず、誠に梟雄機山の子といふに負かず、風煙低迷の時は尤とも吊客をして悲しまし む、寺に武田氏傳家の緋絨鎧、香爐、勝頼の硯箱、武田氏二十四將の畫像あり、別に殉死の侍臣侍婢五十餘人の石塔あり

甲府は則はち梟雄武田機山の崛起したるところ、亂山四に圍り甚はだ形勝の地たり、葡萄の名あるところ、甲斐絹の名あるところ、水晶の名あるところ、市店繁華、甲府より東北三里半にして八幡村に差出の磯なるものあり、笛吹川の左岸に在り、遞逶たる平阪漸く高く、川に入りて欹たち、上に青松多く下に亂石あり、丘に依り水に傍ふて酒樓多し、龜甲橋長さ六十二間、清瀬の上を渡る、岸に櫻樹あり、螢多し、尤も美觀

所謂昇仙峡の絶勝あるところの御嶽山は、甲府を去ること北四里にして近し、鹽邊の村小流の橋を過ぎ、關屋、千塚の村を歴て常に荒川の右岸に傍ふて行く、山様水態畫圖も若かず、龜澤の川に沿ふて巨鼇山北岳禪寺あり、青嶂缺くるところ伽藍を含み、亦た畫中の物、溪に沿ふて兩山の間を行く、左右の山皆な板石、古樹舞ふがごとく空外に懸る、峰の高きもの長箏の如く、巒の低きもの覆荷の如く、層翠頽嵐曲々として路窮まるがごとくして復た通ず、行くこと十四五町程、忽ち驚く巨巖磊々斗出し路を壓するを、下に一岩あり、石脚地に入り痾癰して僅かにこれを支ふ、自然に洞門をなす、左は則はち荒川の急湍、見て行くこと十四五町程にして溪を截ちて昇仙橋あり、深樹の中を穿ちて仙蛾瀧下ること三十尺、更に一洞門あり、高さ三丈、門を入れば山水益々奇絶、應接に遑あらず、終に猪狩の里を過ぎ、宮本の村に入り、金櫻神社に詣る、樓門、神廟金碧煌燿たり、旅館あり、水晶の器什を賣るの家多し、別に一椀の屯雲啖ひ來りて齒牙の香ばしき名物の蕎麥を賣る家あり、神社は雄畧帝の御宇の創立にして、日本武尊、大貴巳尊、素盞嗚尊を祀る、大陰暦三月十一日より五日の間大祭を執行し、賽者雲集す、金櫻あり今は別木、

武田氏誓紙の鐘あり、武士二心なきを明すにこの鐘を撞き仰ひで天日を指さし以て誓ひしといふ、其の大華表の前に立てば、群山缺くるところ富士の皓然たるを望む、望岳第一と稱す、この山別に不動瀧あり、獅子前瀧あり、白岩瀧あり、獅子が淵の上に石獅子多く、人ありこれを算べて七十六を得たりと、伏するあり、躍るあり、雲を望んで嘯ぶくものあり、繡毬を弄ぶが如きものあり、皆な雨鐫霜鏤自然の態をなす、天風亂雲を吹くの時、彷彿として吼聲を聞くが如しと、其の下は則はち獅子が淵、彼岸の岩飛躍して溪を度り、此岸に至り自然橋を作る、溪水其の下に噴迫して甕を決するが如し、是れより八十八曲の古道を歴て社前の隨身門に至る、日暮れ人稀れに、天壇の邊り香烟低迷して雲となり、淡月微星依稀して來りて廟を照すの時、殆んど人寰にあらず、羅漢寺にまた自然の石人多し、太刀岡山は日本武尊の兵戟を埋めしところ、山に裂岩あり、巨靈の劈截せるかと疑がふ、山陽氏曾つて耶馬溪に游んで曰く天下の奇勝と、人は曰ふ昇仙峡の勝これを耶馬溪に比して多く遜色を見ずと、中村敬宇の記に曰く

黎明府城（甲府）の北門を出で行くこと數里地勢坦夷北に方りて衆山

有り甚だしく高峭ならず而て重沓回互隱秀致有り中に一條の路を通じ彎環登る可く老松蒼蔚山谷に彌滿す和田嶺と曰ふ嶺頭に至る比ひ朝暾輝を漏し天氣淸朗なり顧みて芙蓉を見れば秀色亂松鬟髻の間に隱見す矣嶺を踰えて北望すれば眼界忽ち濶く田塍の間を行く數峰前に當り拱するが如く揖する如く中に玉立瑩徹雪を戴く如き者有り高砂山と曰ふ漸く近づけば則はち山皆な白石而て碎けて沙渚となり徑間に遍布す余依田某と攀ぢて而して上るに沙流れて足を受くるに堪へず一足將に擧らんとして一足已に達す手を引いて旁邊の石を攀づれば則はち石轉じて而して下る鳳岳子元山行に慣れ早く已に上頂に在り俯して吾輩が顚頓狼狽の狀を指して以て笑と爲す也。是より山麓を繞て而して行く左右回環して東西を辨せず忽ち一潭を得兩岸皆石蒼黝にして皺あり小松其罅に交絡し直下數仞水勢甚峻旁溢して潭と爲る長潭と曰ふ余奇々と連呼して已まず鳳岳曰く猶は未だし也と更に數折す不動瀧と爲す水中大石橫はる馮十人を坐す可し前に巖崖有り高低相錯る猴巖と曰ひ寒山拾得巖と曰ふ皆な形に由て名を得水其下を經淙々として響有り行くこと數折嶺斷へ望開き一水前に當る橋有り渡る可し有年橋と曰ふ又迂回

して而して進む水有り巖足より出て而して來る橋有り柴橋と曰ふ遙に左に一峰の雲表に突兀たる者有るを見る覺圓峰と曰ふ橋を渡りて而して左すれば水益々駛くして巖益々奇なり鳳岳曰く是より而して石門に至る迄を最奇絕の所と爲す巖足を繞り水に沿ふて而して行くに一路蒼崖束ねたる如く對峙數丈翠松頑石延蔓歷落丹靑綺繡明淨愛す可し而して向に見る所の覺圓峰時に左し時に右す路之迂徐宛轉せるを知らず而して峰の遷轉して定まらざる者と爲す也奇なる哉。行くこと數百步接待亭あり左は深溯に臨み右は巖壁に迫る亭に登りて而して望むに景極めて多く縷記するに遑あらず傍に碑有り七十許りなる老人の像を刻す骨格非凡なり乃ち新道を闢く所の圓右の像也圓右は此爲り自ら錢財を捨て斯道を闢く豈巨靈手を斯人に假り以て千年未發の奇を抉するに歟。路又左右に轉じ巖腹を度りて而して下る石壁突出して道に當る墜つる若くにして復た倚る左に巨石ありて之れを受く其の中數人の來往通ず可し靑苔紫草石上に縈絡す幾千年の物なるを知らず是れ所謂石門也石門を過ぎて而して左すれば大石磥砢溪砢溪上に橫はる者其幾千なるを知らず而して石壁峻絕にして削成する如く仰ぎ見れば丈を計らず

左に奇峯有り拔起して頭上を壓し猿鳥も亦攀づる能はず乃はち覺圓峰なり此れを過ぎて而して北巖徑狹深蜒蜿として而して上る華表有り朝天門と曰ふ是れよりして而して下る左して林中に入り荆榛を披いて而して進む雪虹瀑を視る又少しく北して而して下る左せしに巖石突怒し水流交衝し左塁右激響林壑に震ふ巖を眩巖と曰ひ瀑を仙娥と曰ふ余石上に攀ぢ以て其の注射の勢を觀んと欲す而して足を置く所無きに苦む鳳岳雙手を以て吾趾を握り掀して而して上ぐ予石を抱きて而して上瞰す焉激湍飛流瀰渤怒溢大なる者珠の如く小なる者沫の如く毛髮爲に悚く又行くと數折則ち地忽ち夷に景忽ち曠く田疇繡錯遠山數片畫圖の如く茅舍竹屋所々點綴す猪狩村と曰ふ一路曲々人を引て勝に入る所謂千巖競ひ秀で萬壑爭ひ流るゝ者已に厭に屬す矣是に至て忽ち遠山の淡宕田家の蕭散なるを見反て風光一新せるを覺ゆ造物者布景之妙一に斯に臻る嘗て左氏が大戰を紀するを讀む龍戰虎鬪風雨交々馳せ讀者色動く而して末段は門淡之筆を以て之れを結ぶ何等の神品ぞ豈此等の山水を以て粉本と爲す邪予嘗て謂ふ文章之妙は一の轉字に在りと今新道之勝を觀るに其妙も又然しり。行くこと里忽ち石磴數百級廟宇嚴整にして樹

林の間に掩映するを見る乃ち嶽祠也歸路は故道を取る故道は未だ開かざるの前嶽祠に至るの路也風景淡冶愛す可し右には信濃の衆山を望み翠屏を列ねたる如く而して左は則はち新道所經之山爲り而して覺圓峰時に其頂を林樹の間に露はす余體羸弱にして遠行に堪へざるに此日健歩甚だしくは疲れず舍に歸れば則はち初更なり。嗟余峡に官して殆んど且つ一歳而して御嶽之勝今日始めて吾手に落つ矣任滿て東歸するも復た憾み無し是夜頽然として寢に就き而して夢魂徜徉し猶は巖壁の間を繞る如きなり

身延山妙法華院久遠寺は、古への蓑夫の里に在り、實に日蓮宗の總本山たり、甲府の南十里餘、賽客は甲府より四里半にして鰍澤に至り、舟を僦ふて富士川を下り、波木井より上陸するを捷路とす、並木井より久遠寺に至る、僅かに數町のみ、日蓮上人曾て此に庵を構へ敎化す、弘安四年一堂を舊庵の邊に立つ、これ久遠寺の權輿なり、降つて其の十一世日朝上人衆生の喜捨せる淨財を得て大伽藍を建立す、金碧煌燿飛鳥も怖れて近づかず、更に伽藍を匝りて九十四個の坊舍あり、明治の後火あり、二王門、祖師堂、眞骨堂等を燒く、信徒雲集數年ならずして故の壯嚴華

靈の觀に復す、身延町を過りて羅漢門ありしところを度り、鷲渓の下流に架せる解脱橋を過ぎれば、石磴二百八十七級人面を壓して起る、右方の雄然として帽廂に迫るの峻岨を櫻嶺といふ、級を拾ふて登り盡せば二天門、これを入れば則はち三堂、其の東廻廊の通天橋を行けば本院、方丈而實不滅堂等*あり、本院の正門を甘露門といひ、東を紫雲閣といふ、凡そ祖師堂、扉楣欄簷皆な麟鳳百花を彫刻し、上に粉金を鍍し、廻廊曲欄皆な渥丹を塗る、青嶂白雲と相映帶し丹は燃えんとし碧は飛ばんとし、金光は浮動せんとし、清渓其の下に縈回し、誠に一靈境たり、東谷の外なる新宿を歷て、小

身延山久遠寺

阪紅葉峠を度れば則はち甲府路芬陀利峰なる奥の院は、本院より登ること五十町、日蓮上人高きに登りて東南房州の方を望み毎に父母哀想したるところ思親閣あり、風光濶大なり、山を下り樋澤川に沿ふて西に追分に出で、西谷の檀林を經て七面山に詣る

七面山は、本院より三里西谷を出で田代川に傍ふて上り、赤澤を過ぎ春氣川の羽衣橋を度り、第一華表あり、登ること五十町、路盡て七面大明神祠あり、海拔四千六百餘尺、峻嶮にして登り易からず、龍鼻三十三瀑、雨乞の淵、水綠磐のごとく老龍の棲處かと疑がふ、梵音瀧、天鼓瀑あり、春氣の川に注ぐ、社殿の傍ら更に明淨の池あり、太郎峰、次郎尾、千貫崖、沼田嶺、長嶺皆な雄拔奇峭、山東南に缺け駛望數十里

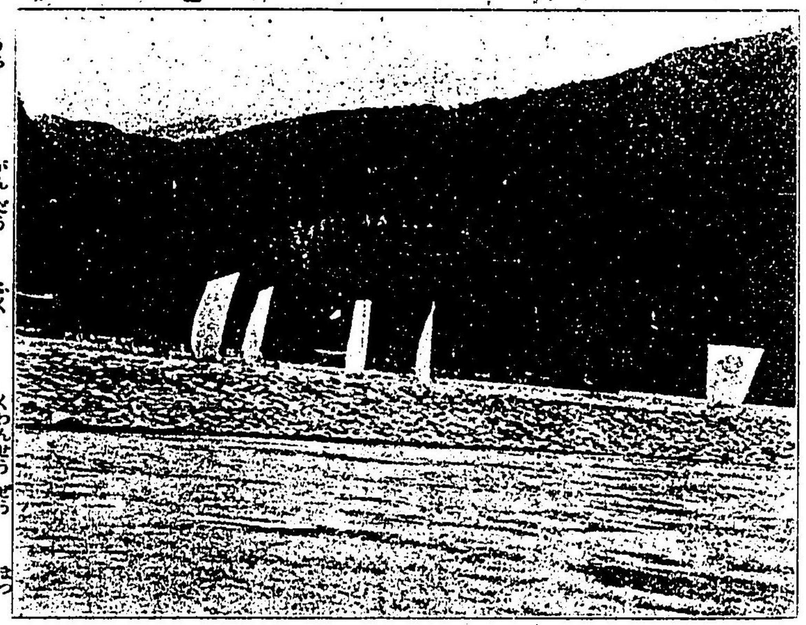
富士川の急瀨を下るの記

曉に鰍澤の旅館を發す、殘月半彎、垂れて帽廂に親しむ、四顧蒼茫、啼鴉三兩聲、微かに舟子の歌ふを聞く、睡起清瀨を汲み枯蘆を燃き以て飯を炊ぐものか、川に下れば瀨聲衣に滿ち風蕭々として吹く、兩方の欹峰

曉霧の搖曳するが爲めに浮動して定まらず、郭熙の水墨山水の畫帖を展披するが如し、水の淺き所一個の黄燈、舟あり横ふ、導かれて舟に上る、賈客數人先在り、余踞して舷に凭り、四山を看る、舟は薄板を以てこれを作り長さ二丈許、舟底平坦頓足すれば汎々として撓まんとす、蓋し鰍澤より駿州岩淵に至る十有八里、水駛く岩多し、其の奔湍に乘じて下るに當りては騎虎の勢ひあり、篙師長竿を執つて操縱し、石を回り水に隨つて一髮の機を制す、若し過りて岩と相撞着するも、舟板の軟柔なるを以て甚だしく損傷せざるを期するなり

客皆な舟に搭ず、篙師二人、一は舳に立ち一は艫に在り、長竿を執りて清淺のところに膠附するの舟を搖かして、これを中流に縱つ、奔湍舟を載せて行くこと甚だ駛し、兩岸の山樣一喫煙の間にして百變す、既にして曙光一道、峭峰の背より發し、烟漸く銷し山漸く明かに翠微川に滿ち、これを久うして終に李將軍の着色山水畫を展するが如きの觀をなす、舟中の人皆な手を拍つて曰ふ綺麗々々と、獨り篙師は唯だ嗒然として舷端に立ちて長竿を揮ふのみ、行と一里ばかり、石漸く多く水漸く白く、愕珠驚玉舟に入らんとす、舟の行くところ唯だ一道縹碧のところのみ、大

巖迎へて舟を搏たんとし、急水滾々として舟を推倒し、舟中の人を舉げて魚となさんとす、篙師自若、舟いよ〳〵近づいて間僅かに數尺、舟中の人皆冷汗滿握なり、篙師咄嗟して長竿を岩に擬し、一撞すれば舟翻然として岩を避け流に隨ふて下る、舟中の人始めて氣を下す」



富士川急流

鰍澤より小柳川に至るの間山の東西相迫つて水を束ぬ*あり、松林趣態あり中に一龕堂を含む、菅丞相を祀る、

*るのところを禹瀨といふ、上古は湖なりしを、養老年中僧行基の山を夷げて水を富士川に排注したるところと傳ふ、曾て湖たりしところ蹴裂明神を祀る、懸崖の邊今尚は斧鑿の痕を留むと」更に一峰の雄然として水に枕むこの下尤も急湍、

天神瀧といふ、今は河水東に移りて平石一帶、切石宿の北亦た孤峰の獨り秀ずるあり、四方削成僅かに雁木阪あり、遥透として通ず、是れ天正年間の豪族菅沼氏の居城の跡

水は萬澤より折れて東に行く欲岸削立、上に老松あり、赤根露出し石を攫んで偃蹇す、曾て西行法師の草庵を構へて棲遲し「駿河なる富士の烟の」と詠せしところ、其の下急湍雪を吐いて下る、舟の行くこと尤も駛し、舟中の人眩昏せんとす

早川の長流走りて富士川に入るのところ、屏風が岩なるもの峙つ、岸皆な蒼岸宛然六摺屏風、其の下舟路尤も險惡、富士川の水は早川の水を呑で盡さず、相滾轉して横さまに屏風が岩に激す、飈狂霾狼、水中の石皆な動く、篙師自若として水石と搭鬪して舟を行る、舟中の人氣魄皆な動く、其の出でゝ深水の緩やかなるを度るに及びて、竊かに相顧みて滿腔の氣を吐くなり

更に苞石なるものあり、大石の米苞の如きもの累々として相重なる、其の色紫潤、鐵の如し、亦た一奇觀

凡そ鰍澤より十八里岩淵に至る、時を費やすこと五時、日いまだ亭午に

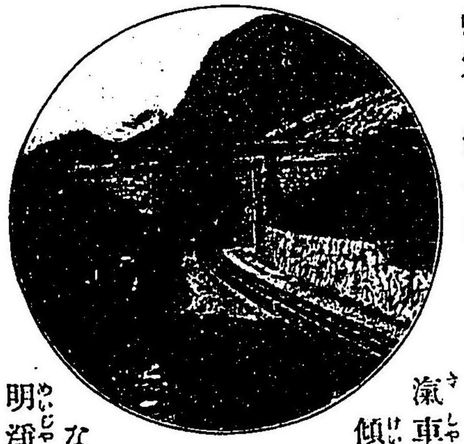
近からざるに身は既に岩淵の岸頭に立てり、仰ぎ見れば岳蓮の晴雪高く雲表に在り、秀氣人の肌膚に泌す、

雁氷の西

○雁氷嶺○霧積○輕井澤○留夫山○御代田○追分○淺間○赤澗○羅漢松○脊脱石○噴火口○木曾街道○和田峠○下諏訪○諏訪湖○神宮寺○溫泉○秋宮○春宮○鹽尻嶺○桔梗原○洗馬○本山○贄川○乘好法師○木曾古道○奈良井○鳥居嶺○藪原○宮腰○福島○上松○木曾棧道○寢覺の里○臨川寺○花濱○蕎麥○小野瀧○三留野○馬籠○十曲峠○中津川○土岐川○名古屋○霧積は横川停車場より西北二里半に在り人力車を通ず長生館、錦楓閣、溪香館あり○輕井澤に鮫屋、油屋、萬松軒等あり○木曾街道は驛亭到るところに旅館あり、風光尤も好きのところ儘ま淹留すべし

横川停車場より、碓氷の嶺を度り、信の輕井澤に至る、路程七里、山を穿ち谷を涉りて瀘車この間に通ず、隧道の數二十有六、軌道は則ちアプト式なるもの、山に入り山を出で忽ち明、忽ち暗、殆んど二時の間にて二十六畫夜、其の明らなる時は、山は綠礬の如く水は碎銀の如く、眼晴更に玲瓏なるを覺ゆ、横川より下りて西北二里半、霧積溫泉あり人力車

を通ずべし、峰巒四もに圍みて中に一村をなす、霧積川の清流その間を貫流し、山には楓樹多く晩秋霜燃ゆるの時綺麗比なし、游鹿あり、呦々として啼く、近く武尊、鹿子、背觀、忍ぶの瀑布、八栗山、鞍懸山、蝙蝠穴、游仙峽あり、海を拔くこと二千八百尺、亦是れ銷夏の好地たり


碓氷峠第一隧道

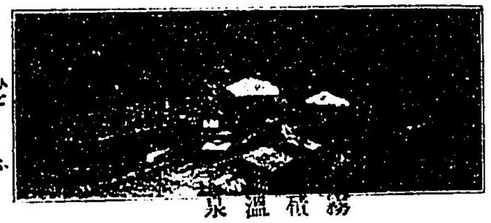
瀘車の横川より輕井澤に至るの間殆んど十五分一の傾斜をなすのところ多く、車の行くこと牛の如し、瀘關車は絶えず黑煙を吐き白氣を洩して推挽甚だ勉め、一斗の汗を流し霓の如き大息を吐き矻々として僅かに車を輕井澤に致す、輕井澤は碓氷嶺の盡頭高原の中に在りて、四面皆な山、淺間山北に聳え、釜戸岩、離山に對し大氣明淨飲水清列、雲合川の清瀨、驛を貫いて流れ、旅舘清新、逍遙游すべし、他の炎暑に苦しむの時、我は偏へに夏日の長きを愛す、近來異邦人の此の地の銷夏に恰好なるを相て、來り游ぶもの甚だ多く、其數本邦の游客の上に出づと、海拔實に三千八百尺、日本武尊曾て高きに登つて東望し、相摸の海を踏みたまひし橘姫を追憶し、吾嬬

者耶と宣まひしは、今の留夫の山といふ

淺間山

瀘車既に碓氷の峻嶺を度り盡し輕井澤に入れば一路斜に走りて車の行くや甚だ快駛、風に一味の冷あり、靜坐すれば輕寒を覺ゆ、挺然として雲表を拔ける淺間の山、幾多の山を叩頭かせて、鷹揚に點頭樣なり、輕井澤の次驛御代田の停車場に車を下れば、蕭條たる一短亭、簷長く出でゝ屋上に拳石を載せ、室毎に爐を穿つの寒國の家制は、初めて見る人の目に新たなり、是れより淺間山下の追分の驛に至る、一里許、人車を通ずべし、地磽确、杜鵑花多し、追分驛は元官道に當り、賑盛なりしが、瀘車の通せしより寒貧の一村落となれり、路傍の石佛、苔青く、酒賣る家の簷の端に杉の葉圓めし標は黃に、人烟稀少、旅舘油屋あり、舊家なり、幾代の僕を易へて拭拂したる太柱、光澤漆より黝く眉目を鑑すべし凡そ淺間の山に登るには、草鞋、長杖、行厨、及び飲用水を携さへ行かざるべからず、山尤も水に乏し、唯だ前掛山の山隈に小泉あり湧く、而も淺きこと盈尺のみ、地理に詳しからざれば索め得がたし、案内者を僦

ふて必須の物を擔はしめ、長杖を曳て先づ驛端の古祠淺間神社の後を過り、荒原の中を行く、路は次第に急なり、荒草離々の中杜鵑花多し、行くこと一里にして赤瀑に至る、水落ること七八尺幅十有餘尺、水の色赭、傍に一窟あり石不動を置く、氣を病むものこの瀑に就て澡浴す、これより上ること數十歩、更に一池あり、水の色紫黑、此の邊土爛れて泥の如し、行くこと更に一里石漸く多し、石に依て羅漢松多し、地に蒲伏して人と等身、皆な數十年のもの、葉色鮮青にして殆ど剪綵して作れるもの、如し、愈々進めば焦岩まず〳〵多く、羅漢松まず〳〵多く、地に寸塵なく、活火山中この美觀あるを疑はしむ、大石あり屋の如し、沓脱石をいふ、人は此處に至りて摩敝せる草鞋を脱して新鞋を穿ち、且つ行厨を開くを例とす、行くこと更に十數町山皆な爛沙、蝸附して上るも寸進にして尺退、沙礫滾々として走る、嶮なること富士に超過す、地を穿つて杖を植て、扶けられて一歩を進め、更に踵を爛沙に沒し、咄嗟に杖を拔いて尺前の地を穿ち、賴て以て一歩を進む、回顧すれば信南の諸山皆な脚下にあり、青きものは大野、紫なるものは平林、白きものは沼澤河川、一幅輿地圖を披展するが如し、登ること更に一里、一望爛石、茫莫として碧落に連なる、山上この大石原を觀る、亦人の想ひ及ばざるところ、石の大なるもの厦の如く、小なるもの甕の如し、間々山骨を露出し、地は多く陷裂し、曲折して山下に向つて走る、裂處より見れば黝昏にして、底を見ず、試みに石を投ずれば之くところを知らず、毛髮森然として竪つ、行くこと十數町にして噴火孔、孔を距ること數十歩にして石龕あり、曾て噴火の時大石雨下してこれを碎き、今は唯だ缺片を見るのみ、噴火口は直徑一千尺、白烟孔に盈ち流雲と相春き、溢れて水の決するが如く、混々として地を走り、人を吹き倒さんとす、硫氣鼻より腦に入り、人をして涙を隕さしむ、鼻を擁し蒲伏して噴火口を下瞰すれば、白漠々の中數點紫金の光の的爍として眼を射るを見る、これ孔奥の石燃ゆるのところか、神悸き心驚き久しく居るべからず


磐梯溫泉

退いて更に彼の石龕在るところに踞して以つて四外を見る、地は多く穿たれて漏斗狀をなす、大小錯綜す、宛も蜂窠の如し、これ大石の空外に飛躍せしもの、墜落して深く地中に入りしもの、天風蓬々盛暑といへど

も猶は嚴冬の如し、山は實に海拔八千二百尺、史に稱す、天武帝の白鳳十四年三月山初めて噴火すと、烟今に至るも止まず、富士山に登るもの、又た淺間山の嶺きを極めざるべからず

木曾街道

濃車小諸を經て田中に至る、これより道は岐れて所謂木曾街道となる、長久保驛を過ぎて行くこと二里にして所謂和田峠、前人の記するところを讀むに曰ふ路山腹を回繞す、漸く上りて羊腸だるも亦太だ峻ならず、故に其の高きを覺えずして而うして詣るところ已に高し、東顧すれば淺間以南浩々渺々一目にして盡すべし、亂山群嶺有るが如く無きが如く、西は則ち御岳、駒が岳、天際に縹渺たり、群山の波濤の如きもの亦た俯して視るべし、其の下へ纖白を曳くものあり、天龍川是なりと、天霧るゝの時遙かに駿の富士を看るべし、山に紫陽花多く、別に如輪草、下毛花、虎の尾草、釣鐘草あり、五里、山を下れば則ち下諏訪、諏訪の湖湛然として碧落を涵す、周圍十一里亘三里、水の深さ七尋、山廓水村これを匝りて畫の如し、此の水舊曆霜月の末若くは師走の初めより凍結し、

厚さ一尺有餘、上に人馬を通ず、寒月天に滿つるの時、曾て紺碧の水銀波を起せしもの、今は銷光玻璃を布けるが如く、微茫として際崖なし、漁人氷を穿つて夜魚を捕る、水に臨んで旗亭多し、其の神宮寺あるところより眺望すれば、峯巒環立、汀浦參差し、近く高島の古城より衣裳が崎のあたり、富士の晴雪を看る、『すはの海衣が崎に來て見れば富士のうへこぐあまのつりふね』なるもの是、町に諏訪秋宮あり、社殿莊麗なり、町に溫泉湧く、上諏訪は湖に沿ふて行くこと三里、上諏訪春の宮あり、社殿甚だ華麗なり、健御名方命を祭る、凡そ立春より立秋まで靈を此に奉祀し、立秋より立春に至るまで下諏訪の秋宮に移す、春秋兩宮の名ある所以なり

下諏訪より三里にして鹽尻、阿禮神社あり、其間鹽尻嶺あり、武田氏の古戰場、湖水を望むに尤も勝景、一鏡平舖し兩山蜿蜒して來り抱く、右は則ち慈雲の諸山、其の抱いて合ざるのところ遙山來りてこれを補なふ、其の天の一方に富士の山、八朶の玉芙蓉をなして遙かに見ゆ、富士は實に駿河に在りて仰ぎ看るものと異なり、其の形尤も優麗にして愛すべし、嶺は車を通せず、唯だ馬を儆ふべし、鹽尻より以西は其の境頓に異り、

連山濤の如く隅背井然、曠野は則ち所謂桔梗の原なるもの、武田上杉の古戰場、勇士の血濺いで草根に入り毎歳碧り烟の如し、一里三十町にして洗馬驛、眞福寺あり木曾義仲の馬洗の水あり、小坡の下の泓水のみ、更に三十町にして本山、三里にして贄川、是れより岐蘇の山路に入る、馬籠驛の釜が橋より北凡そ一里神阪村の船澤、古*杉兩三株石を立て兼好塚の三字を勒す昔傍に經塚あり、地を穿てば經文を書せる潤滑の木小石を獲、昔山中故に名く『思ひ立ち木曾の麻衣あさくのみそめてやむべき袖の色かは』と詠じて兼好の曾て小庵蕭然として棲遲したるところ

所謂木曾の古道は馬籠、妻籠、三留野の間は今の國道と同じく三留野の北字幸神の森より左折して東北に向ひ、興川、福栃、千若、菖蒲平等を經て今の須原驛に近づき、更に木曾川を渡りて其の西岸に傍ひ上松驛の北にて今の新道に合す、一里半にして奈良井、白木細工あり、鳥居嶺あり、『雲雀よりうへにやすらふ峠かな』と芭蕉の曾て歌ひしところ、山路羊腸、御嶽の崢嶸たるを望む、峠の頂きに人家あり、此地武田氏木曾氏の古戰場、山を踰へて一里半にして藪原、名物お六櫛あり、二里にして宮の腰、宮の腰は則ち木曾義仲の崛起したるところ、驛の正八幡宮は其の元服したるところと傳ふ、驛東の宮原は義仲曾棲の城址、樋口兼光、今井兼平、巴の宅址あり、其の巴の宅址は驛の北に在て、下深潭に臨む、大石多し、相傳ふ、巴幼時石を投じて嬉遊せし所と、日照山德音寺に開基朝日將軍木曾義仲宣公大居士の靈牌あり、一里半にして福島、東京より路程六十七里、京都より六十七里、宛も兩京の中央に在り、干瓢、凍蒟蒻、凍糕を製して他國に輸出す、興禪寺長福寺の古刹あり、豆腐、福島より折れて王瀧川に傍ひ行くこと六里、王瀧村に王瀧あり、木曾の諸瀑に冠するを以て名く、土人は「おんたけ」と訛て言ふ、路なきとこ

ろなれば人多くは見ず、瀑は懸崖の下に在り、高さ三丈ばかり、其の勢奔馬の如く、水石相激して山壑を搖す、樵人、木を伐つて之れを下すに、木流て潭に入り、煙草一管を吹く頃ほひに浮び出づ、其の深きこと想ふべし、然れども瀧の奇絶なるは鞍坡に若かず、これも行路にあらず、王瀧に至るの路、崩越村の西に在り、南岸は聳立し岩石相擁して景色を望むの地なし、唯だ怪石奇松の美を見るのみ、北岸も處々に大澗を隔てゝ灌木蓊鬱として僅かに其の首を見る、木を穿ちて下り僅かに其の全形を見る、瀧、頂より二岐となり、下りて裂けて五となり、中ごろ更に合して二三岐となる、石の奇秀なるもの多し

王瀧より瀧越に至る、路嶮絶牛馬を通せず、鐵梯を設けし處あり蔦羅を攀ぢて登る處あり、既に石壁の上に抵つて俯視すれば、削立千仞密樹の間に遙かに潭水一帶を見る、其色深碧にして青霄を望むが如し、絶壁を下れば歩に隨つて潭水漸く露はる、是れ氷が瀨なり、忽ちに一條の長橋の溪に跨るを見る、潭水に映じて白蛟の度るがごとし、氷が瀨橋といふ、梯を踏んで下る、碧潭足下に在り、岩腹横さまに板を施して圜を作るもの の二丈許、左に轉じて橋に上る、南岸を望めば巨岩聳立、摩天の勢を作す、岩腰の凹なるところ橋を架す、橋は巨木を雙べて架し、上に板を布き欄干を設く、雅素にして俗ならず、橋を渡れば右に辨財天の小堂あり、橋上の駛望、人は稱して木曾山中の第一となす、二里半にして上松、蕨餅を賣る、凡そ福島より以往絶嶮また絶勝、山瘦せ谷深く石は猛獰を極め水は狠狂を盡す、石威を收めて退けば水は笑みて流れ、盤渦して蒼潭に入り、微言挑目するもの丶如く、石更に突出し水激して吶喊す、水石相鬪ふこと二十餘里

福島より上松に至るの間木曾の棧道あり、駒が根村の大字沓掛に在り、慶安年間尾州侯兩岸の石を壘みて橋礎となし、長さ五十六間幅三間半の木橋を架せしめ、寛保年間重ねてこれを修補す、峭巖急湍其の景詩すべし、古の棧橋は駒が根村の盡頭より國道を右折し溪に沿ふて山を登ること半里、懸崖對峙して自然の橋礎をなすところ是れと、寛文の頃に至る迄蒼嵐の邊鐵鑕の鏽蝕したるもの懸る、里人これを取りて鋤鍬を製す、過まちて自から傷つくるもの多し、これ橋神の祟をなすものなるべしと、終に捨てゝ取らざりしと、『夜もなほ木曾路の橋の危さを知りてや月の澄み渡るらむ』

上松より須原まで三里、所謂木曾の絶勝寝覺の里なるもの在り、里に寝覺山臨川寺あり、寺は正に寝覺の床に枕む、兩岸峭欹して水を束ね、急湍遠くより曲々として此に來りて蒼潭となる、臨川寺の危欄より下瞰すれば、所謂寝覺の床の大石潭邊に平舗すること長さ十數丈、其の下水は綠磐の如く深さを知らず、彼岸に屏風岩あり、六摺屏風を駢べ立たるが如し、蓮華岩あり、硯岩あり、俎岩あり、烏帽子岩あり、釣舟岩あり、釜岩あり、此岸には獅子岩あり、象岩あり、葛籠岩あり、潭の寂焉たるもの須臾にして岩と相激し、千渦萬渦滾々として相逐ふて行く、頽嵐峭綠潭に充つ、尤も絶景、寺の前たせ屋あり蕎麥を賣る、家屋清雅なり、一椀の屯雲香ばし、人は流星の如くこれを食ふて美しとして、更に數椀を傾けしむ、須原の驛花漬といふものあり、花を少さき平らなる函の中に排列して妍芳の美を保たしむ、少女あり黄昏より旅館の毎室に訪れて旅客に賣る、風流なること愛すべし

路は曲々として峭壁急湍の間を度る、小野村に小野瀧あり、路傍に在り高さ三丈、直下して木曾川に入る、石不動の像を置く、須原より野尻に至る一里三十町、木曾の奔湍尤も猛烈のところ、聲雷霆の如し、處々に

棧道多し、三留野に至る、二里半、和合酒を賣る味ひ輕淡愛すべし、妻籠に至る、一里半、木曾義昌築くところ古城址あり、雌雄瀧あり、馬籠まで二里、一里五町にして落合、昔は苦竹繩を賣る、落合橋を渡り十曲峠に至る、正に濃信二州の界

路濃州に入りて中津川、二里半にして大井、この間峰巒紛糾溪谷縈回す、大井よりして卷がね、竹折、釜戸山、高山、凡そ五里、途は土岐川に傍ふ風景亦た絶佳

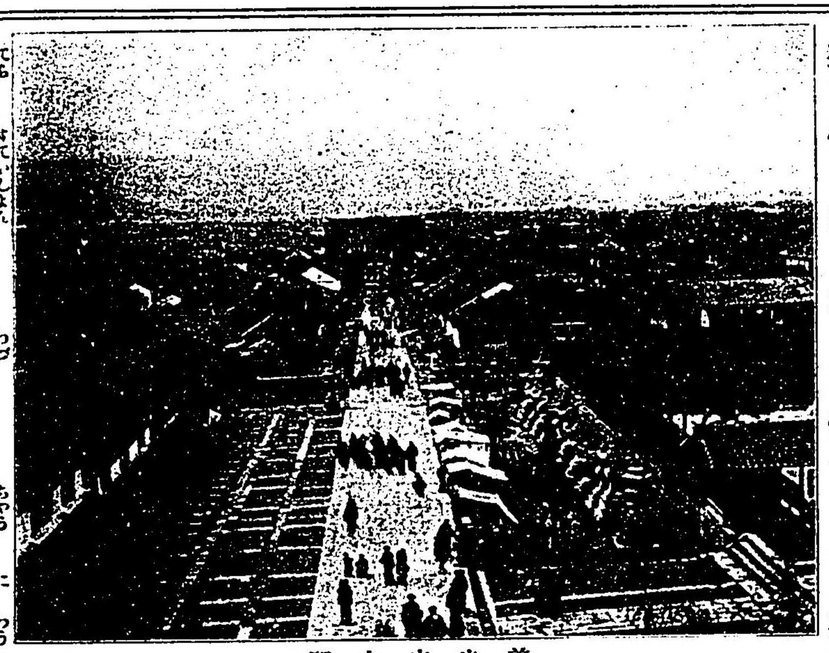
是に於て終に岐蘇と相ひ別れ、剩水殘山の中を渡り、多治見、内津、明智、大曾根を經て名古屋に入る、岐蘇山道の勝此に終る

善光寺

上野より汽車に搭じ高崎、横川、輕井澤等の諸驛を經て長野町に至る、僅かに十時間弱を費せば足る、善光寺は此町に在りて往古は善光寺驛と稱せり、信州の首府にして縣廳あり、旅館の名あるもの對旭館、五明館、山屋、松井屋等あり

往昔、天竺の釋迦如來、閻浮檀金を海中に求め得て、彌陀如來の光明と、吾が身の光明とを合せて檀金と熔和し、以て莊嚴にして微妙なる彌陀如

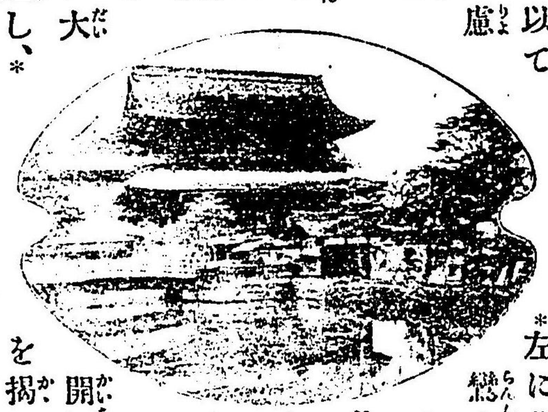
來を作り成したりと傳へらる、其の靈像を安置せる善光寺は、長野町の北、大峯山の麓に在り、世に一光三佛と稱す、長け一尺五寸の像なりとぞ、緣起に曰ふ、敏達帝の御宇、百濟この佛像を貢獻す、物部守屋、中臣勝見等、これを難波の堀江に投ず、推古帝の御宇、信州の人本田善光なるもの汀岸の邊を過ぎりて水中より靈光の燿灼たるを見、驚き拜して佛像を出し、之を負ふて國に歸り、先づ吾が屋の臼の上に安置し、尊崇すること五六年、四方の人、靈驗を聞き喜捨して子のごとく來り集り、各々淨財を捨て子井の里に堂宇を建立す、是れ今の長野の町なりとぞ



善光寺大門

寺は停車場より僅かに十町、仁王門あり、仁王門の中に山門あり、二重

の樓門にして高きこと六十六尺、文殊四天王を安置す、山門の中、雄然として大殿堂の天を摩して立つあり、これ本堂なり、本堂は南に向ひ南北二十九間三尺、東西十五間、二重屋根鐘木作にして高きこと實に一百尺なり、百三十六柱を以て之を支ふ、椽の數は無慮六萬本といふ、賽人常に群集す、其の賑やかなること東京淺草の觀音に讓らず、外陳には疊百枚を布きありて參詣の貴賤老若禮拜のところとなす、正面には大香爐を置き、香烟低迷し、*して未だ曾て開扉したることあらず、俗に御判といふ式あり、正月七日の曉天より十五日に至るまで賽詣の人の額に捺す、これを御判を頂くと稱して人雲集し喧囂を極め、後先を爭ふ、別けて七日の巳の刻までは堂



善光寺

の帳慢を垂れ、一日二回の開帳にも唯だ其の前面の垂帳を掲ぐるのみ、本尊は秘佛と稱し、善生、子善佐の木像を置く、而して本尊の阿彌陀佛は、本堂の西の方庇の間といふに安置し、龕前に錦繡上人手活の松と名く、中央の內陳には本田善光、妻彌

*左に花瓶を置き松樹を挿す、親鸞

内人に人を重ね、尤も雑踏す

又通夜と稱して、堂内に宿り、終夜佛前に念佛する者多し、堂内には唯だ一個の紙燈の夢よりも淡く照すあるのみ、幢幡天蓋の類、唯だ暗中に彷彿たり、廣き大堂の彼方此方、寂然として人佛を念ず、夜闌て萬竅聲を收むるの時、獨り不寝番の老爺の、南無阿彌陀佛を低唱して行止する、殊に凄酸の趣きあり、風雨陰寒の夜の如き、尤も寂莫、氣を屏け情を絶ち、生を厭ひ死を樂しむの念油然として起る、

境内は公園となり、竹樹泉石の美あり、舊暦三月及び十月の十五日會式あり、六月十三四の兩日大法會を修す、賽客尤も多し

戸隠山

長野町を去ること西北五里十町、戸隠村に在り、山中に旅亭二十餘戸あり、元御師の家なり

小鹿澤の溪流を渡りて山に入れば、先づ中社、寶光社の二攝社あり、更に峻路を登ること三十町にして本社に至る、手力雄の尊を祀る、表山には三十三の岩窟あり、各々岩の形によりて名く、百間長屋といふは通り抜の岩屋なり、塔谷には三重の石浮圖あり、傍らに旗鉾とて高さ數十丈の石あり、正に石浮圖の上に聳ゆ、裏山にも許多の洞窟あり、道峻嶮なるが故に討尋する人希なり、山の奥なる大日が岳までは實に七里の路程あり、中院より一の不動に至るまで二里、夫より劔が峯まで一里半、岩に攀ぢ蘿に絶りて匍匐して下れば大瀑布あり、大日の鳥居あり、石門高さ五丈ばかり、人は望み見て毛髮を竪つ、頂の石梁高さ二十七歩、徑十一歩といふ、之れを過れば水晶の塔と呼ぶものあり、磷々たる白石積で塔の如し、其の七里松といふは、細逕四十餘町、猶馬背を行くがごとし、左右の谷より五葉松生ひ出で枝は藤の蔓の如く根もなく梢もなく、七峯七谷に延茂すといふ、これを過きれば小池あり、清泉湧く、探勝の客此處に休憩して行厨を開く、大日巖の邊に至れば、雲霧常に低迷し、晨には五色の雲彩を作すと、山中に木曾殿安吹といふ大なる石室あり、徑八十間、深さ四十間、洞前に自然石の水盤あり、水洞の上より流れ、洞口に濺ぎ落ちて自然の水晶簾を作す、水簾の

戸隠神社

瀧といふ、木曾義仲の次男義重なるもの曾て此に棲しところと傳ふ、本社は五月十日、八月十五日春秋二次の祭禮あり

搖々堂なるものあり長野町より北一里半、淺川村字一の瀨、藥山の半腹に在り、山は皆な蒼岩にして鬼面の皴、米點の苔、而して傘字の松、甚だ詩態あり、其の淺川に臨むのところ絶壁數丈、中ごろに洞窟あり、中に藥師堂を置く、堂は半ば空外に懸る、堂に入れば搖々然として動く、ぶらん堂の名ある所以なり、近水遠山、風景甚だ佳なり、四月八日參詣の客を簇らす、

赤倉温泉

越後國中頸城郡字一本木新田に在り、直江津鐵道田口停車場より西行すること僅かに一里餘、人力車を通ずべし、温泉旅館に香嶽樓、村越屋、富田屋等十餘軒あり

赤倉は越後中頸城郡の妙香山の腰に在り、實に海を拔くこと二千五百尺の上にして其の山巔に至るには尚ほ五十餘尺あり、温泉は其の中腹の地獄谷及び其支峰赤倉山より湧き、兩泉合注して赤倉の一區に滙る、大氣清淨にして眺望甚だ佳なり、東南は遙かに信越の諸山に對し、北方は遠く北海の波瀾を望む、佐渡の島、米山、皆な指顧の間に在り、三島中洲翁、曾て此地に遊びて二十勝を撰す、曰く香嶽殘雪、山勢巋然として天を摩し、翠微楣欄に映ず、夏秋の交、殘雪猶ほ玲瓏として溪谷の間に在り、遠く望めば瀑布の如し、人をして午天に股栗毛竪せしむ、曰く米山浮雲、米山は柿崎の海を拔く、形米粟を盛るが如し、海氣氤氳、凝つて雲となる、曰く神名の驟雨、妙香の嶽雨峯あり、南は赤倉、北は神名、峰巒連亘す、尤も雄大なるもの南葉山、片雲起り忽にして墨を滿天に潑し、雷鼓の脚下に鳴るを聞く、曰く黑姫斜暉、赤倉山の南一溪を隔てゝ青餐すべきの峯は黑姫山なり、夕暉反照し、佳人の紅粉を粧ふがごとし、曰く遊園の鶯語、老杉、古祠を擁す、盛夏にして流鶯多し、曰く古池の蟲聲、黃茅蒙茸たり、月上り露降り、蟲聲唧々たり、曰く蓮湖明鏡、飯綱山の萬綠の中、一碧光を見る、これ蓮池なり、周圍三里、孤島あり天女祠を安す、宇佐美定行の墓あり、曰く苗澤降龍、赤倉山の麓二十餘溪を渡りて杉澤村に出づ、更に赤倉黑姫兩山の間に入り、大溪あり、即ち關川の源、信越の界なり、又行くこと一里、路險惡、溪盡きて瀑布懸る、長さ十丈、幅五丈、噴沫數十步の間に迸散す、前に巨石數人を座せしむるに

足るもの多し、瀑上更に三瀑あり、一層は一層より奇なり、曰く斑尾皎月、蓮池より北、峰巒の尤も高きものを斑尾山といふ、明月清輝を發するの時、山川の勝概歴々指點すべし、曰く關田清嗷、東の方關田の山、紅暾杲々として出で、大さ盤盂の如し、曉氣殊に晴新、夏日の畏るべきを知らず、曰く關川水霭、戸隱山より出でゝ迢々として直江津に入る、凡そ二十餘里なり、晨夕水霭淡々として水廓の景致を添ふ、曰關山汽烟、濕車の往來長烟を曳く、兵旗の風に颺るがごとし、此地上杉氏武田氏と數々戰ひしところ、曰く中山霧海、片雲起り、須臾にして中山の八驛を裹む、氣象變化尤も妙、曰く板橋稻雲、平田漠々、村落其の中に碁布す、曰く春日古壘、上杉謙信の牙城、展望尤も遙か也曰、鳥阪舊城、建仁中城資盛の源軍を防ぎしところ、下に姫河原あり、板額勇戰の處なり、曰く直江漁火、日昏れ波靜かなり、漁船爭そひ出でゝ烏賊を釣る、篝火は遙天の散星のごとし、曰く高田炊烟、春日山の南に簇々數百家あり、炊烟朝暮に擾々たり、曰く佐島青黛、佐渡の島此を距ること凡そ四十里、雲晴れ海穩やかなるの時、隱々として翠黛を見る、曰く越海白帆、米山直江津の間、紺碧染るかごとし、白帆其上を往來し、或は欲し或ひは仄す、望み甚だ悠々たり、二十勝の梗概此に盡く

日光山

例幣使街道○日光町○神橋○輪王寺○雙輪塔○東照廟○石華表○神庫○淨水盤○紫銅華表○鐘鼓樓○蟲蝕鐘○藕花燈籠○廻轉燈籠○陽明門○唐門○拜殿○殿內○本殿○堆朱柱○睡猫門○奥院○二荒神社○瀧尾神社○大猷廟○二天門○夜叉門○唐門○拜殿○黃金天蓋○皇嘉門○奥院○慈雲寺○含滿淵○靈庇閣○霧降瀧○裏見瀧○白絲瀧○鐵不動○布引瀧○馬返○鰍ヶ巢○磐若方等瀑○華嚴瀑○岩燕○中禪寺湖○中宮祠○美鱒○湯本○千手ヶ原○龍頭瀑○湯瀧○湯の湖○溫泉○日光の旅館の重なるもの小西屋、會津屋、神山等外に日光ホテル金谷ホテル、新井ホテルあり○中禪寺湖畔に泉屋、蔦屋、米屋、中村屋等あり○湯本に吉見屋、山田屋、外數軒あり○日光よりの道程霧降まで一里二十町裏見まで三十町華嚴まで三里中禪寺まで三里十町湯本まで六里、名物には羊肝、唐辛、漆器、挽物、平素麵、栗山芋子、日光下駄等あり

人巧の精華と自然の瑰麗とを集めて雙美の盛名を天下に擅まゝにせるもの獨りこの山あり、人のこの山に游ばざるもの口に華麗を言ふこと勿れ、東照、大猷の廟、二荒神社、華嚴、霧降、裏見の瀑、劍が峰、含滿の淵、

中禪寺の湖、金碧翠微、白雲青嶂と安排布置の妙を極め、春は丹櫻紫藤の美あり、秋は黄葉紅葉の觀あり、文を作るもの幾代の硯を凹磨するも、畫を作るもの一斛の丹青を揮灑するも、具さに細かに此の雙美を寫すこと能はざるべし

滊車宇都宮より分れて北に向ふて走り、所謂例幣使街道に沿ふて趣態ある長松林を行く、路の漸く高きが爲めに車歩次第に緩く、車の停まるところ則ち日光町、商舗櫛比し旅館多し

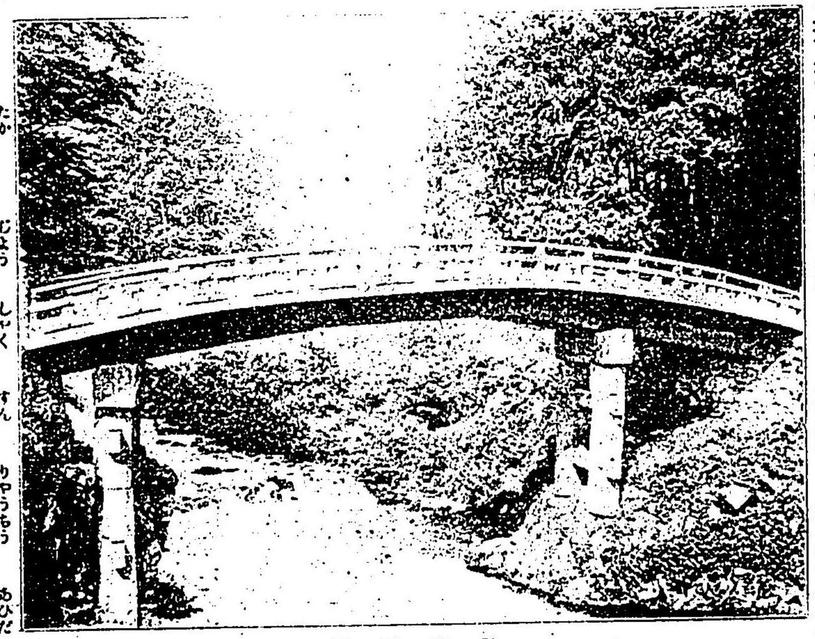
町を過ぐれば一溪の横まに道を斷ち山を抱いて奔來するあり、朱欄橋を架す、其の橋下の柱を石にし欄頭の葱寶珠を金にす、碧水と映帶して綺麗繪くが如し、神護景雲の年勝道上人、初めて此山に入る、此に至つて渉るべからず、山の靈青朱の二蛇を縱つて躍つて橋を作らしむ、蛇背潤滑にして渡るべからず、傍に白茅あるを取つて之れを布き僅かに渡ると、荒唐の語といへども亦た是佳詩なり、この橋人の渡るを許さず、橋の右十數歩にして更に一橋を架す、橋を渡れば長杉天に朝し一路甚だ幽靜、小阪を登れば粉壁邐迤して一區を繞り、隱々として堂觀の鮮麗なるを見る、是れ輪王寺なり、佛殿莊麗、更に三佛堂、雙輪塔あり、塔は古銅を

以て此を作る、其色蒼玉の如し、金瓔珞金鈴鐸を懸く、柱陰に傳教大師の願文を勒せり

輪王寺の西隣は則ち東照廟の在るところ、別格官幣社にして元和三年の創立、德川家康の薨ずるや、所謂黑衣宰相僧天海に遺命して曰く、瞑目の後先づ遺骸を久能の山に瘞め、一年の後更に日光山に葬るべしと、天海その言の如くす、

將軍乃ち秋元泰朝に命じて廟を作らしむ、將軍の威の富の力を以てする何事か成ざらん、名匠雲の如く集まり、諸侯伯また金物工役を獻じて此の大土木を助く、終に華麗天下に冠絶するの廟殿を成す、

甃石の道纖塵なし、先づ石華表を見る、高さ二丈八尺九寸、兩柱の間二



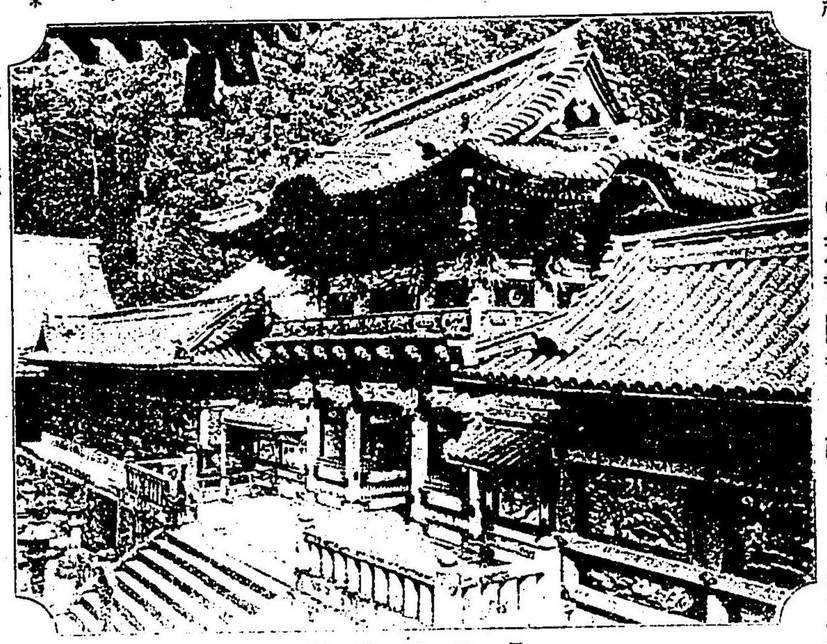
日光神橋

丈二尺、黒田長政侯の寄進するところ、封地筑前小金丸の山中より出でたるものと、扁額の東照大權現は後水尾帝の宸筆なり、賽者は皆な此の邊の茶餅を賣るもの丶家に就て、新履淨履を穿ち以て廟に詣る、石磴面を壓して起る、故二王門あり今は他に移さる、石磴を度つて進む、神庫三あり、方木を積みてこれを成る、碧銅の瓦、鈎光の桵朱、麟鳳百華を彫刻す、上庫の梁間牝牡の二象宛然生色を發せり、更に神馬廐あり、淨手盤あり、水盤は花崗石を穿つてこれを作る、長さ八尺有半、舍は十二の石柱を以て之を支ふ、天井に雲濤飛龍を繪く、水沸々として盤底より出づ、鍋島美濃守の作るところ、前に紫銅の華居あり、高さ二丈、鍍金の葵葉章を置く、更に石磴を登れば左に鐘樓右に鼓樓あり、屋削礎豐、彩色を盡す、朝鮮國貢獻するところの蟲蝕鐘あり、琉球より進獻したる藕窩燈籠あり、燭を置くこと三十六缸、更に和蘭陀國貢獻するところの廻轉燈籠あり、磴盡くれば則はち樓門、陽明門是なり、此門誠に天下の技巧彩色の精華を集む

門は廣さ二十四尺横さ十二尺、楣欄梁柱皆な聖賢哲人龍虎麟鳳百華を彫刻して丹碧紫青を彩り、間鍍金の釘板を施し、四簷に黄金の鈴鐸を懸け、

天井には狩野守信繪くところの升龍降龍を張る、壯麗精妙、看るもの唯だ嗒然として仰いで門に對し歎美の辭を忘る、日の力を盡すといへども仔細に群妙を看盡すこと能はず、誰れか曰ふ日暮しの門と

陽明門を距ること數十歩にして更に唐門あり、唐土天竺の名木を以てこれを作り毫も彩色を施さず、屋上に*香飜へり、蜂蝶もまた應に迷はんとするなるべしと、



日光陽明門

*紫銅の恙蟲を置き、柱には雙龍を刻し、楣欄楹廡皆な蟠龍奔虎聖賢天女百華を鐫す、其の門扉の如きも亦た一枚の板、上に菊花、牡丹、梅等を彫鏤し、葩蕊の微に至るも遺すといふことなし、訝疑す風吹來るの時、花搖き、陽明門より廻廊を

匝らすこと百餘間、唐門を入れば則ち拜殿、桁行十二間有半、梁間四間五尺、華麗眼を驚かす、殿内の承塵には後水尾帝の宸筆三十六歌仙を懸く、畫は土佐左近將監の筆なり、殿内を左右に劃し、右は將軍の座席、左は日光門主の座席とす、皆な異邦の名木を集めて結構したるもの、椒蘭の室に入るが如く衣袂自から香ばし、天井には天女を繪き扉楣梁柱麟鳳を鏤鐫す、絢爛人を射る、拜殿より本殿との間に石の間なるものあり、一片石廣さ二十數席を布くべし、四柱あり、太さ一拱半、堆朱なり、一柱の費黄金八萬兩と稱す、石の間の中本殿幽邃深遠、應に瑰麗の人を驚かすあるべきも、尋常の人の入ることを許さず、曾て輪王寺の宮といへども、潔齋すること七日の後にあらざれば、此に進入することを許さゞりしといふ

唐門を出で神樂殿の邊を過ぎれば、瑞垣の下一門あり、承塵に左甚五郎刻するところと稱する睡猫を置く、門より入り、石燈數百級、紫銅の寶塔立つ、これ家康の英靈長へに睡るところ、人をして氣を屏けて覺えず敬を致さしむ

二荒神社は東照宮の西數百歩のところに在り、大巳貴の命を祀る、僧勝道の創建なりしが、德川家光頽廢の祀堂を毀ちて、新殿を作り精美を盡す、青銅の華表、丹朱の舞樂殿、金碧の唐門、瑞籬長く度りて廟を匝る、廟宇莊麗柱や欄や皆な渥丹を塗り、楣廡梁簷には麟鳳花卉を刻し、五彩燦然たり、別に二荒神社の別宮瀧尾神社あり、亦た頗る壯麗、毎歳四月十七日大祭を執行し、神輿二荒を出で、瀧尾に移る、其の儀式甚だ雅樸、古意ある舞樂を奏すといふ

大猷廟は二荒神社の南に隣る、德川第三世の將軍家光の靈を祀れるところ、二王門を入り石矼を行くこと數十歩にして二天門、繪廡彩楣、其渥丹燃るが如き欄干の葱寶珠は黄金を鍍し葵葉章を鏤む、表には持國、廣目の二天裏には風雷の二神を置く奕々として活んとす、大猷院の匾額は後光明帝の震筆なり、長磴を登れば瑞垣、内に鐘樓鼓樓を含み、更に夜叉門あり、金彩爛然、毘陀羅、提陀羅、烏摩羅、阿跋摩の四夜叉を置く、獰猛人に迫らんとす、更に唐門あり、美觀東照廟中の物と伯仲す、黑漆光あり、晶然として人の眉目を鑑すべき回廊寛やかに繞り、内に拜殿あり、銷光漆の階段、朱金の勾欄、殿の中央に黄金の天蓋を懸く、鳳麟天女を鐫彫す、精美驚くべし、凡そ殿中のもの皆な鍍金、煌燿として人を

射る、唐門を出で包裏門に入り、古磴を度りて更に所謂龍宮作りの皇嘉門あり、大虻氣を吐いて描き成したる樓門の如きを以て此の名あり、天井には舞樂天女を繪き、承塵には金彩を施こし、推朱の葵葉章を置く、これを過ぎれば則ち瑩域、石欄の中青銅の寶塔立つ、家光埋骨のところ大谷川の彼岸を傍ふて行くこと五町ばかり、琳宮寂寞梵唄靜かに聞ゆ、慈雲寺といふ、これを過ぐること西北數十武にして所謂含滿の淵なるものあり、一奇岩峭立溪水を束ねて深潭となる、水の色縹綠、大渦小渦盤桓して流る、石佛數十軀あり、趺坐して潭に對す、潭光青を曳き碧を舒べて日夜寂寞を歌ひ、石佛獨り默す、「雨淋霜打して眉目銷磨せんとし、身に葛蘿の衣をまとひ面に苔髭の長きこと一寸なるなり、奇古喜こぶべし、北岸の大岩斧劈皴を成すのところ、依稀として梵字を見る、傳へ曰ふ弘法大師の此岸より筆を拋うちて書きしものと、更に溪邊に靈庇閣あり、坐して深潭を見るべし、今は荒廢す

大谷川の假橋を渡り右岸に沿ふて行き、一路邏逶登り盡せば坪所あり、鬼怒川の清瀨を望み見奥州の山と對す、老媼あり茶を賣る、賣茶亭の後より懸崖を下り蛇行すること數百歩にして、韃靼として大瀑聲を聞き、

山開き路盡きて即ち霧降瀑降る、高さ三十丈、水の初めて落つる時甚はだ廣からず、岩の水路に當るもの凡そ五層、水一層毎に其の幅を加へ其の勢

日光霧降の瀧

を増し、潭邊に至る頃はひ其の幅正に十餘丈、一激して水晶簾を垂れ二激して狼雨となり、三激四激して大沫は雹狂し、小沫は霧舞す、壯觀なり、日光より大谷川を渡り、右岸に沿ふて中禪寺湖に向ふ、凡そ一里にして大日堂の邊より、中禪寺道に別れ、左折し更に行くこと二十町許、小溪を渉れば清洒なる一茶亭を得、更に草柴を編みて作りなしたる一溪橋を渡れば、先巨鋒が岩を得、嶄然として山を拔く、溪に沿ふて行くこと二三町にして溪盡き瀑懸る、是れ裏見の瀧、瀑前に茶亭あり、亭を過ぎて蒼岩に蝸附し、先づ白絲の瀑下を過ぐ、白絲の瀑は高さ二丈許、水麻皺岩の上より落ち、新柳の雪を帶びて舞ふが如し、衣袂濕潤す、これを渡りて裏見の瀑、當頭に岩突出し、水これを壓して落つるもの十丈許、一氣に潭に入り潭これを呑む、路あり瀑背に通ず、既に瀑背に入れば洞を作し中に鐵不動佛を置く、朱鏘繪くが如し、眼を擧げて瀑を看れば、懸氷の裡に坐するが如し、これを久うして眼晴昏暈して居るべからず、誠に奇觀なり、瀑右にまた布引瀧あり、素棘を懸けたるが如し、故に名く、歸つて茶亭の木欄に凭つて瀑に對し茶を啜る、仙骨の此の身に生ずるを覺ゆ

還つて清瀧觀音堂の傍を過り、中禪寺路に出で、次第に大溪に沿ふて曲折せる山路を登る、石漸く瘦せ水漸く肥ゆ、間々飛泉と澄潭とあり、急湍これを接續す、「水韵石聲、人語を亂す、〳〵行いて馬返に至る、茶亭と旅館とを兼るの家あり、夜闌けて冷雲低く鎖して閑夢を護り、彷彿慈悲心鳥の聲を聞く、境亦た幽邃、更に深澤の中の茶屋に至る、劒が峯挺然として前に在り、欄干に凭れば九曲の溪流を一眸の下に收む、獸皮履を賣り、金華石を賣る、亭前に大磁石あり、此の邊紅葉の時尤も奇觀、これを過ぎて行くこと十數町、右方大溪を隔てゝ遙かに深樹の間より般若、方等の兩瀑の落つるを見る、大平に出でゝ行くこと四五町、路左の小逕に入れば林木疎冷、中に茶亭あり、般々として遙雷の度るを聞く、これ華嚴の瀑聲なり

懸崖の上より路は螺旋して下る、數十歩にして盡く、其の下尙ほ數百尺、竦然として毛髮を竪つ、瀑布前に當り其三の二を見る、瀑は則ち中禪寺湖の水の決せるところ、其の初めて落るや、一曲更に一曲、之字の儀をなし、大岩の缺るところに就いて乃ち急下すること五十丈、一岩の路を攔するものなく、寒劒の空に倚て立つが如し、潭に落つるに及びて

水逆上し、大なるものは驚鷺、小なるものは愕珠、其の尤も小なるもの溜々然として大霧を作し、風を生じ雲を捲き、大溪の中に狼藉す、峭壁蒼玉の如く潤ひ、溯樹皆な披靡す、石間に岩燕なるもの棲み、常に瀑前に翔翱す、凡そ山中の瀑此の瀑特に偉観なり

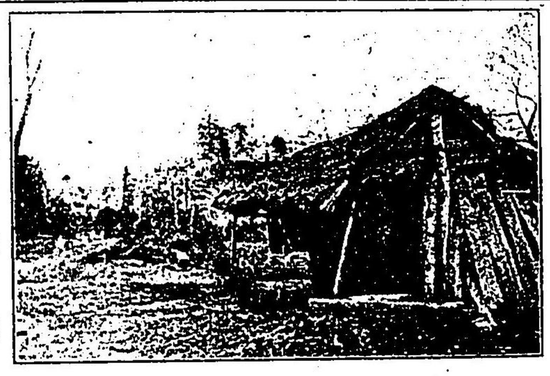
瀑を看て後更に中禪寺路に出で行くこと十數町にして則はち中禪寺湖、故補陀洛山中禪寺あり今は則はち中宮祠となる、社殿靜崇、男體山を負ひ、中禪寺湖に枕む、天近うして星河堂を浸して濕ほひ、霜清うして風鐸雲に入りて環る、立木の觀音あり、勝道上人立木に就て直ちに刀を着け彫刻するものと、高さ一丈六尺ばかり、湖は長さ三里、横は一里半より二里に至る、寂寞として碧落を浸し、倒涵の四山浮游の閑雲、洸洋として一色の瀲漪となる、若し夫れ夜闌け人定まるの時には、天地寥廓、首を擧ぐれば星斗盃よりも大なるかを疑ひ、悠然として夜雲に駕して虛明を度らんとするの想あらしむ、湖に枕みて旅亭旅館四五あり、坐して湖光を欄頭に弄あそぶべく、臥して波語を枕邊に聽くべし、湖初めは魚なし、昔年鱒子を放置するに及んで毎歳網に上る、大いさ盈尺、これを割けば肉の色珊瑚の如し味ひ尤も美、酒の好媒、湖畔に歌の濱、千手が

濱あり、風景畫くが如し、日光より中禪寺に至る凡そ三里十町、車すべくなた輸すべし、然れども徒歩の興多きに若ず

湯本は中禪寺を距ること更に三里、中宮祠の前を過り、湖畔に沿ふて行くこと十數町、男體山の麓より、古木嵯峨宛然唐畫の如き林中を行き、更に千手が原より湖と分れて右に折れ、地獄川を渡れば則はち龍頭の瀑あり、溪を下りて瀑下に至る、大石溪を塞き水怒號して下る、高さ十數丈、亦勝觀なり、更に赤沼が原を過ぎ、湯瀧を得、湯瀧は則はち湯の湖の決處、林欝けて湯の湖を露はす、水の色綠礬の如し太だ陰靜なり、湖畔の溫泉旅館簇々數十戸、溫泉は硫氣ありて稍や渾濁、口に含めば酸味あり、毎歳陰曆四月八日より九月八日に至るまで客を延き、其餘は家を鎖して去る、地の高きこと四千尺、春淺きの時、秋闌はなるの候は、寒うして居るべからず、湖は東西二十五六町南北半里許、舟を浮べて打魚すべし、盛暑の時、宵間客をして纖衣を呼ばしむ

鹽原山

入勝橋○問奇橋○箒川○瀑○大綱○白雲洞○左靱○龍化瀑○福渡戸○天狗岩○野立岩○高



鹽原の秋

尾碑○鹽の湯○一番瀧○二番瀧○三番瀧○雄飛瀑○畑下戸○普門淵○門前○姉雲寺○蓬萊橋○古町○源三穴○湯殿瀑○新湯○旅館の重もなるもの福渡戸に滿壽屋、松屋等數軒、畑下戸に佐野屋、紙屋、大和屋等數軒、門前には宮山屋、松本屋、山口屋等數軒、皆な二層三層の高樓、古町には上の會津屋、米屋、萬屋等十數軒皆な大厦、別に楓川樓あり旅亭を兼ぬ鹽の湯には明賀屋あり、那須停車場より人力車あり

箒川の水、積翠の間より流れ寒嵐冷雲の中を過りて吐月峯の麓を通じ、古町の蓬萊橋の下を渡り、妙雲寺の寺門の前を走りて行々數瀑の水を合せ、石は潤玉の如く水は碎銀の如く、迂餘曲折して南して那須野に沃ぐ、其の間湍あり潭あり峭壁あり懸岩あり、概むね溪に傍ふて溫泉の湧くもの數所、曰く福渡戸、曰く鹽釜、曰く鹽の湯、曰く須卷、曰く新湯、曰く古湯本、箒川の清瀨其の脈胳となり、曰く古町、曰く畑下戸、曰く門前、曰く景物の甚だ幽勝なるを鹽原の山となす、西那須野停車場を下りて所謂古那須野の中を過ぎ、三島村より關谷に至

り三里にして終に山に入る、先づ入勝橋を渡り、問奇橋を過り、白羽坂を登りて路傍に連理の木を看、節を植て回顧瀧を回顧橋上に回顧し、箒川の清流を左にし、仙髯瀑、連珠瀑、冷々瀑、留春瀑を右にして、終に大網に至る、一茶店と一溫泉館とあり、溫泉の湧くところは則はち箒川の溪上に在り、石間の湯、河原の湯と名づく

大網を過ぎて路の透邐するところ脚下に深潭あり、兒が淵といふ、これを過ぐれば則はち白雲洞、隧道數十歩、三島通庸の此の縣に知たりし時穿ちしもの、洞を度れば山は綠磐を疊み水は水精を湛ふ、是れより桃源に入る、隧道の右なる舊道を左靭といふ、路窄うして欹岩路右に懸る、往時武士の此處を行くもの、常に其の靭を左に負ふて過ぐ、故に名づく

と、左靭より小溪に傍ひ行くこと五六町にして龍化瀑あり、鹽原七瀑の一、瀑布分れて二段となり中間に深潭あり、水科に盈ちて復た下る、太だ奇觀なり、白雲洞を度れば右方の山中に材木岩五色石あり、溪に沿ふて紹紳の別墅多し、終に福渡戸に至る

福渡戸は山中の一小繁華、旅館山に傍ひ溪に枕み極めて風致あり、毎家に伏樋を架して溫泉を引く、窓を推せば雅峯楣を壓し閑雲入來す、而か

も其の箒川の滸岩罅より湧出する溫泉に浴すれば、誠に枕流嗽石の妙あり、福渡戸よりして行くこと四五町、峭巖雲に入ること數百仞、上に靑松の偃蹇するあり、天狗岩といふ、溪中別に大石あり水樹扶疎、野立石といふ、曾て蒲生氏郷會津に行くの途次、此の石上に露宿す故に此名ありと、石上に茶亭あり、茶烟縷々として石を繞り樹を匝る、此の景畫くに堪へたり、

鹽原溫泉

行くこと更に四町許、鹽釜の湯あり、四に山を環らす、境甚はだ幽靜、一番瀧あり、鹽の湯より鹿股川に傍ふて行くこと三十町、二瀑相ぴ懸る、右なるを咆哮といひ左なるを霹靂といふ、高さ百五十尺、幅六十尺、更に行くこと十町許にして二番瀧あり、巨巖缺甕の如く、水其の上に平布して落つ、高さ百餘尺、鹽釜より西南十町許、鹽釜ましむ

なり、傍に櫻と桂樹とあり、春風秋月、多恨の客をして悲し

幅五十餘尺、一に雷霆瀧といふ、ところに在り、高さ三百尺、直下して潭に入る、素練を懸るが如し、故に別に素練の瀧といふ、更に雄飛の瀑あり、一番瀧より行くこと三町許、右に折れて八九町、瀑布溪奥に懸る、石多く水怒り、霏々として急雪を飛し、人の瀑に對して相語る、唯だ其の唇口の搖くを見て其の聲を聞かず、七瀑中の雄偉なるもの

鹽原急流

畑下戸は鹽釜を距ること西北四町、溪を隔てゝ吉井の瀧を見る、風光優雅、濺いで碧潭となるのところ普門の淵といふ、普門は蓋し名妓高尾の弟、佛に歸し畫を善す、後此處に捨身すと

三四五六家斷續して門前に接す、門前は古町と相隣して山中の都會、學校あり郵便局あり、溫泉館あり、妙雲寺あり、平氏の西海に覆沒するや、筑後守貞能なるものあり、宇都宮朝綱と姻婭の親ある を以て、小松內府重盛の妹妙雲尼を奉じて內府が歸依する毘首竭摩刻するところ栴檀香木の釋迦如來の像を將て、來りて此山中に入り天*の潛伏して再舉を謀り、事成るに及ばずして死せしところといふ、西北

鹽原の奇巖

窟あり、鐘乳質の石自然に窟をなす、深さ二十餘間、源頼政の宇治平等院に敗死するや、其孫伊豆冠者有綱三十尺、今井が岡の上に源三命を終ふ、後寺を作りて妙雲寺といふと、寺の西、邱上に尼の墳あり、高さ十一尺、石を積むこと九層蓬萊橋を度れば則ち古町、橋上に立ちて回顧すれば、深樹の中に七弦瀑、玉振瀑を望み見るべし、旅館多くは清雄、行くこと六七町にして女夫橋あり、右に折れて溪に傍ひ山に入ること八九町にして洗心瀑あり、直下

二町の御殿山に八幡宮あり、逆杉、一節竹等社內に在り、八幡橋を過ぎて十數町、有綱神社あり、此の奥に瀉霓瀑あり、山深くして人容易にいたりがたし

門前より山を登ること八町にして須卷の湯あり、六條の木樋を架して溫泉を引き、十數尺の高きより懸けて小瀑を作る、人の來り浴するあれば、必ず一皿の糕子を饗するを例とす

新湯は古町を距ること二里、地を抽くこと太だ高く、盛暑を知らず、由來鹽原溫泉場に一羽の鴉をも見ず、獨りこの新湯に一雙雌雄の鴉を見ると、更に西北三十町にして古湯本あり、往昔は繁華なりしが萬治二年の震災の後、樓民四散し、今は僅かに一個の浴館あるのみ

鹽原の山、春には八汐の花あり、秋には丹楓あり、清風明月の夜、浴を終りて輕衫素紈涼を趁ふて溪間に金襖子を聽くまた快適、箒の川、胸中の塵事を一掃し去る

那須七湯

日本鐵道黑磯停車場より右に那珂川を渡り、松子、田代、廣谷地を經て湯川を渡れば先づ

湯本に達す、七湯中の第一なり、第二に高雄股、第三に辨天、次に北、次に大丸、次に三斗小屋、次に板室、湯本まで四里二十餘町なり、人力車を通ずべし、各湯到るところ旅館の雅潔なるものあり

那須の嶽、五峯並び立つ、茶臼峯尤も高し、海を拔くこと六千四百尺、活火山にして山巔より常に烟を吐く、嶽を匝りて七靈泉湧く、未だ湯本に至らざること半里にして笄崎の勝あり、湯本は簇々數十百家、山中の小繁華なり、湯本より十二町にして高雄股溫泉、溫泉神社あり、社後數町のところに有名なる殺生石あり、湯本より北の方一里に幾くして辨天の湯あり、窟中に辨財天を祀つる、半里にして北溫泉、蒼山四もを圍み、日三竿の時、この地は猶ほ初日の看をなす、朝の來るや遲く夕の至るや早し、夏日も午後四時にして燈を點ずと、更に行くこと十五町にして大丸湯、更に行くこと二里許にして三斗小屋に至る、三斗小屋より茶臼嶽を仰いで登れば、絶頂に噴火孔あり、山の嶮なるは信州淺間山に讓らず、健脚の人は往々其の巔を極め奥を窺ふて歸る、騁望甚だ壯快なり、三斗小屋より南四里にして板室の溫泉あり湯川に枕む、石窟あり籠石といふ、湯川に沿ふて右すれば、百村、鳴田、湯宮等の村を經て佐飛川を渉れば

關谷に出でゝ、鹽原に至るべし、板室より右して幽溪に沿いて那珂川を渡り、油井を歷て東那須野の平原を過ぎれば四里半にして再び黑磯驛に回る、これを七湯廻といふ、遞次に各處の溫泉に浴して山中に在ること數日なれば、襟懷の中、些の塵垢の氣なきに至らん

白河關北

白河關○石塔婆○白河城○關の湖○十七勝○福島○信夫公園○飯坂○摺上川○十綱橋○瞰城○石名坂○醫王寺○湯野○穴原○文字すり石○仙臺○青葉城○瑞鳳寺の廟○芭蕉辻○虛無僧芭蕉○榴ヶ岡○古櫻○宮城野○青葉神社○蒙古碑○多賀城古碑○飯坂溫泉旅館は二十有餘あり中に花水館は高敞清潔にして田舍の風なし、湯野には叶屋、綿屋、河股屋等あり穴原には古川屋和泉屋あり、仙臺の旅館は針久、安藤、菊平尤も著はる

滝車の白河驛を過ぎりて北すれば、所謂古奥州の地、曠野百里に連り名山大川多し、風景自づから雄偉なり、能因法師の『都をば霞とともに出でしかど秋風ぞ吹く』と歌ひし白河の關の趾は驛の東南三里ばかり、古關村の字旗宿といふに在り、一水濺々として流れ、路傍に白河神社あり、これ古關の趾と、兩峯迫り來りて路を扼す、松平樂翁立つるところ古關

趾の碑あり、更に數十歩にして一古碑あり、曰ふ藤原の清衡の一の關に中尊寺を創建せし時、毎一町に石卒塔婆を置く、これ其の一と、形毀損して蒋苔を生ず、車を通すべからず、唯だ籃輿あり、白河城は明治の元、會津の兵嬰守して官軍と鬪ひしところ、礮火城を火いて今は唯だ殘礎と斷壁とを存するのみ、渠車は正さに其の外壁に傍ふて走る、秋荒れて草黄に、姑鷸の落日に飛ぶの時、棲鳥の低月に啼くの際、行客をして惆悵低回して去る能はざらしむ

福島十三橋

驛の南半里にして關の湖あり、東西七町南北三町許、水色清澄にして洲渚坡丘の勝あり、曾て樂翁の白河城に主たりし時、士民諧樂のところとなす、湖畔に十七勝を作り雅名を附す、曰く關の湖、曰く共樂亭、曰く鏡山、曰く眞萩が浦、曰く錦が岡、曰く松蔭の原、曰く常磐清水、曰く松風の里、曰く月待山、曰く月見が浦、曰く下根島、曰く御鹿島、曰く千歳堤、曰く小鹿山、曰く有明崎、曰く八聲村、曰く千代の松原、游ぶもの多し

既にして路は岩代に入り福島の町に至る、町は仙臺に次ぐの都會、百貨輻湊す、阿武隈川に傍ひ椿館山に對し、曾て川に架するに十三眼の一大石橋を以てす、洪水あり推潰して橋を毀る、今は唯だ斷礎の骨立するを見るのみ、信夫山公園は『都には花もちりあへずみちのくの信夫の山は春風のころ』と歌はれしのところ、八勝あり、信夫山の秋月、洲川の落雁、小富士の暮雪、福島の晴嵐、信夫橋の夕照、黑岩の夜雨、文字摺の晩鐘、阿武隈の歸帆と、山に黑沼神社あり、招魂社あり、茂松盤櫻多し、黄昏の時吾妻山頂の烟散じて數峯の雲となり、落暉隱々として阿武隈の帆影を現す、風光また佳、而して町の西北二里許にして

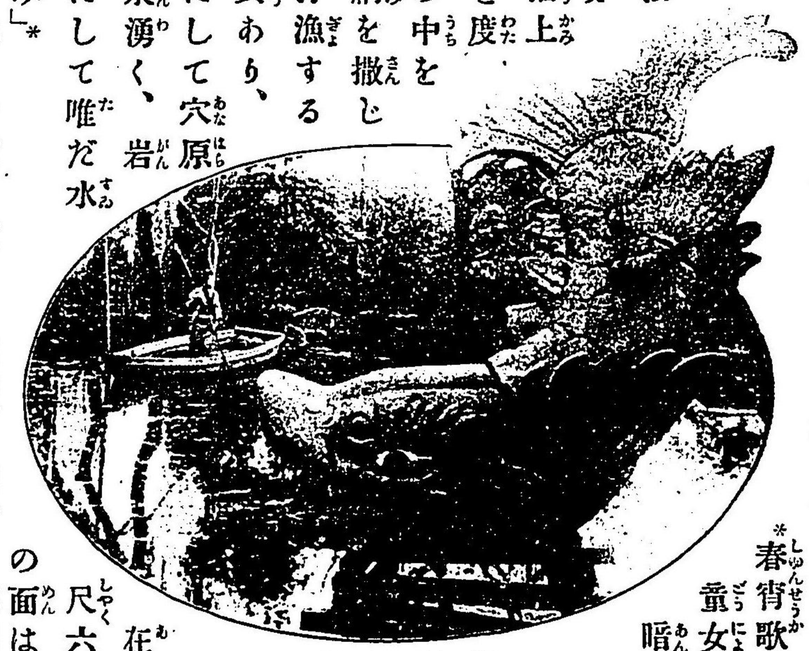
飯坂温泉

あり、飯阪町に在り、摺上川の右岸に沿ふて簇々數十家、鑛泉の湧くもの數處、鮒湖の湯、透達の湯、波古湯、瀧湯、赤川湯、金瀧湯、天王寺

湯といふ、鯖湖の湯は古の所謂三函の里と、いまだ其の然るや否やを知らず、泉畔に瑠璃光佛を安置し『あかずしてわかれしものすむ里はさはこのみゆるやまのあなたか』の古歌を勒せし小碑を立つ、白川侯樂翁の書するところ、摺上の川、水の色綠礬の如し、兩岸は峭壁竹樹甚だ清鮮、岸に倚りて個々樓館を點綴す、瀨聲室に滿ち翠微楣に映ず、川に十綱橋なるものを架す、長さ三十八間、橋下に一柱をも置かず、鐵綱數條を以て橋を空外に懸く、古歌の所謂、『陸奥の十綱の橋にくる繩はたえずも人に云ひわたすかな』なるもの是れ、俯瞰すれば清瀨雪を噴ひて夏宵趁涼の客の袖中に一斗の清風を送る、町の西に鵬城あり、里人これを佐藤館と呼ぶ、佐藤の庄司元治の居城、山高くして四顧快豁、源頼朝の藤原泰衡を伐つや、庄司元治白首にして重甲を擐ち、叔父阿部太郎高經、伊賀良目七郎高重と共に郎黨を率ひて迎へ擊ち、先づ深濠を穿ちて阿武隈の川を引き、弩を伏せて待ち、頼朝の先鋒殺到するに及びて、百弩齊しく發し、吶喊刀を環して出でゝ奮鬪し、甲隙皆な創、終に郎黨十八人と死したるのところの石名の阪は、此處を去る三里餘、伏拜といふに在り、曾つて地を穿ちて斷刀缺鏃を出せりと、平野村大字井佐野に瑠璃光

山醫王寺あり、庄司の一族の墳あり、琳宮落寞たり、源義經の太刀、直衣、辨慶の笈等を藏す

十綱橋を度れば則ち湯野村、亦た溫泉あり、摺上川の懸崖の下を度りて大石犖确の中を行き、漁夫の網を撒して鮒、岩魚を打漁するを看る、尤も興あり、行くこと一里にして穴原あり、亦た溫泉湧く、岩樹古瘦、幽邃にして唯だ水語鳥聲あるのみ」*



*春宵歌牌の嬉遊に早く童男童女の花の苔の如き口に暗唱せらるる『陸奥の信夫文字摺誰故に亂れそめにし我れならなくに』の古歌あり、文字摺石は、福島公園より東に、阿武隈川を度りて行くこと一里、岡山村大字山口なる觀音寺に在り、石は長さ一丈一尺六寸、幅六尺九寸、其の面は欹仄す、曾て石上に草花を載せ布を打て模樣を作る、綠滲し紅皺し纈纈をなす、甚だ愛すべ

し、此の石久しく、土中に埋沒せしが、近來發掘し、柵を廻らしてこれを置く

仙臺

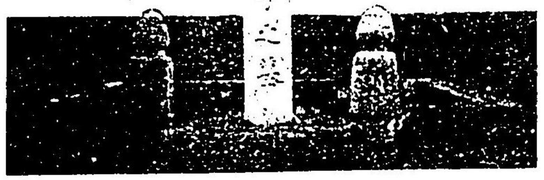
路は幾個の長短亭を過ぎりて終に陸前の仙臺市に入る、東京を距ること九十二里、東北の大鎮たり、地坊繁賑なり、廣瀨川を度れば則ち青葉の城、城は春初東風先づ吹き至りて草木の嫩綠必らず他の衆峰の魁をなすと稱するの青葉の山を負ひ、廣瀨の川を前にす、これ曾て『さんざ時雨か茅野の雨か、音もせで來て濡かゝる』を歌ふて、白河關外を横行したる梟雄伊達政宗の經營したるのところ、戊辰の時城は毀たれ、十五年の秋外城火け、唯だ大閤征韓の時肥前名護屋の本營の轅門たりしを賜ひたる城門を存するのみ、市を環つて皆な山なり、東北に和泉岳あり、西北に不忘

仙臺青葉城

山あり、北に七個峰あり、南に大白峰あり、其の缺くるところ更に山あり、南鹽釜に至れば雲濤萬里直ちに南溟に連なる、愛むべし、梟雄も止戈の時に逢ふて偉志終に蹉跎、更に圖南の鵬翼を張らんとして久しく扶搖萬里の風を待ち、心事と相違ひ、泣いて搏虎の腕を撫して小硯細筆吟咏して殘年を度りしことを、城の東經が峰なる瑞鳳寺中の瑞鳳殿に、此の豪傑貞山公の木主の嚴然として衣冠して座するを見る、瑞鳳殿の壯麗なる、世に稱して日光廟に次ぐといふ、殉死者二十餘人の墳墓は廟の左右に在り、別に前の羽林義山公の廟、感仙殿、後の羽林雄山公の廟、善應殿あり、皆な木主を置く、惜むべし戊辰の時二廟を毀つ、存するもの唯だ感仙殿の奥廟のみ

町の中央芭蕉の辻あり、層樓の市廛、結構甚はだ奇、屋上に瓦製の游龍を置き、簷端に波濤と飛兎とを置く、傳へ曰ふ虛無僧芭蕉なるものあり、政宗の爲めに其の徒と共に四方に行いて間諜す、政宗の志しを獲るに及びて大いに芭蕉の功勳を賞せんとす、芭蕉性惘懼にして且つ寡慾、辭して曰ふ臣は唯だ一柄の紫竹尺八あれば足ると、是に於て大廛を作りて芭蕉に賜ひ、其の徒と共に居らしむ、芭蕉の辻の名の起る所以

綺春繪くが如き榴が岡は、市の東字二十人町の邊に在り、この岡曾て躑躅多し、花を布帛に摺して躑躅摺りなるものを作る、紅纈纈の模樣をなし甚はだ愛すべし、今は絶えて躑躅なし、唯だ章勝寺に一株を剩すのみ、在昔坂上の田村麿、陸奥の惡路王を此の邊に擊ちて大いにこれを破り、戰後岡上に陣し馬鞭を植てゝ軍神を祭りしところ、所謂鞭建の墨なるもの是れなり、元祿八年伊達綱村大いに岡上に櫻樹を栽ゆ、今に及んで老幹合抱若くは三四抱のもの多く、凡そ數百株あり、皆な數百年外のもの、花重瓣に*し、廣瀨川の滸に櫻岡公園あり、亦た老櫻あり、大神宮の邊に政宗の朝鮮より齎らし來れる八房の梅及び般若松あり、青葉神社は市の北、北山の高丘に在り、政宗の靈を祭る、遙かに東海を見る、市を環るの山、翠



烈女淺岡之墓

*して垂枝、花時珊瑚簾を中宵より垂るゝが如し、尤とも盛觀、綱村の建つるところの釋迦堂あり、岡西更に菅公の廟あり、宮城野の曠野に接して一望百里、春闌はにして黃菜花、紫雲英、遙かに萬櫻と光彩を爭さふ、廁走の徒といへども亦た歌を作らんことを思ふなるべ

を絶き碧を舒べて皆な朝す、騁望甚だ遠し、燕澤の蒙古碑は榴が岡の北一里、案內村の邊比丘尼坂を過ぎり、燕澤村觀音堂の前に在り、字體奇古、多く缺劃をなす、元の僧祖元、弘安の四年夏五月西海に覆殲された る同邦の軍十萬の武士の冥福を修せんが爲めに、翌年の小祥期に竊かにこの碑を立てたるものと、然るや否やを知らず、更に仙臺市の次驛岩切停車場の東南二十町許、市川村の市川橋の東に、方數町に亘るの丘陵あり、謂ふ是れ古への多賀城の趾と、地を穿てば往々にして古瓦を出す、堅緻鐵の如く、これを敲けば鏗爾たり、好古の士拾ふて硯を作る、多賀城の古碑あり、覆ふに小屋を以てし、長松を栽ゆ、勒するところの文に曰く

多賀城

去京一千五百里
去蝦夷國界一百二十里
去常陸國四百十二里
去下野國界二百七十四里
去靺鞨國界三千里

此城神龜元年歲次甲子按察使兼鎭守府將軍從四位上勳四等大野朝